

第73図 SM4～SM7・SM9・SM10号周溝址

遺構は大半が攪乱され、遺物もないことから時期の特定はできないが形態規模などからはSM4～7号周溝址と時期は近いものと推定される。

8) SM8号周溝址 (第72図、図版26)

Dあ10グリットにあり、SM3号周溝に切られる。232cm程残るが他に関連する周溝が検出されていないので、SM3号溝と近い形態の周溝であったかと推定される。溝幅は残長94cm、深さ21～36cmを測る。

出土遺物には弥生式土器櫛描波状文・斜条状文の甕がある。
これらより本周溝は弥生時代後期に位置づけられよう。

9) SM9号住居址 (第73図、図版26)

Cあ3グリットにあり、円正坊ⅠのEM2で大半を、円正坊Ⅳで東一部分の周溝を調査した。H14・H20号住居址、円正坊ⅠD1号土坑に切られる。円形を呈し、北西で切れる。長軸径800cm、短軸径736cmを測る。溝幅は33~73cm、深さ9~44cmを測る。底面は平らで、逆台形である。

出土遺物は円正坊ⅠEM2より弥生式土器甕胴下部片が出土している。

これらよりH14・20号住居址より古いこと等から弥生時代後期~古墳時代中期に位置づけられよう。

10) SM10号周溝 (第73図、図版26)

Jあ1グリットにあり、H28号住居址に切られ、西は調査区域外で未調査である。南北径880cmを測り、東西は556cmを調査した。ほぼ円形を呈す。溝幅37~72cmを測り、深さ5~46cmを測る。断面は逆台形である。

出土遺物には弥生式土器片がある。赤色塗彩の壺・無彩の壺片、櫛描波状文片が10片がある。1点土師器甕片がある。

H28号住居址より旧く、土師器甕は混入品とし、弥生時代後期~古墳時代後期といえる。

11) SM11号周溝 (第74図、第47表、図版27・56)

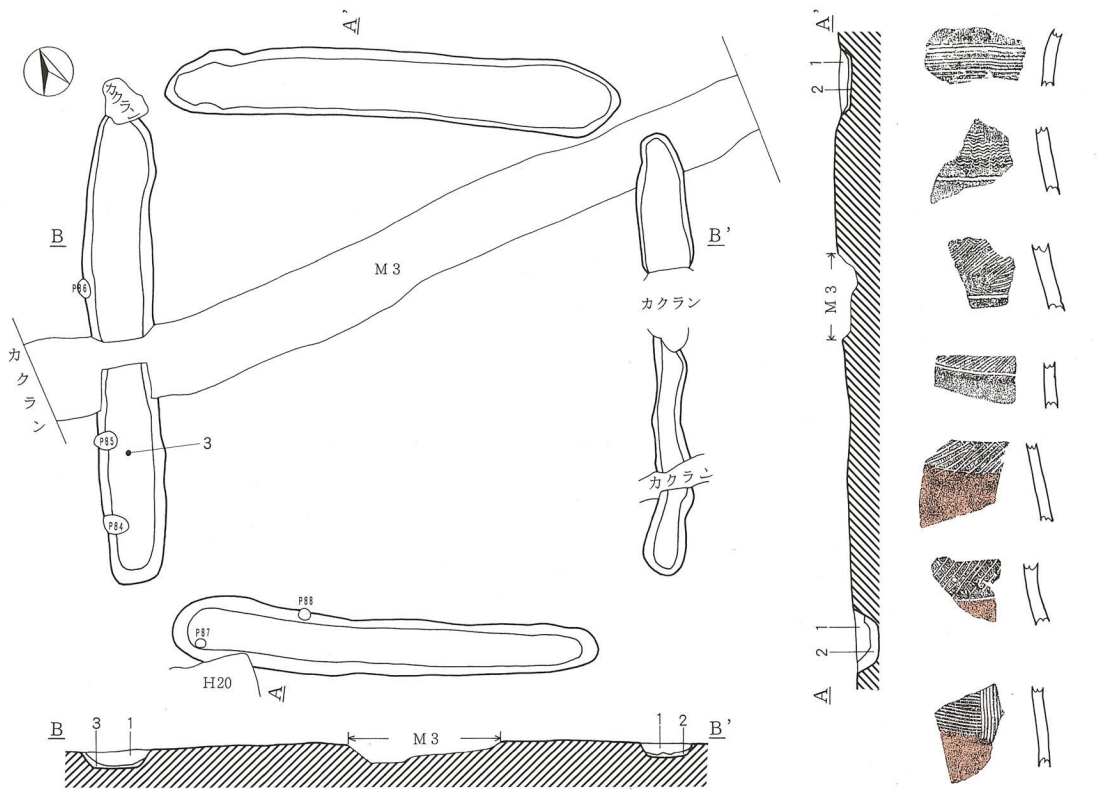
Gき10グリットにあり、H20号住居址、M3号溝址、単P83~88に切られる。4隅が切れる方形を呈する周溝である。南北長15m26cm 東西長14m94cmを測る。溝幅は65~176cm、深さ9~63cmを測る。断面形は逆台形である。

出土遺物は破片が多く出土している。土師器の混入破片もあるが大半は弥生式土器である。図示できなかったが大型の赤色塗彩・無彩の壺、赤色塗彩の高杯片などがある。南西のⅣ区からは赤色塗彩の壺片などが多くみられた。実測個体は鉢、高杯、台付き鉢、甕、土版がある。1の鉢は器高の深いものである。3は文様が施文されず、塗彩もされず、器種の判断が付かない。4は甕に太い波状文を施し、頸部の櫛描簾状文が波打っている。5の甕は口径と胴中位にある最大径が近いもので、口縁部には櫛描波状文、頸部には簾状文、胴上部には斜条痕を1段大きく施文する。拓本に示した壺形土器の頸部は櫛描T字文、羽状文などである。

これらより、本周溝は弥生時代後期に位置づけられよう。

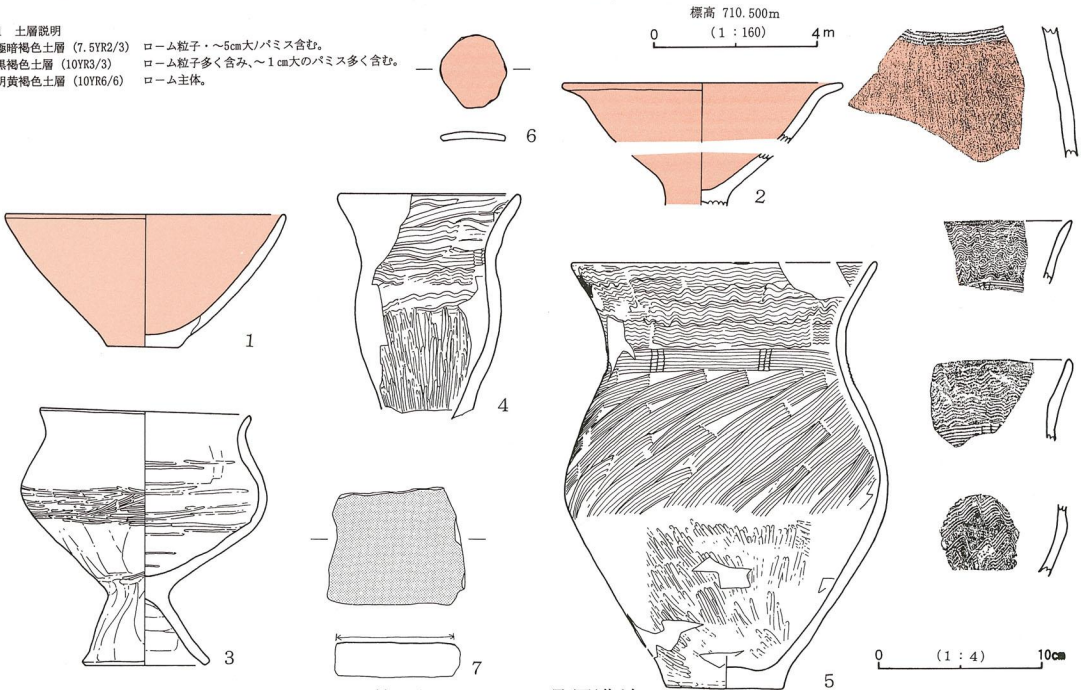
第47表 SM11号周溝址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地	
1	弥生土器 鉢	17.1 4.3 8.1	内 ミガキ→濃い赤色塗彩 外 ミガキ→濃い赤色塗彩・底部と底部外周 ミガキ	口縁部1/2残存、底部完形 内 10R5/6 (赤) 外 10R5/6 (赤)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子、赤色粒子少量含む。	Ⅲ区	
2	弥生土器 高杯	(17.2) — く	内 杯部 ミガキ→赤色塗彩 脚部 ヘラナデ 外 ミガキ→赤色塗彩	口縁部1/8残存、接合部分 内 10R4/6 (赤) 外 10R5/6 (赤)	1mmの石英・長石粒子、黒色粒子含む。	Ⅳ区	
3	土師器 台付鉢?	12.8 (7.8) 16.7	内 体部・口縁部横ナデ・胴~底部ヘラナデ →一部ミガキ 脚部 ヘラナデ 外 体部・口縁部横ナデ・胴部ヘラナデ→胴 部中央にミガキ 脚部 ヘラナデ	口縁部1/4、脚部1/4残存 内 7.5YR8/4 (浅黄橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子、少量含む。		
4	弥生土器 甕	(11.3) — <13.7>	内 ミガキ 外 胴下半ミガキ 文 口縁部 3~4本1組とする櫛描波状文 頸部 5本1組とする櫛描簾状文2連止め 胴部 3~4本1組とする櫛描波状文	口縁部1/4残存 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 7.5YR7/4 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	SM11検出 M3検出	
5	弥生土器 甕	18.7 7.2 26.2	内 ミガキ 外 胴下半・底部ミガキ 文 口縁部 7本1組とする櫛描波状文 頸部 7本1組とする櫛描簾状文 胴部 7本1組とする櫛描斜走文を施す	口縁部1/4残存、底部完形 内 7.5YR8/4 (浅黄橙) 外 7.5YR7/4 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子含む。	Ⅲ区	
6	弥生土器 円板	4.5 4.0 4.0	内 ミガキ→赤色塗彩 外 ミガキ→	完形 内 7.5R4/6 (赤) 外 7.5R4/6 (赤)	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	Ⅲ区、S	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位地
7	擦石	7.2	8.5	2.2	279	擦面あり。安山岩。	



SM11 土層説明

- 1. 極暗褐色土層 (7.5YR2/3) ローム粒子・~5cm大ノミス含む。
- 2. 黒褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子多く含む、~1cm大のノミス多く含む。
- 3. 明黄褐色土層 (10YR6/6) ローム主体。



第74図 SM11号周溝址

6. 溝址

1) M1号溝址 (第75図、第48表、図版27)

Cう8グリットからCこ9グリットまで東西方向に伸びる溝を32m98cmを調査した。両端ともに途切れている。F10号掘立柱建物址、SM2・3号周溝址、円正坊IEM1号周溝、単P63・70を切る。溝幅は36cm～90cm、深さ3～27cmを測る。東から西に低く、地形に沿っている。

出土遺物は弥生式土器、須恵器、土師器がある。実測個体はなく、弥生式土器は赤色塗彩の壺胴部片、土師器は古墳時代後期の丸胴甕口縁部、内面黒色処理の杯などある。

これらより、本溝址は古墳時代後期以降の遺物がないことから、古墳時代後期頃に位置づけられようか。

2) M2号溝址 (第75図、第48表、図版27・56)

Cこ9からFあ4グリットまで南北方向に伸びる溝である。H16・H18号住居址、F16号掘立柱建物址、SM3・6号周溝址、M3号溝址を切る。M3号溝址と交わり、そこから南にさがっている。溝幅96～184cm 深さ12～59cmを測る。溝に沿って西側はテラス状に高く、また締まっていた。道路址とみられ、本址は道路であろう。

出土遺物には弥生式土器、土師器、鉄製品がある。弥生式土器は赤色塗彩・無彩の壺、櫛描文の甕がある。土師器は古墳時代の杯、甕、平安時代の武蔵甕片がある。図示した有段口縁壺(1)、弥生式土器壺底部(2)である。鉄製品(3)は断面形が長方形呈し、鏃等の基部であろうか。

これらより、M3号溝が中世の遺物を出土していることから、本址はそれより新しく中世以降といえる。

3) M3号溝 (第75図、第49表、図版27・56・58)

Gう9グリットからDい9グリットの東西に検出された。76m13cmを調査するがまだ続いている。M2号溝址に切られ、H12・H21・H22号住居址、F16・F18号掘立柱建物址、SM3・4・7・11号周溝址を切る。また円正坊IではM1号溝址として調査され、H1・H2号住居址を切る。溝幅145～222cm、深さ13～49cmを測る。溝は南側に締まったテラスをもち、北に落ち込む。これは道路址みられるもので本址も道路址であろう。

出土遺物は弥生式土器、土師器、須恵器、磁器、スリ石、石鏃、編物石がある。弥生式土器の破片は多く、赤色塗彩の壺・杯、無彩の壺、櫛描文の甕がある。須恵器はロクロナデ、底部回転糸切り離しの杯、土師器杯底部も回転糸切りである。6は青磁蓮弁文碗である。

これらより、中世より新しい遺物はみられないが資料が少なく時期の特定は中世またはそれ以降といえる。

4) M4号溝址

Kい4～Kえ5グリットにおいて検出された。調査区西端にあり住居址が検出される台地から一段下がる低地との境にある。水路施設であろうか。湧水が激しく、水没してしてしまう。壁には木杭を打ち、横にほだ木を入れて土留めにしていたようだ。

土器等の遺物は出土していない。

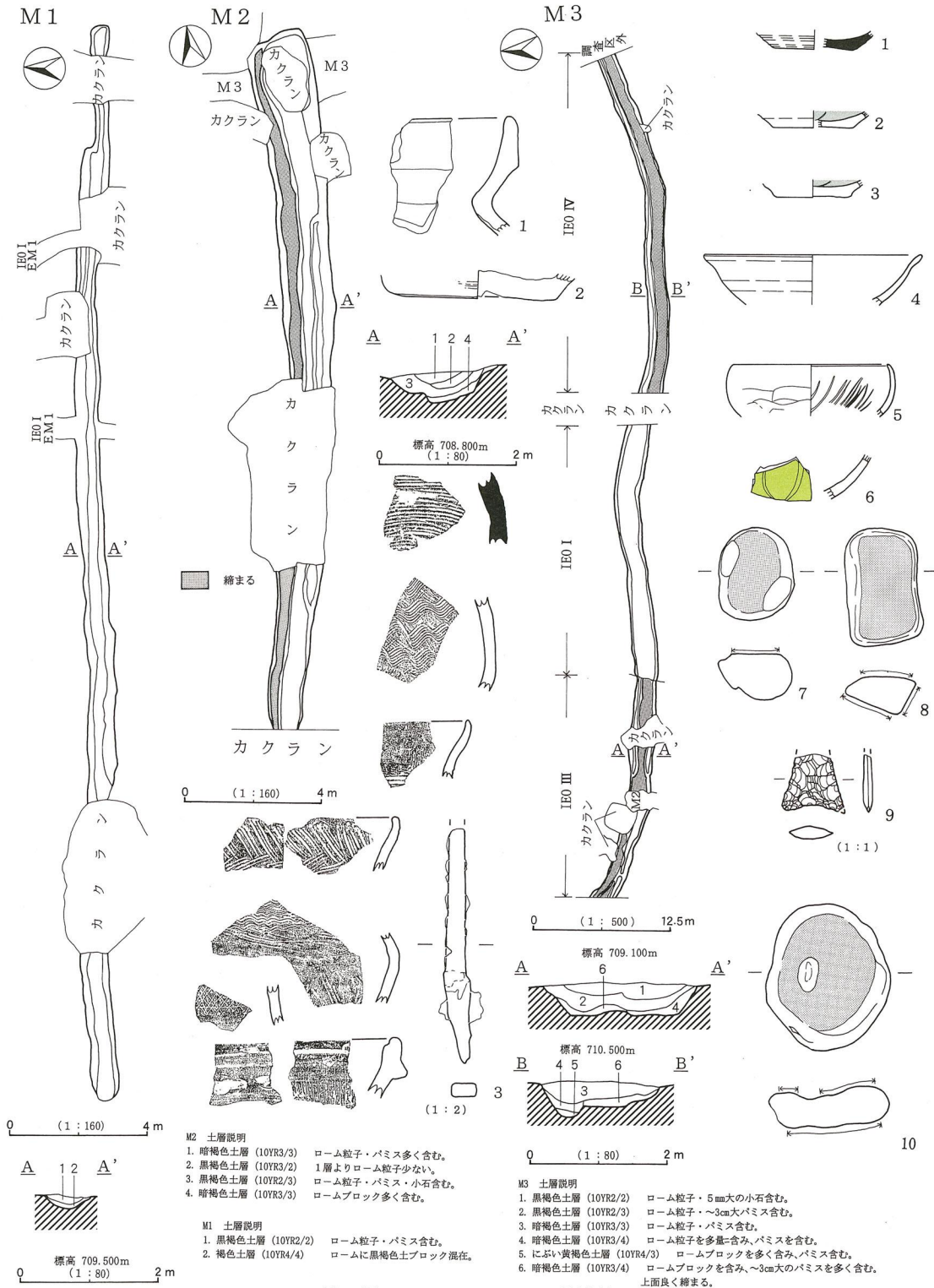
時代の特定はできない。

5) M5号溝址

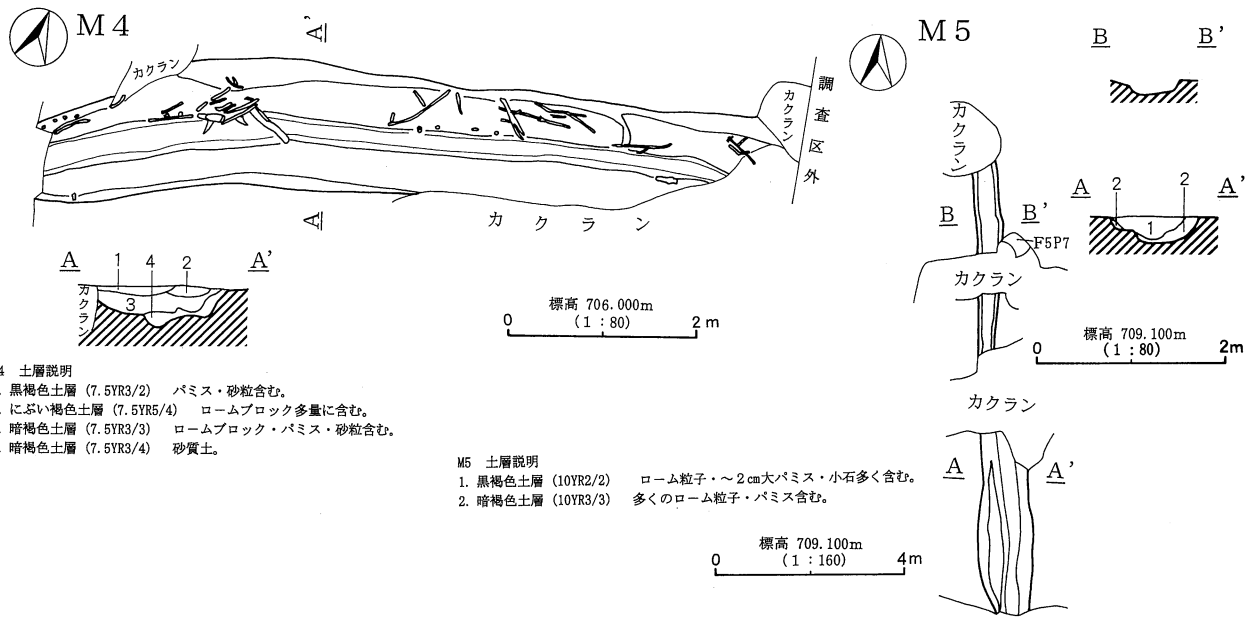
Dえ1～Dえ3の南北に伸びる溝である。F5号掘立柱建物址にきられる。攪乱に壊され北は浅くなっている。溝幅34～115cm、深さ4～32cmを測る。

出土遺物には土器が25片ある。弥生式土器赤色塗彩の高杯片、古墳時代の甕片、2片ほど平安時代須恵器杯のロクロナデ調整され、火襷の残る小片がある。

これらより攪乱も多く混入もあるので、古墳時代の甕、平安時代の須恵器杯は混入品と考えられる。F5号掘立柱建物址に切られることから古墳時代以前に位置づけられよう。



第75図 M1・M2・M3号溝址



第76図 M4・M5号溝址

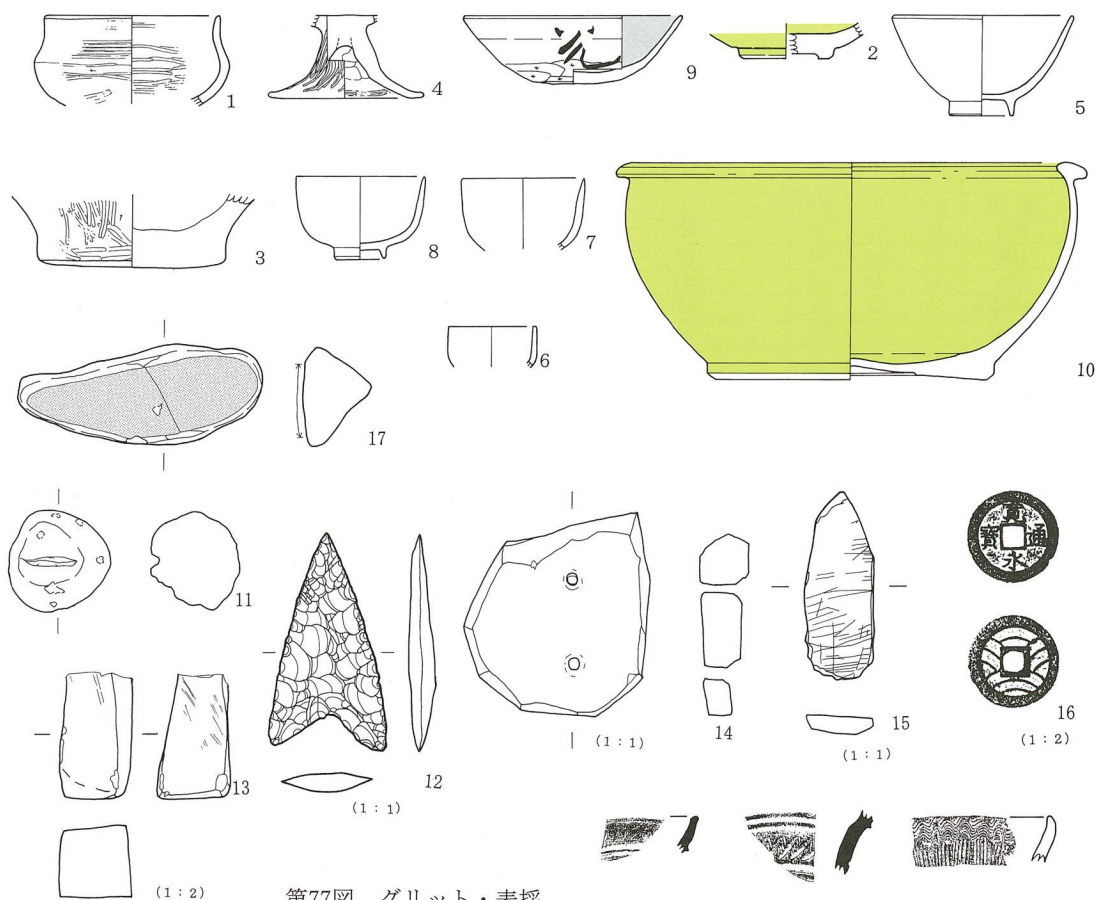
第48表 M2号溝址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整			残存量・色調		胎土・特徴	出土位地
1	土師器壺	—	内 横ナデ			破片	きめ粗い。2mm以下の石英・長石粒子多量、1mm以下の黒色粒子少量含む。	M2	
		—	外 横ナデ			内 10YR6/2 (灰黄褐)			
		—				外 2.5YR7/6 (橙)			
2	弥生壺	12.0 <2.1>	内 剥離のため判別できない			底部1/4残存	1mm以下の石英・長石粒子含む。内面剥離、外面磨耗。	M2 検出	
			外 ミガキ			内 7.5YR8/4 (浅黄橙)			
						外 7.5YR8/4 (浅黄橙)			
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考		出土位地	
3	鉄製品	<8.5>	0.9	0.5	9.1				

第49表 M3号溝址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整			残存量・色調		胎土・特徴	出土位地
1	須恵器杯	— (5.7) <1.4>	内 ロクロナデ→ナデ			底部1/3残存	1mm以下の石英・長石粒子含む。	M3	
			外 ロクロナデ→底部回転糸切り			内 5Y8/1 (灰白)			
						外 5Y8/1 (灰白)			
2	土師器杯	— (5.8) <1.3>	内 暗文→黒色処理			底部1/3残存	2mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。きめ細かい。	M3	
			外 ロクロナデ→回転糸切り			内 N4/0 (灰)			
						外 5YR7/3 (にぶい橙)			
3	土師器杯	— 5.3 <1.3>	内 十文字の暗文→黒色処理			底部3/4残存	1mm以下の黒色粒子、石英・長石粒子少量含む。	M3、1層	
			外 ロクロナデ→底部回転糸切り			内 N3/0 (暗灰)			
						外 7.5YR7/3 (にぶい橙)			
4	土師器杯	(15.8) — <3.6>	内 横ナデ			口縁部1/12残存	1mm以下の石英・長石粒子含む。	M3	
			外 横ナデ			内 10YR6/2 (灰褐)			
						外 5YR7/3 (にぶい橙)			
5	土師器杯	(11.2) — <3.8>	内 横ナデ→放射状暗文			口縁部1/6残存	緻密。	M3	
			外 横ナデ→口縁下部ヘラナデ			内 5YR7/4 (にぶい橙)			
						外 7.5YR7/4 (にぶい橙)			
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考		出土位地	
6	青磁碗	<3.0>	—	—	—	蓮弁文。			
7	編物石	8.5	5.8	2.8	218	擦面あり。安山岩。			
8	擦石	6.7	5.5	3.3	55	軽石。		2層	
9	石鏃	<1.1>	1.2	0.2	<0.2>	黒曜石。先端欠。逆刺片側欠。			
10	編物石	10.7	9.1	3.0		スリ面あり。安山岩。			

7. グリッド・表彩遺物



第77図 グリッド・表採

第50表 グリッド・表採・遺物出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 杯	(10.8) — <5.4>	内 横ナデ→ミガキ 外 底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ→ミガキ	口縁部1/8残存 内 2.5YR6/4 (にぶい橙) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子含む。	IうG 検出
2	青磁 碗	— (5.8) <2.2>	ロクロ成形→底部回転糸切り	底部1/5残存 釉 2.5GY8/1 (灰白) 地 7.5Y8/1 (灰白)	緻密。	Cき3 検出
3	土師器 壺	— (11.4) <4.4>	内 剥離して判別できない 外 胴下半ヘラケズリ→ミガキ・底部ヘラナ	底部2/3残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	2.5mm以下の赤色粒子を多量、 1mm以下の石英・長石粒子少量 含む。内面剥離。	Eあ1G 検出
4	土師器 高杯	— (9.6) <5.1>	内 杯部 ミガキ 外 脚裾部横ナデ→脚注部ヘラナデ 脚裾部横ナデ→脚注部ミガキ	底部1/3残存 内 2.5YR7/6 (橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	緻密。	表採
5	白磁 碗	(11.2) 4.0 5.1		底部完形		Fあ4 カクラン
6	鉄釉小杯 碗	(5.4) — <2.5>		口縁部1/4残存		Fあ4 カクラン
7	白磁 碗	(7.6) — <4.3>		口縁部1/4残存		Fあ4 M2カクラン

第50表 グリット・表採・遺物出土遺物一覧表

8	白磁碗	7.9 3.2 5.1				ほぼ完形		Fあ4 M2検出
9	土師器杯	13.4 5.5 4.1	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ・底部と底部外周手持ちへラケズリ			完形 内 N1.5/0 (黒) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子・赤色粒子含む。墨書あり。	Iう7G
10	陶器捏鉢	(28.8) (17.6) 13.2				口縁部2/3、底部3/4残存 釉 2.5GY8/1 (灰白) 地 7.5Y7/1 (灰白)		Fあ4 カクラン 表採
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考		出土位地
11	浮子	6.2	6.2	5.4	8.0	軽石製。		Dう4
12	石鏝	3.3	1.9	0.4	1.7	(黒曜石)		検出
13	砥石	<3.8>	2.2	2.2	<27.7>	(凝灰岩)		
14	石製模造品	3.1	2.9	0.8	9.2	滑石製。		表採
15	未製品	2.9	1.1	0.3	1.1	片岩製。		カクラン
16	寛永通宝	2.8	—	—	4.5			
17	編物石	14.9	6.2	4.2	80	スリ面あり。安山岩		Dう4

検出面からは、弥生式土器、古墳時代須恵器・土師器、平安時代須恵器・土師器が出土している。5～8・10の近代陶磁器は南端の削平された地点からまとまって出土したもので、国鉄の官舎があった頃のものであろう。

枇杷坂遺跡群 円正坊遺跡 I

所在地	佐久市大字岩村田字円正坊1283-1 他		
調査委託者	佐久市土地開発公社		
開発事業	日本道路公団東京第二建設局佐久工事事務所仮設工事		
調査期間	昭和59年11月12日～12月20日		
調査面積	460m ²		
調査担当者	林 幸彦、島田恵子、三石宗一		
検出遺構	竪穴住居址	古墳時代後期	5棟
		平安時代	1棟
	土坑		4基
	周溝址		7基
	溝		2本
	単独ピット		20個

遺構と遺物

竪穴住居址6棟の内3棟とEM2号円形周溝、M1号溝は円正坊IVと同一の遺構なので円正坊IVに掲載されている。

H3号住居址→円正坊IV H20号住居址

H5号住居址→円正坊IV H13号住居址

H6号住居址→円正坊IV H14号住居址

EM2号円形周溝→円正坊IV S M9号周溝址

M1号溝址→円正坊IV M3号溝址

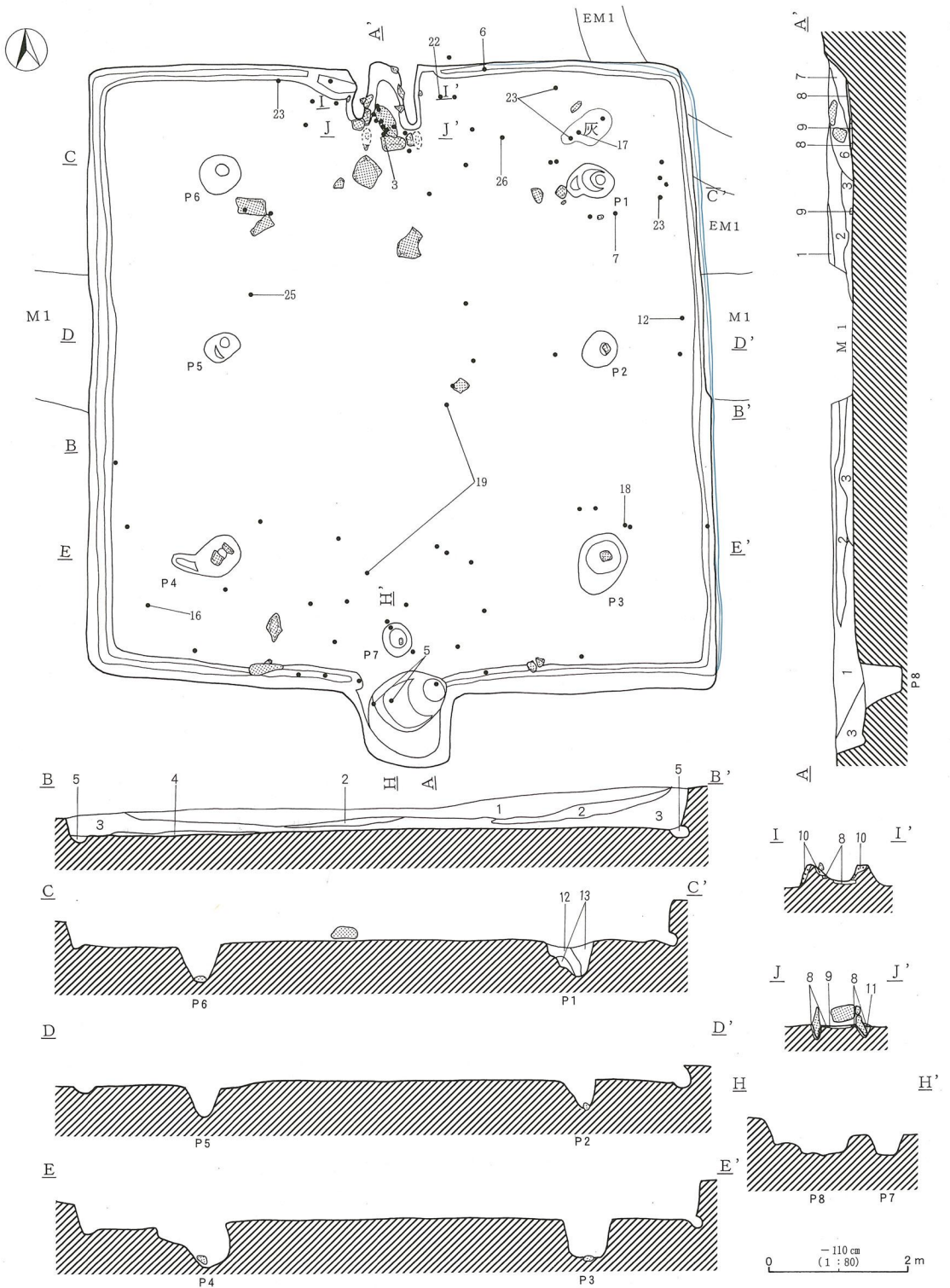
1. 竪穴住居址

1) H1号住居址 (第78～80図、第51表、図版29・60・61)

Cお9グリットにあり、M1号溝に切られ、EM7号周溝址を切る。(EM1号周溝址と重複し切られると調査時はなっている。しかしながら、EM1号周溝址の本址の重複地点から底部は欠損するが、完形品に近い古墳時代後期の土師器甕が出土している。本住居址の土器群と同時期であることなど新旧は逆ではないかと推測される。)本址は柱穴のセクションが西に傾斜しており、地盤のずれがあった住居址であろう。主軸方位N-3°-Eではほぼ北を指す。南北860cm、東西823cmと南北に長い方形を呈する。南壁中央には南北100cm、東西130cmを測る方形の張り出しを持ち、床面には短径80cm、深さ64cmピットがある。主柱穴は6本検出されている。カマドは地山のロームを掘り残し袖とし、その先端に石を立て、横に石を置いてカマドを構築したようである。

出土遺物には須恵器、土師器、弥生式土器、砥石、編物石がある。須恵器は壺口縁(1)と杯蓋(2)がある。長頸壺は口縁部が大きく外傾外反し、頸部と口縁の境の稜は、鋭利ではなく断面長方形の細紐状である。2の杯蓋は扁平で丸味のある天井で、外面は2/3程回転ヘラケズリされる。口縁と天井部との境は、沈線が施される。TK10号窯式に類似する。土師器は杯(3～11・13)、高杯(14)、鉢(12・15～17)、小型甕(18)、丸胴甕(19・20)、長胴甕(24)、甌(22・23)がある。7を除く3～10の杯は浅い丸底から内外に稜を持って、口縁部が大きく外傾外反するもので、内外面ミガキ、内面は黒色処理される。7の杯は丸底から明確な外稜を持って、口縁が外傾外反し、端部が内湾する。調整は口縁部内外面横ナデされ、外面底部はヘラケズリのままである。H2号住居址にも、やや大振りだが同器形の杯(H2. 11)がある。11の杯は扁平で、丸底から中位に曖昧な稜線を持って口縁が直立する。内外ミガキ調整である。14は暗文をもつ高杯脚部で前代の混入品であろう。24の甕は口縁部は外反気味で、口径と胴最大径が同じである。胴部外面の調整は、ヘラナデで、丁寧である。甌は1孔で、器面にはミガキが施される。

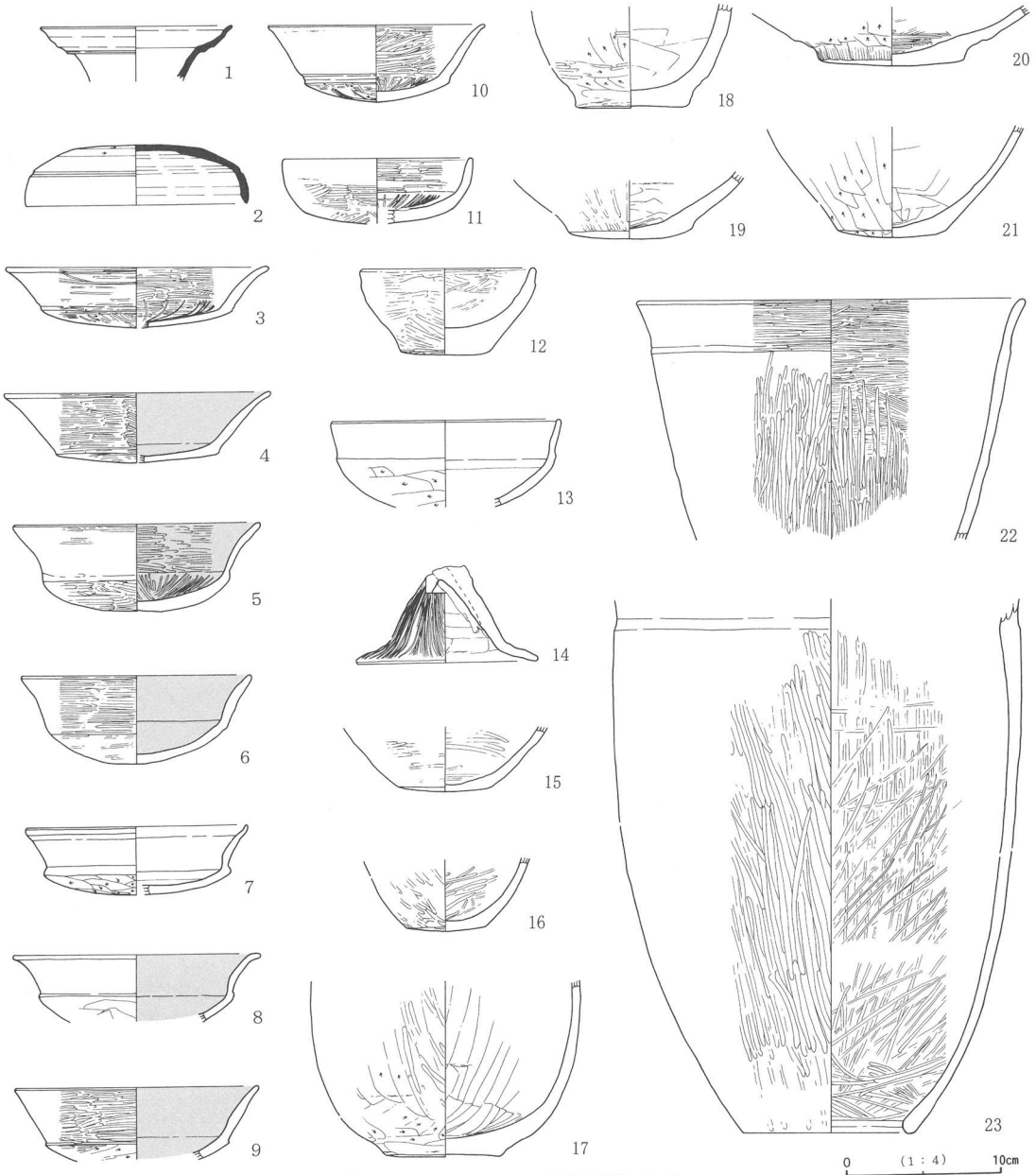
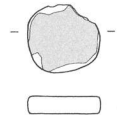
これらより本址は古墳時代後期に位置づけられよう。



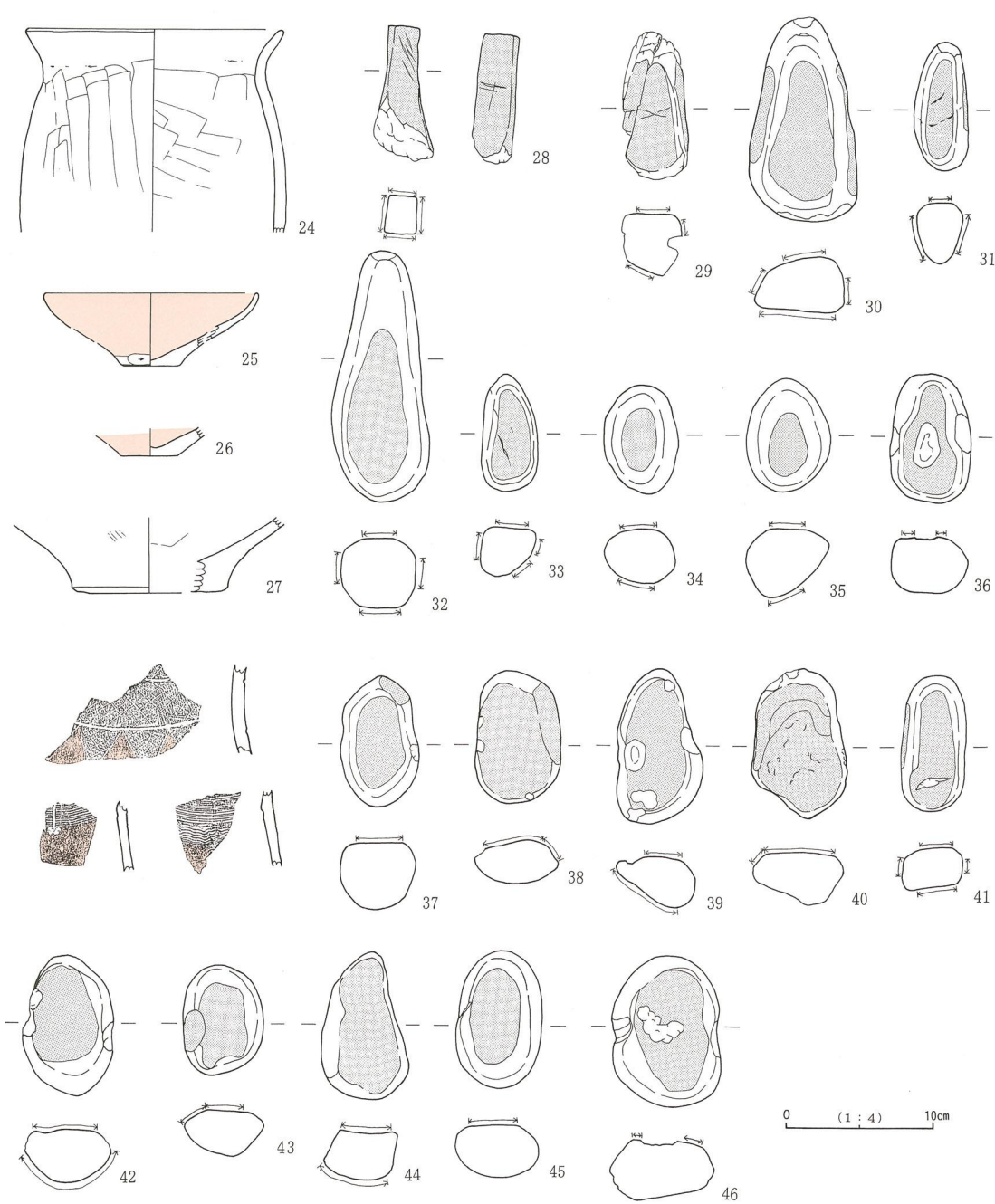
第78图 IEO I H 1号住居址 (1)

H1 土層説明

1. 褐色土 粒子細かく粘性小。黄白色ローム、軽石1~3cm大を多量に含む。炭化粒子微量混。しまりある層。
2. 黄色土 粒子細かく粘性小。黄白色ロームを基調としたロームのブロック層で褐色土少量と軽石1~3cm多量に含む。しまりある層。
3. 黒褐色土 粒子細かく粘性中。黄白色ローム少量と1~3cm大の軽石少量混中。炭化粒子微量混(褐色土の中に黒色土を含んだ層)やソフトな層。
4. 黄褐色土 粒子細かく粘性中。黄白色ロームを基本としたブロック層で1~2cm大の軽石と褐色土を含む。しまりある層。
5. 暗褐色土 粒子細かく粘性中。黄白色ロームを多量に含んだ層。しまりある固い層。
6. 灰褐色土 粘土多量、焼土少量混入。(カマド崩壊層) 下面は焼けて赤色。
7. 暗赤色土 焼土、炭化粒子、灰、混入。(黒味があった赤色土)
8. 黒褐色土 焼土、灰、ロームを含む。カマド場方埋土。
9. 焼土。
10. 粘土層。
11. 黒褐色土、褐色土をブロックで含む。(はり床)
12. 黒色土 粒子粗く粘性弱。5mmの小石、5cm大の軽石、黄色ロームブロック状に含む。
13. 暗褐色土 粒子粗く粘性弱。5mmの小石、2cm大の軽石、肌色ローム多量混入。



第79図 IEO I H 1号住居址(2)



第80图 IEO I H 1号住居址 (3)

第51表 I E O I H 1号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器 長頸壺	(12.4) — <3.5>	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	口縁部1/8残存 内 N5/0 (灰) 外 N5/0 (灰)	石英・長石、輝石を含む。	カマド
2	須恵器 蓋	(14.4) — 3.9	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ	口縁部1/16残存 内 N6/0 (灰) 外 N6/0 (灰)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 外面に自然釉付着。	Ⅱ区、Ⅲ区 EM1 覆土
3	土師器 杯	(17.0) (12.4) 3.9	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/3残存 内 2.5YR6/6 (橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	石英・長石を含む。	I区、カマド
4	土師器 杯	(17.2) (10.6) <4.5>	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部ミガキ・底部ヘラケズリ	口縁部・底部1/2残存 内 N4/0 (灰) 外 2.5YR7/6 (淡赤橙)	石英・長石を含む。	カマド
5	土師器 杯	16.0 12.1 5.7	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部2/3残存 内 N1.5/0 (黒) 外 5YR7/6 (橙)	石英・長石を含む。	
6	土師器 杯	14.9 — 5.7	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部2/3残存 内 N2/0 (黒) 外 5YR5/6 (明赤褐)	石英・長石含む。	Ⅲ区、Ⅳ区
7	土師器 杯	(14.4) (6.2) 4.4	内 みこみ部ナデ→口縁部横ナデ 外 底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部1/4残存 内 7.5YR8/4 (浅黄橙) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	石英・長石、チャートを含む。	
8	土師器 杯	(16.0) (12.6) <4.4>	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 N3/0 (暗灰) 外 7.5YR7/2 (明褐灰)	石英・長石を含む。	Ⅱ区
9	土師器 杯	(15.8) (11.9) <4.7>	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部1/4残存 内 N4/0 (灰) 外 10YR8/2 (灰白)	石英・長石含む。	南張り出し
10	土師器 杯	(14.2) (9.4) 4.9	内 ミガキ 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ→わずかにミガキ	口縁部1/8残存 内 2.5YR6/6 (橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	石英・長石を含む。	I区、カマド
11	土師器 杯	(12.4) — <4.2>	内 ミガキ・暗文状ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/8残存 内 2.5YR6/6 (橙) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙)	石英・長石、土器片(?)含む。	カマド
12	土師器 鉢	(11.5) 5.8 5.6	内 ヘラナデ→わずかにミガキ 外 口縁・底部ミガキ	口縁部1/5残存、底部完形 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	石英、土器片を含む。	
13	土師器 杯	(15.0) (14.2) <5.6>	内 みこみ部ヘラナデ→口縁部横ナデ 外 底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部1/4残存 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 7.5YR7/3 (にぶい橙)	石英・長石を含む。	I区
14	土師器 高杯	— (11.8) <6.2>	内 脚注部ヘラナデ・裾部横ナデ 外 暗文状ミガキ	裾部1/7残存 内 2.5YR7/4 (淡赤橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	石英・長石含む。	Ⅲ区
15	土師器 鉢	— (6.2) <4.2>	内 ヘラナデ→ミガキ 外 ヘラケズリ→胴・底部ミガキ	底部3/4残存 内 5YR7/3 (にぶい橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	石英・長石、輝石含む。	I区、Ⅱ区
16	土師器 鉢	— 5.1 <4.6>	内 ミガキ 外 ヘラケズリ→胴・底部ミガキ	底部完形 内 5YR8/3 (淡橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	石英・長石、角閃石含む。	Ⅲ区
17	土師器 鉢	— 7.5 <11.4>	内 ヘラナデ 外 胴部ミガキ・底部ハケナデ?	底部完形 内 10YR8/2 (灰白) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	石英・長石含む。	カマド、覆土
18	土師器 小型甕	— 7.5 <6.5>	内 ヘラナデ 外 胴部ヘラケズリ→ミガキ・底部木葉痕あり	底部完形 内 7.5YR6/3 (にぶい褐) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	石英・長石、土器片(?)含む。	
19	土師器 甕	— 8.1 <4.3>	内 ヘラナデ 外 胴部ミガキ・底部磨耗著しく判別できない	底部完形 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	石英・長石、輝石を含む。	
20	土師器 甕	— (9.4) <3.8>	内 ヘラナデ(柀目) 外 胴部ヘラナデ(柀目)→ヘラケズリ・底部ヘラナデ	底部1/2残存 内 5YR5/6 (明赤褐) 外 7.5YR6/6 (橙)	石英・長石、輝石を含む。	カマド
21	土師器 甕	— 7.0 <7.1>	内 ヘラナデ 外 胴部ヘラケズリ・底部ヘラナデ	底部完形 内 10YR5/2 (灰黄褐) 外 10YR7/4 (にぶい黄橙)	石英・長石、土器片(?)含む。	カマド
22	土師器 瓶	(25.2) — <15.5>	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/8残存 内 7.5YR8/4 (浅黄橙) 外 7.5YR8/4 (浅黄橙)	石英・長石を含む。	I区、Ⅱ区 カマド
23	土師器 瓶	— (11.1) <34.5>	内 ミガキ 外 ヘラケズリ→ミガキ	底部1/4残存 内 2.5YR6/6 (橙) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙)	石英・長石、輝石、土器片を含む。	カマド

第51表 I E O I H 1号住居址出土遺物一覧表

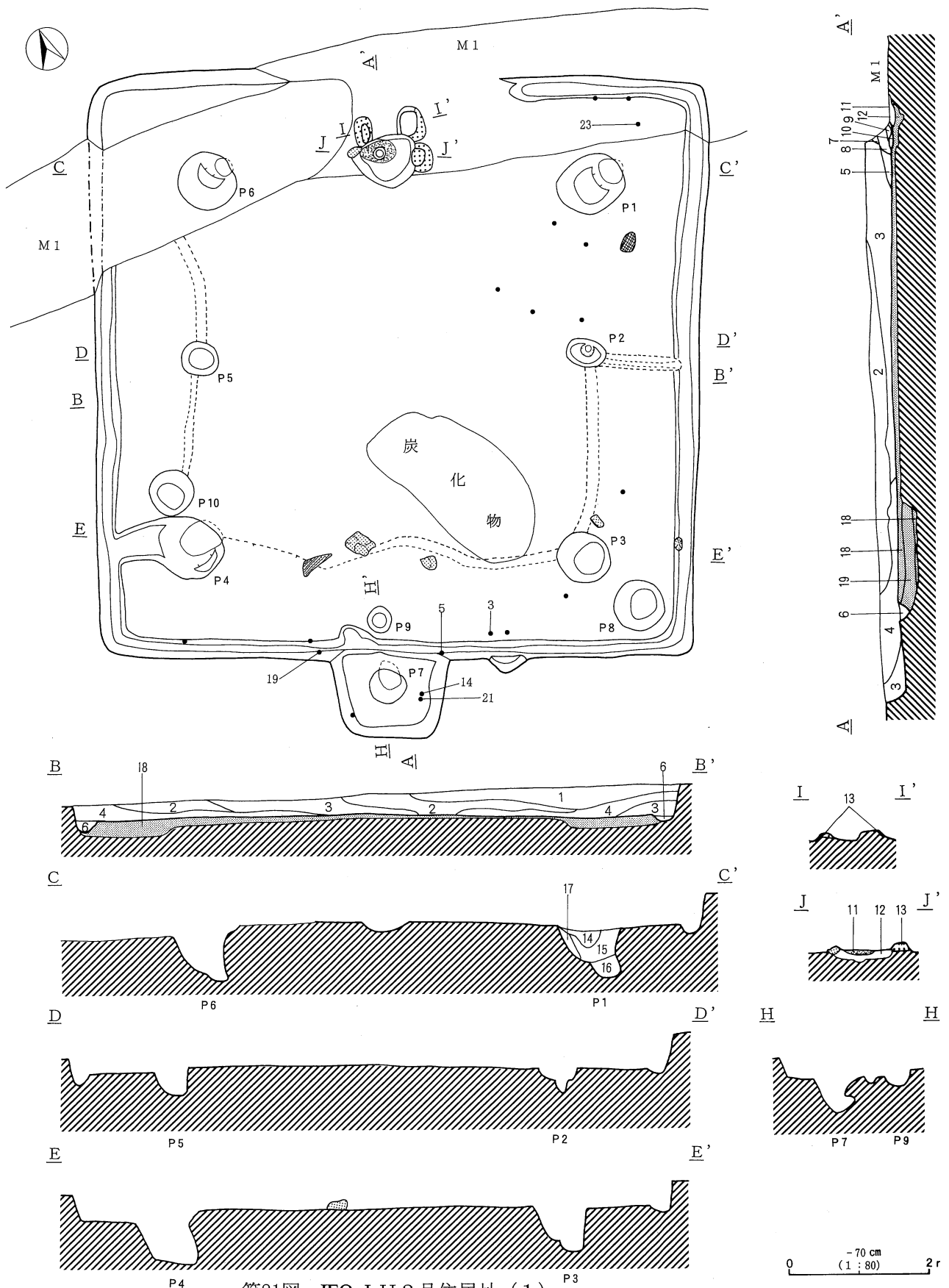
24	土師器 長頸甕	(17.6) — <13.7>	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ			口縁部1/3残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 2.5YR7/6 (橙)	石英・長石含む。	カマド
25	弥生土器 杯	(14.6) (4.0) 4.9	内 ミガキ・濃い赤色塗彩 外 胴部ミガキ・濃い赤色塗彩・底部と底部 外周ヘラケズリ			口縁部・底部1/4残存 内 10R6/4 (にぶい赤橙) 外 10R6/4 (にぶい赤橙)	石英・長石、輝石を含む。	I区 Nベルト
26	弥生土器 杯	— 3.9 <1.9>	内 ミガキ・濃い赤色塗彩 外 胴部ミガキ・濃い赤色塗彩・底部ミガキ			底部完形 内 10R6/4 (にぶい赤橙) 外 10R6/4 (にぶい赤橙)	石英・長石を含む。	
27	弥生土器 壺	— (10.6) <5.1>	内 ヘラナデ 外 胴部ミガキ・底部ヘラナデ			底部1/4残存 内 7.5YR8/1 (灰白) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙) 7.5YR8/4 (浅黄橙)	石英・長石を含む。 外面磨耗。	床下、II区
47	土製円板	4.4 <4.0> 1.1	表 黒色処理 裏 ハケナデ			一部欠損 表 N5/0 (灰) 裏 10YR8/3 (浅黄橙)	石英・長石を含む。 二次利用。	EWベルト
番号	種 類	長さ	巾	厚さ	g	備 考		出土位地
28	砥石	9.0	4.1	2.6	115	凝灰岩。		
29	編物石	10.0	4.5	4.2	265	砂岩。擦面あり。		
30	編物石	13.8	7.5	3.7	512	安山岩。擦面あり。		
31	編物石	8.7	3.6	4.0	170	安山岩。擦面あり。両端に剥離あり。		
32	編物石	16.9	6.6	4.8	805	安山岩。擦面あり。		
33	編物石	7.9	4.0	3.3	155	安山岩。擦面あり。		
34	編物石	7.4	5.1	3.8	190	安山岩。擦面あり。		
35	編物石	7.6	5.8	4.7	295	安山岩。擦面あり。		
36	編物石	8.8	5.4	3.8	260	安山岩。擦面あり。		
37	編物石	8.9	5.4	4.6	295	安山岩。擦面あり。		
38	編物石	9.0	5.9	3.0	235	安山岩。擦面あり。		
39	編物石	10.5	5.9	3.5	220	安山岩。擦面あり。		
40	編物石	10.1	6.6	3.6	265	安山岩。擦面あり。		
41	編物石	9.2	4.4	2.9	190	チャート。擦面あり。		
42	編物石	9.6	6.2	3.7	272	安山岩。擦面あり。		
43	編物石	8.0	5.5	3.1	156	安山岩。擦面あり。		
44	編物石	10.0	6.1	3.4	247	安山岩。擦面あり。		
45	編物石	9.3	5.9	3.5	300	砂岩。擦面あり。		
46	編物石	10.1	7.5	4.1	212	軽石。擦面あり。		

2) H 2号住居址 (第81~83図、第52表、図版29・61・62)

Cい10グリットにあり、M1号溝址に切られ、西で、M3号溝址・D4土坑を切る。本址も地盤のズレを受けているらしく柱穴のセクションが西に傾斜している。主軸方位はN-25°-Eを指す。南北長800cm、東西長804cmの方形を呈し、南壁中央に張り出しを持つ。張り出しは南北120cm、東西150cmを測り、南が短い台形状を呈す。張り出し中央床面には径56cm、深さ50cmのピットがある。主柱穴は6本で中央の2本は浅い。カマドはM1号溝址に上面を壊され、火床部が残っていた。

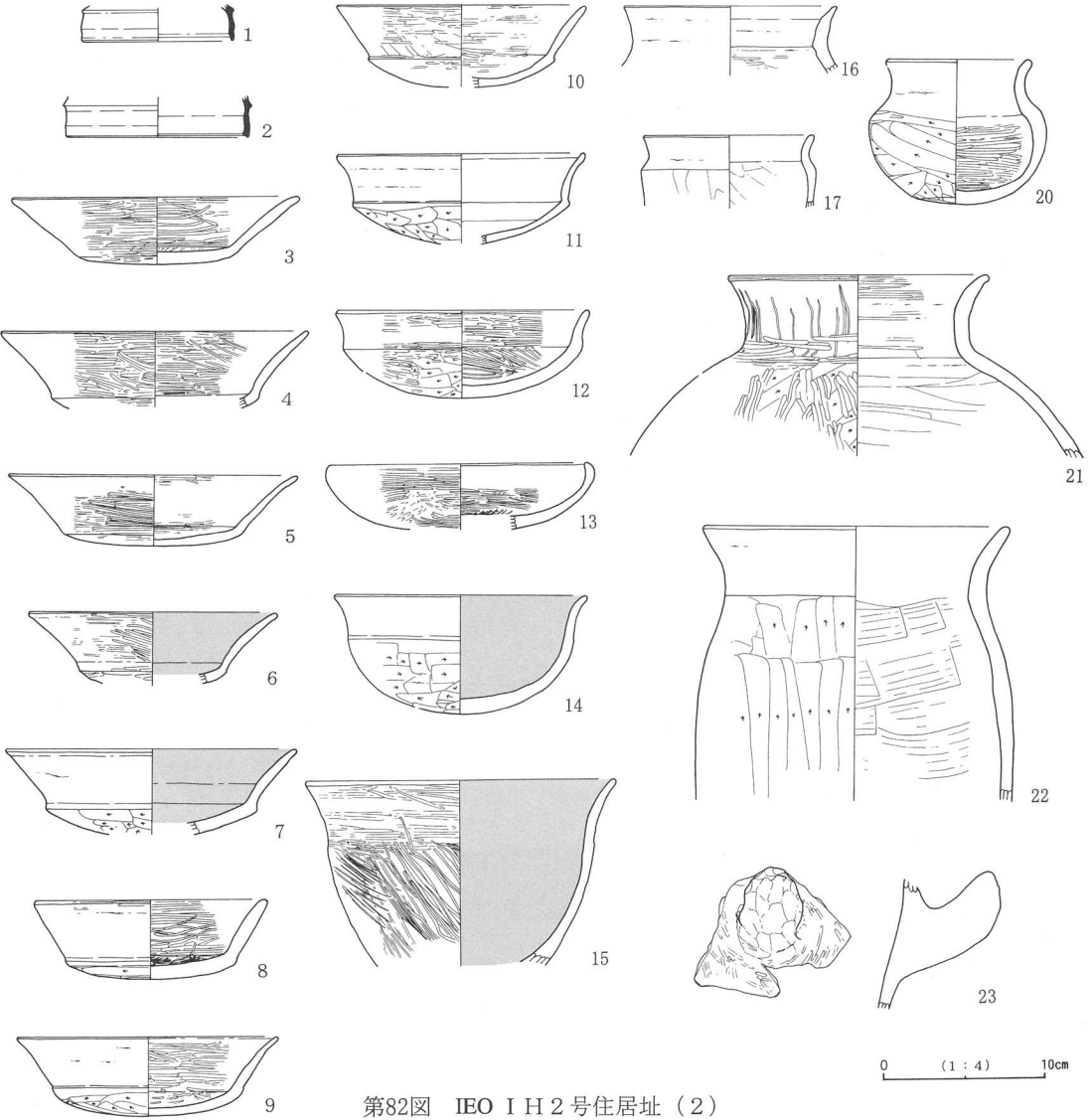
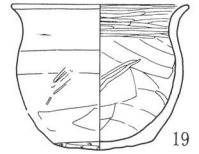
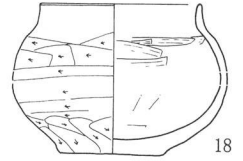
出土遺物は弥生式土器、須恵器、土師器、砥石(27・30)、編物石(26~29)がある。須恵器は杯蓋(1・2)と甕がある。杯蓋は小片であり、混入品であろうか。口縁端部は段を持ち、天井部との境は三角形の短くとがった稜をもつ。土師器は杯(3~13)、鉢(14~20)、丸胴甕(21)、長胴甕(22・24)、甑(23)がある。3~10の杯は、浅い丸底の底部から、内外に稜を持って口縁が大きく外傾外反するものである。内外ミガキ調整され、内面は黒色処理されるものとされないものがある。12の杯は丸底から中位で曖昧な稜を持って口縁が外反するもので、厚く、ミガキも雑である。13は全体に内湾する杯で、扁平である。内外ミガキ調整される。

本址の土器はH1号住居址と同期で、本址は古墳時代後期に位置づけられよう。

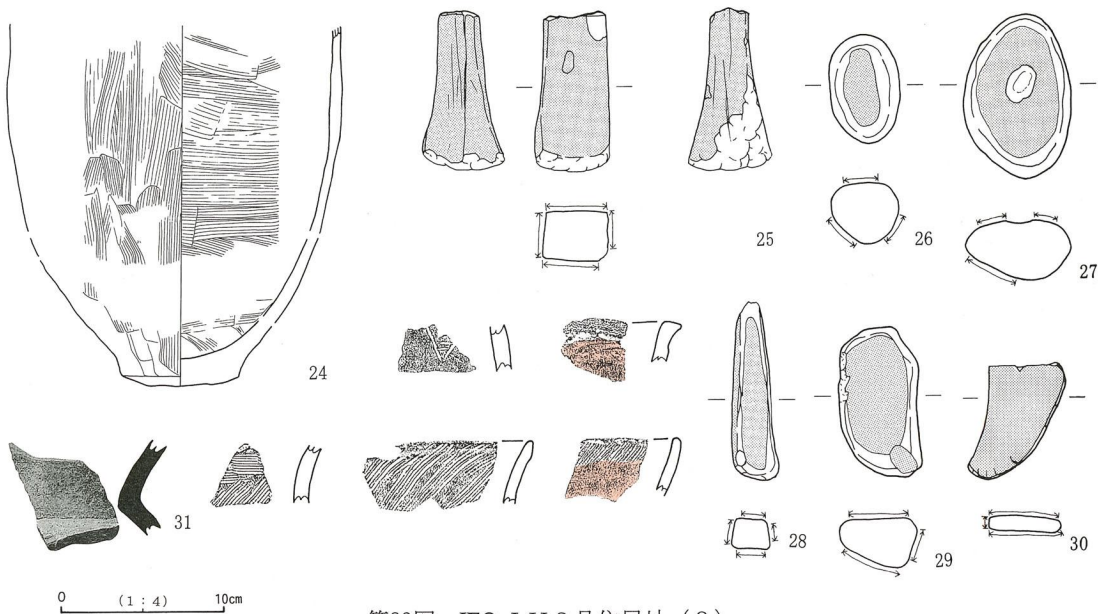


H2 土層説明

1. 褐色土 粒子粗く砂質性。5mm大の小石粒子、1~3cm大の軽石、黄白色ローム多量混入、炭化粒子微量含む。(固くしまりがある層)
2. 暗褐色土 粒子粗く粘性小。5mm大の小石粒子、1~3cm大の軽石、黄白色ローム多量混入、炭化粒子微量含む。(固くしまりがある層)
3. 黒褐色土 粒子細かく粘性中。黄白色ローム少量と1~2cm大の軽石、炭化粒子少量含む。(ソフトでやしまりある層)
4. 黒色土 粒子細かく粘性小。黄白色ローム少量と1cm大の軽石、5mm大の小石少量、炭化粒子微量含む。(固くしまりがある)
5. 赤褐色土 粒子緻密粘性中。焼土、炭化粒子多量混入。(熱をうけたソフトな層)
6. 周溝
7. 暗褐色土 粒子緻密粘性中。軽石(5mm~2cm)焼土、粘土、炭化粒子微量混入。固い。
8. 褐色土 粒子緻密粘性中。軽石(5mm~1cm)焼土、粘土、炭化粒子微量混入。固い。
9. 灰色土 灰。
10. 赤褐色土 灰、焼土、炭化粒子混入。
11. 赤色土 焼土。
12. 明褐色土 焼土、炭化粒子微量、軽石(1cm大)少量と黄白色ローム少量含む。
13. 赤灰褐色土 焼土が焼ける。
14. 暗褐色土 粒子細かく粘性中。5mm大の小石、1cm大の軽石少量混入。(柱痕)
15. 褐色土 粒子粗く粘性小。5mm大の小石、1cm大の軽石少量混入。黄色ローム多量に含む。(ビット場方埋土)
16. 黒色土 粒子粗く粘性小。5mm大の小石、1cm大の軽石少量混入。黄色ローム多量に含む。(ビット場方埋土)
17. 明褐色土 粒子粗く粘性小。5mm大の小石、1cm大の軽石少量混入。黄色ローム多量に含む。(ビット場方埋土)
18. 黒褐色土 黒色土と褐色土のまだらなしみこみ。
19. 黄白色土 ローム地山。



第82図 IEO I H 2号住居址(2)



第83図 IEO I H 2号住居址 (3)

第52表 IEO I H 2号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土地
1	須恵器 蓋	(9.4) (9.4) <2.2>	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	口縁部1/8残存 内 N6/0 (灰) 外 N6/0 (灰)	石英・長石を含む。	I区
2	須恵器 蓋	11.2 — 2.5	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	口縁部1/8残存 内 N6/0 (灰) 外 N6/0 (灰)	緻密。	
3	土師器 杯	17.8 9.8 4.1	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/2、底部4/5残存 内 5YR8/4 (淡橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	石英・長石、輝石を含む。 内面、磨滅。	
4	土師器 杯	(19.0) (12.8) <4.7>	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/5残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	石英、土器片を含む。	I区
5	土師器 杯	17.8 11.0 4.3	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部3/4残存 内 7.5YR6/6 (橙) 外 5YR6/8 (橙)	石英・長石を含む。 内面、剥離。	
6	土師器 杯	(15.2) (9.0) <4.3>	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ →ミガキ	口縁部1/4残存 内 N2/0 (黒) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	石英・長石、土器片(?)含む。	I区
7	土師器 杯	(18.0) (13.0) <5.2>	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	口縁部1/6残存 内 N2/0 (黒) 外 5YR5/6 (明赤褐)	石英・長石を含む。	カマド
8	土師器 杯	(14.3) (10.6) 4.8	内 ミガキ みこみ部暗文(黒色処理か) 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内 2.5YR6/6 (橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	石英・長石を含む。	カマド
9	土師器 杯	(16.1) (11.8) 4.8	内 ミガキ 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内 5YR8/3 (淡橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	石英・長石、土器片(?)含む。	カマド
10	土師器 杯	(15.4) (11.6) 5.0	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/5残存 内 5YR8/4 (淡橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	石英・長石を含む。	I区
11	土師器 杯	(15.4) (13.4) <5.5>	内 みこみ部ナデ→口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	口縁部1/3残存 内 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	石英・長石を含む。	
12	土師器 杯	(15.6) (14.6) 5.4	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/2残存 内 2.5YR4/8 (赤褐) 外 2.5YR3/6 (暗赤褐色)	石英・長石を含む。	カマド

第52表 I E O I H 2号住居址出土遺物一覧表

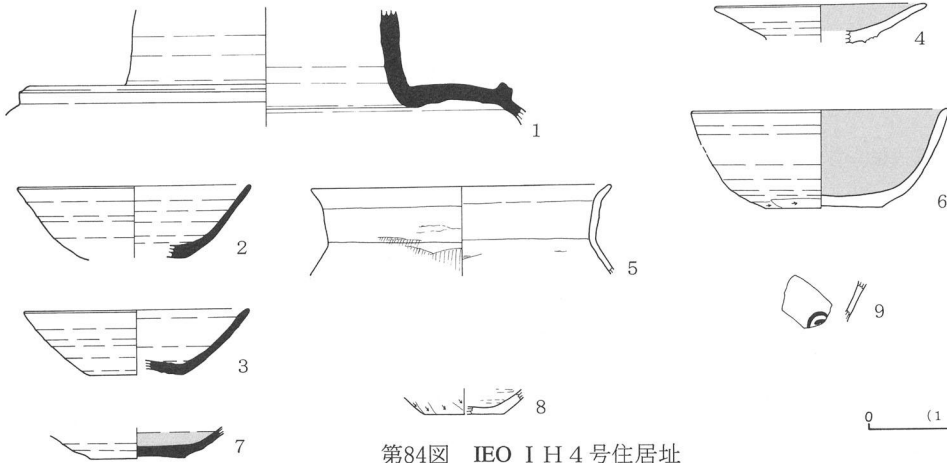
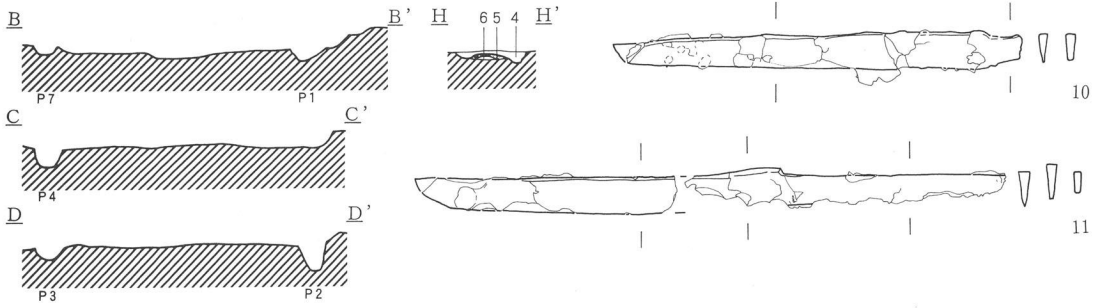
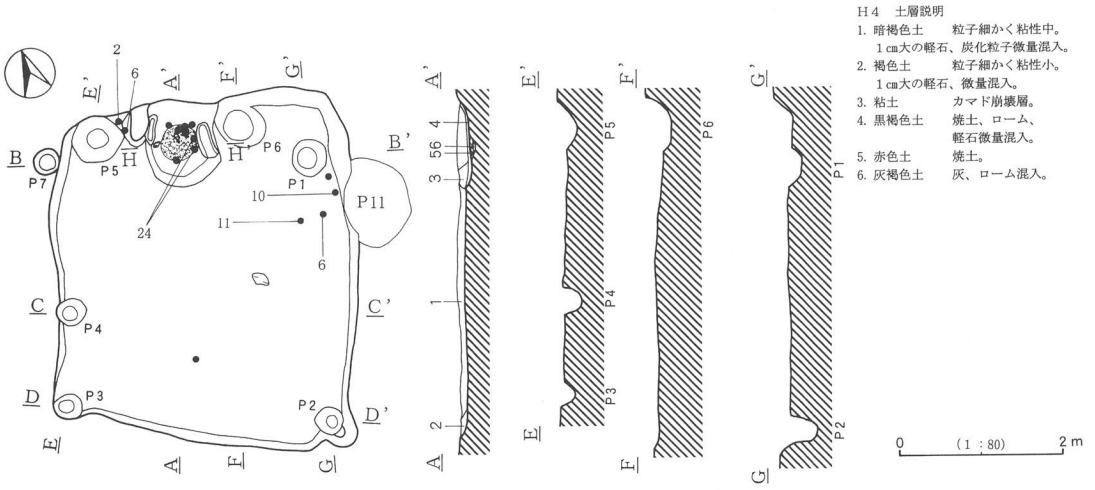
13	土師器 杯	(16.6) — <4.0>	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/8残存 内 10YR8/2 (灰白) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	石英・長石を含む。	カマド	
14	土師器 鉢	(15.6) — 7.3	内 ミガキ→黑色処理 外 胴～底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部1/3残存 内 N3/0 (暗灰) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	石英・長石を含む。	入り口貯蔵穴	
15	土師器 鉢	(19.2) — <11.4>	内 ミガキ→黑色処理 外 ミガキ (→黑色処理?)	口縁部1/3残存 内 N3/0 (暗灰) 外 N3/0 (暗灰) 7.5YR6/3 (にぶい褐)	緻密。石英を含む。	IV区、カマド	
16	土師器 甕	(13.0) — <4.1>	内 口縁部横ナデ・胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ	口縁部1/6残存 内 5YR6/2 (灰褐) 外 5YR5/1 (褐灰)	石英・長石、輝石を含む。	I区	
17	土師器 鉢	(10.6) — <4.5>	内 口縁部横ナデ・胴部ヘラナデ 外 胴部ヘラナデ→口縁部横ナデ	口縁部1/5残存 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 10YR8/3 (浅黄橙)	石英・土器片(?)を含む。	III区	
18	土師器 鉢	(10.0) 6.1 9.2	内 口縁部横ナデ→胴～底部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴・底部ヘラケズリ	口縁部1/2、底部完形 内 2.5YR5/4 (にぶい赤褐) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙)	石英・長石、土器片(?)を含む。	III区、IV区 入り口貯蔵穴	
19	土師器 鉢	(10.8) 6.0 8.8	内 口縁部横ナデ・胴～底部ヘラナデ→一部 ミガキ 外 口縁部横ナデ・胴・底部ミガキ 底部ヘラケズリ	口縁部2/3、底部完形 内 7.5YR4/2 (灰褐) 外 7.5YR5/2 (灰褐)	石英・長石、土器片(?)を含む。 外面、磨耗著しい。	III区、IV区	
20	土師器 鉢	(9.0) — 8.8	内 口縁部横ナデ・胴～底部ミガキ 外 口縁部横ナデ・胴～底部ヘラケズリ→ミ ガキ	ほぼ完形 内 5YR8/4 (淡橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	石英・長石を含む。	IV区	
21	土師器 甕	16.1 — <11.2>	内 口縁部横ナデ→ミガキ・胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部完形 内 2.5YR7/4 (淡赤橙) 外 2.5YR7/6 (橙)	石英・長石を含む。		
22	土師器 甕	(19.0) — <16.9>	内 口縁部横ナデ・胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ	口縁部1/6残存 内 5YR8/4 (淡橙) 外 7.5YR8/4 (浅黄橙)	石英、輝石を含む。	カマド	
23	土師器 甕 把手	— — —	内 ミガキ 外 把手ナデ・胴部ミガキ	外耳のみ残存 内 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 7.5YR8/4 (浅黄橙)	石英、輝石を含む。	II区	
24	土師器 甕	— 7.1 <22.0>	内 胴部ハケナデ・底部ヘラナデ 外 胴部ハケナデ・底部ヘラナデ	底部完形 内 7.5YR5/2 (灰褐) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	石英・長石、輝石を含む。 底部に布目痕?残る。	I区、カマド	
番号	種 類	長さ	巾	厚さ	g	備 考	出土位地
25	砥石	9.7	4.6	3.1	260	凝灰岩。	
26	擦石	6.7	4.4	3.8	150	安山岩。	
27	擦石	10.1	6.5	3.6	185	軽石。	
28	磨石	10.9	3.0	1.9	95	黒色緻密安山岩。	
29	編物石	9.2	5.1	3.1	208	砂岩。擦面あり。	
30	砥石	7.1	5.9	1.1	55	砂岩。	

3) H 4号住居址 (第84図、第53表、図版30・62)

Eえ2グリットにあり、EM3号周溝を切り、単P11に切られ、単P12・13との新旧は不明である。南北長402cm、東西長352cmを測り、南北長い長方形を呈す。カマドは北壁にあり、主軸方位N-20°-Eを指す。カマドは火床部が残存し焼土が残っていた。カマドの両脇には径50~60cm、深さ10~14cmの円形のピットがあった。壁に沿ってP1~4・P7の壁柱穴がみられた。

出土遺物には須恵器、土師器、鉄製品がある。須恵器は四耳壺の肩部(1)、杯(2・3・7)がある。須恵器杯はロクロナデで、底部回転糸切りである。灰白色を呈し、軟質なものである。7は内面はロクロナデ後黒色処理がなされ、外面は灰白を呈す。土師器であるかもしれない。土師器は皿(4)、甕(5・8)、杯(6・9)がある。4の皿は高台を欠損し、内面ミガキ黒色処理される。5・8の甕は武蔵甕で、器肉は薄く、口縁部形態は「コ」字形を呈する。6の杯は器高が深いもので、内面はミガキ黒色処理、底部は回転糸切りである。9は6と同タイプの杯片であるが、外面に墨書が残る。鉄製品が2点あり、刀子である。11の刀子は先端をわずかに欠損するものの、長さ18.2cmを測り、ほぼ全長を残す。10は刃部の長さが11cmを測り、10の刀子と同じ数値であることから同様の刀子であったろう。

これらより、本住居址は平安時代前半に位置するものであろう。



第84図 IEO I H 4号住居址

第53表 I E O I H 4号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整			残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器 四耳壺	— — <7.2>	内	口縁部横ナデ・胴部ナデ		破片	石英・長石、輝石を含む。	床上
			外	口縁部横ナデ・肩部タタキ目 →横ナデ		内 N5/0 (灰) 外 N5/0 (灰)		
2	須恵器 杯	(14.2) (6.2) 4.4	内	ロクロナデ		口縁部1/4残存	石英、輝石を含む。	
			外	ロクロナデ→底部回転糸切り		内 2.5Y7/1 (灰白) 外 2.5Y7/1 (灰白)		
3	須恵器 杯	(13.8) (6.0) 3.9	内	ロクロナデ		口縁部1/8残存	石英、輝石を含む。	
			外	ロクロナデ→底部回転糸切り		内 N7/0 (灰白) 外 N7/0 (灰白)		
4	土師器 皿	(13.2) — <2.4>	内	ミガキ→黒色処理		口縁部1/3残存	石英・長石、土器片(?)を含む。	床上
			外	ロクロナデ→底部切り離し→高台貼付		内 7.5YR2/1 (黒) 外 5YR5/6 (明褐色)		
5	土師器 甕	(18.4) — <5.5>	内	口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ		口縁部1/6残存	石英・長石を含む。	覆土
			外	口縁部横ナデ→胴部ハケナデ		内 2.5YR4/3 (にぶい赤褐) 外 7.5YR5/3 (にぶい褐)		
6	土師器 杯	15.8 7.0 5.9	内	ミガキ→黒色処理		口縁部1/2残存、底部完形	石英、土器片(?)を含む。	カマド
			外	ロクロナデ→底部回転糸切り		内 5YR5/1 (褐灰) 外 5YR8/4 (淡橙)		
7	須恵器 杯	— (5.8) <1.9>	内	ロクロナデ→黒色処理		底部1/4残存	石英・長石を含む。	東
			外	ロクロナデ→底部回転糸切り		内 10YR5/1 (褐灰) 外 2.5Y8/2 (灰白)		
8	土師器 甕	— (4.9) <1.6>	内	ヘラナデ		底部1/4残存	石英・長石を含む。	覆土
			外	胴・底部ヘラケズリ		内 5YR5/3 (にぶい赤褐) 外 7.5YR7/2 (明褐灰)		
9	土師器 杯	— — —	内	ミガキ→黒色処理		破片	石英・長石を含む。 墨書あり。	覆土
			外	ロクロナデ		内 10Y7/1 (灰白) 外 7.5YR7/4 (にぶい橙)		
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考		出土位地
10	刀子	<12.0>	0.9	0.2	11.8			
11	刀子	<18.2>	1.1	0.3	15.3			

2. 単独ピット

20個のピットが検出された。詳細は遺構一覧表を参照されたい。

3. 土坑

D2・D4号土坑は遺物がないので、遺構一覧表を参照されたい。

1) D1号土坑 (第85図)

Eい4グリットにあり、円形を呈し、径156cm、深さ46cmを測る。新旧関係はEM2号周溝址・H6号住居址を切る。

出土遺物は弥生式土器が大半である。赤色塗彩の壺、高杯、無彩の壺片、櫛描波状文の甕がある。1点土師器杯の丸底から全体が内湾する古墳時代後期の杯があるが、混入であろう。

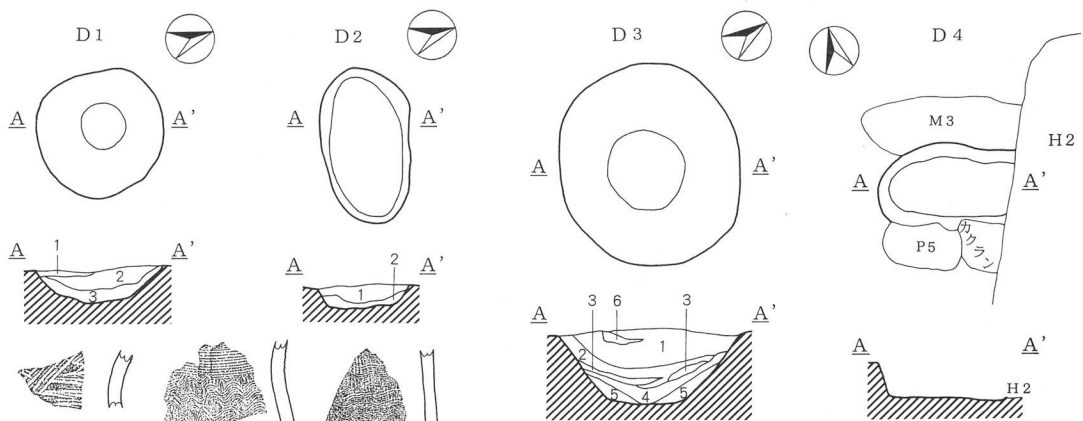
これらより、弥生時代後期の土器が主体であり、H6号住居址が古墳時代後期初頭とするとそれより新しいものである。土器はEM2号周溝と同期であり、EM2号周溝址の遺物であろうか。

2) D3号土坑 (第85図、図版30)

Eお2グリットにあり、円形を呈す。EM3・4号周溝址を切る。径248cm 深さ93cmを測る。

出土遺物には弥生式土器、土師器がある。弥生式土器は赤色の壺・杯・甕がある。土師器は杯・甕がある。杯は和泉型の杯片である。

これらより、古墳時代中期末～後期以降の年代が当てられる。



D 1 土層説明

1. 漆黒色土 粒子緻密粘性中。5mm～1cm大の軽石を微量に混入。
2. 黒色土 粒子緻密粘性中。黄色ローム少量、5mm～5cm大の軽石、5mm～1cm大の小石を少量含む。
3. 褐色土 粒子細かく粘性小。黄色ローム多量、1～3cm大の軽石を少量含む。(やわらかい層)

D 2 土層説明

1. 黒褐色土 粒子緻密粘性中。5mm大の小石、黄色ローム、1～3cm大の軽石を少量混入。
2. 褐色土 粒子緻密粘性小。黄色ロームを多量、1～3cm大の軽石を少量混入。

D 3 土層説明

1. 褐色土 粒子細かく粘性中。黄色ローム粒子、5mm～2cm大の軽石を多量に混入、黒色土を斑点状(3～5cm)を含む。(ソフトな層)
2. 黒褐色土 粒子細かく粘性中。黄色ローム粒子少量、軽石を微量混入。(黒色土多量を含む) ややしりある層。
3. 黄色土 粒子細かく粘性小。黄色ロームを多量に含んだブロック層、2cm大の軽石を少量含む。(しりある層)
4. 黒色土 粒子緻密粘性中。黄色ローム少量と2～3cm大の軽石を少量含む。(ソフトな層)
5. 黄褐色土 粒子細かく粘性小。黄色ロームを多量、2～3cm大の軽石を少量含む。(しりある層)
6. ロームブロック。

第85図 IEO I 土坑 (D 1～D 4)

4. 周溝址・溝址

EM 5～7は遺物の出土がないので遺構一覧表を参照されたい。またM 2・M 3号溝は全体が残存すれば、周溝状を呈すものであろう。遺物がないので遺構一覧表を参照されたい。

1) EM 1号周溝 (第86図、第54表、図版31・62)

C 8グリットにあり、M 1号溝、円正坊IV F 10号掘立柱建物址、単P 15・17・18、H 1号住居址切られる。南北640cm 東西618cmを測るほぼ円形の周溝である。溝は全周し、溝幅は50～82cm 深さ11～36cmを測る。

出土遺物には弥生式土器と土師器がある。実測した土師器の甕と杯であるが、H 1号住居址で述べたようにH 1号住居址の遺物と推測される。また弥生時代後期の赤色塗彩の壺・無彩の壺、櫛描波状文・斜条痕の甕片もあるが、周溝の出土地点の明記がなく、H 1号住居址への混入品の可能性もある。しかし、円正坊IVの単P 17から弥生後期末～古墳初頭の土器がでており、本弥生式土器も近いものがある。本遺跡ないにはこの時期の住居址はなく、周溝に伴うと推測される。

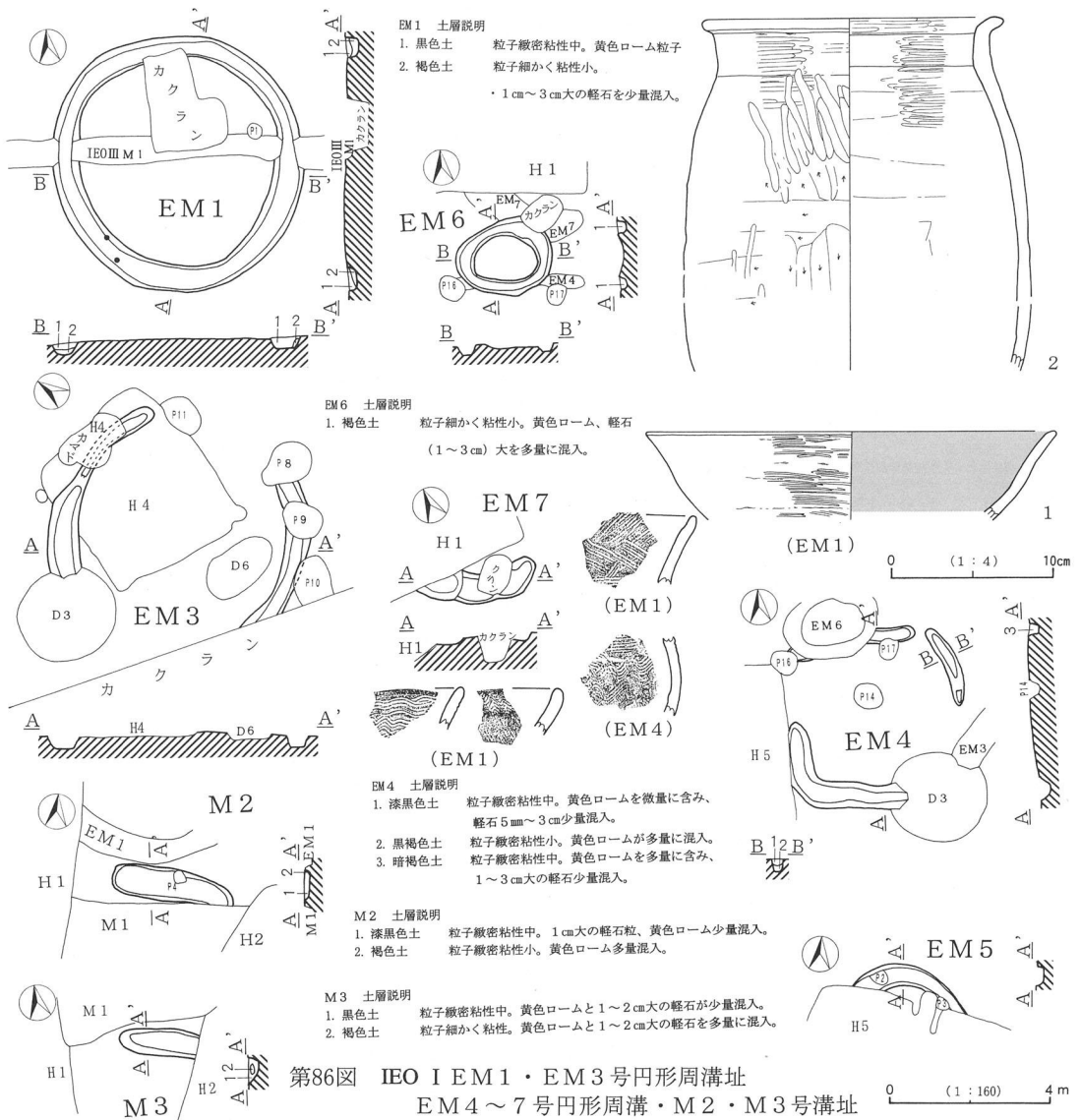
これらより、本址は弥生時代末～古墳初頭に位置づけられようか。

2) EM 3号周溝 (第86図、図版31)

E 3グリットにあり、H 4号住居址、D 3号土坑、単P 8～10に切られる。南北640cm の円形の周溝である。溝幅44～78cm、深さ12～30cmを測り、EM 1号周溝とほぼ同規模である。

出土遺物には弥生式土器がある。赤色塗彩の壺、杯片、櫛描斜条痕・波状文の甕片である。

これらより、平安時代よりは旧く、弥生時代後期以降であるといえ、EM 1号周溝と同期のものであろう。



3) EM4号周溝 (第87図、図版31)

Eお2グリットにあり、H6号住居址、EM6号周溝、D3号土坑、単P16に切られる。方形基調の周溝で、南北452cm東西452cmを測る。溝幅は28～66cm、深さ5～30cmを測る。

出土遺物には弥生式土器赤色塗彩の壺片2、無彩の壺片1、波状文甕片1、土師器鉢ないし小型甕片1がある。これらよりH13号住居址の古墳時代後期より旧く、弥生時代後期遺構に位置づけられる。

第54表 EM1号周溝址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器鉢	(25.6) — <5.5>	内 ミガキ→黒色処理 外 ミガキ	口縁部1/8残存 内 N2/0 (黒) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	石英・長石、輝石、土器片(?) 東を含む。	
2	土師器甕	18.7 — <22.0>	内 口縁部横ナデ・胴部ヘラナデ→ミガキ 外 口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部完形 内 10YR7/3 (にぶい黄橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	石英・長石、輝石を含む。	

枇杷坂遺跡群 円正坊遺跡Ⅴ

所在地 佐久市大字岩村田字円正坊1292-1 他

調査委託者 株式会社ベイシア

開発事業 駐車場進入路工事

調査期間 平成11年6月28日～7月7日

調査面積 69m²

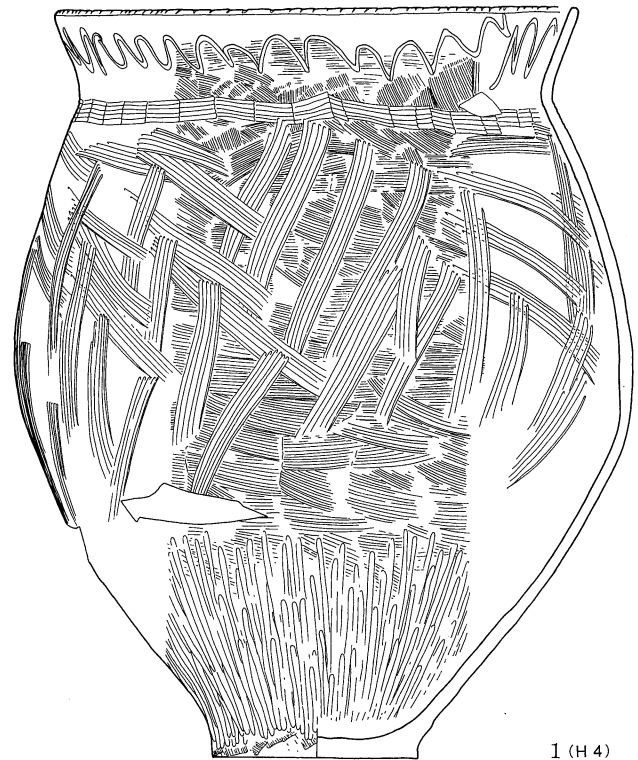
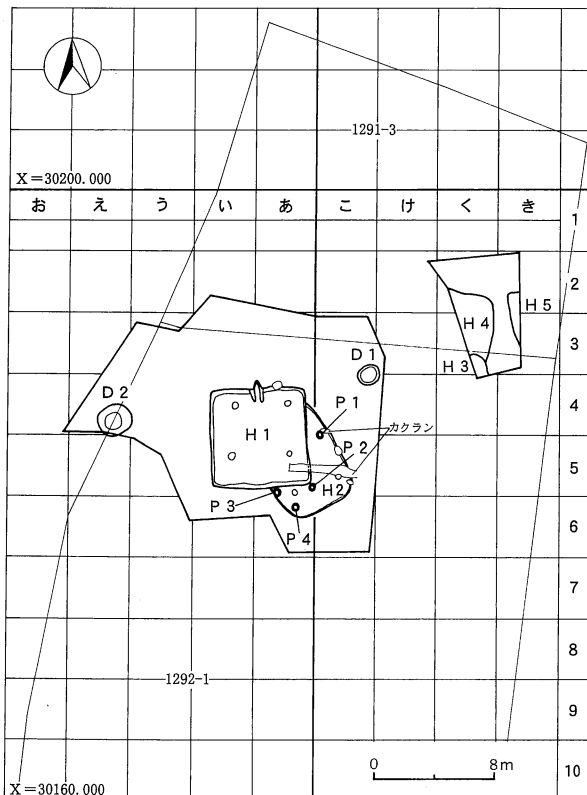
調査担当者 森泉かよ子

検出遺構	竪穴住居址	古墳時代後期	1棟	プラン確認のみの住居
		弥生時代中期	1棟	H3号住居址
	土坑		2基	H4号住居址 (弥生中期)
	単独ピット		4個	H5号住居址

立地と経過

本遺跡は岩村田駅の西、小海線線路の南に隣接し、標高705.90mを測る地点にある。台地の南西端にあたり、西側は低地になって行く。西隣は清水田遺跡(注8)、当地は円正坊遺跡Ⅱ(注9)として調査され、弥生中期～平安時代にかけての集落・墓域として周知されていた。今回、店舗従業員駐車場を本地籍にもうけることとなり、その進入路として一部削平を余儀なく、試掘調査をした。調査の結果遺構が検出され、発掘調査をすることとなった。また、北西の一面は駐車場に敷く碎石を搬入するトラックの進入路にあたり、土が濃むため耕土を除去したい旨の申し出があり、遺構を確認したところH3～H5号住居址のプランが確認された。この地点は埋め戻して保存した。

遺構と遺物



第87図 円正坊遺跡Ⅴ全体図 (1:500)

0 (1:4) 10cm

1. 竪穴住居址

1) H1号住居址 (第89～91図、第55表、図版32・59・63・64)

あ3グリットにあり、H2号住居址を切る。黄褐色ローム中に構築される。南北長606cm、東西長594cmの方形を呈す住居址である。カマドを北壁に設け、主軸方位はN-0°で北を指す。本住居址は水平方向の地盤のズレを受け、住居址が壁中位と床下で2段階にスライドしている。カマドはロームを袖として掘り残し、黒褐色の粘質土を貼っている。袖先には石を立てて置いている。主柱穴は4本検出され、ほぼ円形を呈し、短径で32～48cm、深さ40～80cmを測る。柱痕の径は12cmである。P1の北、カマドの東に長径73cm 短径52cm 深さ64cmの隅丸長方形のピットがある。3の土師器甕が出土している。掘方は中央を高く、周辺を掘りくぼめていた。

出土遺物には弥生式土器、須恵器、土師器、ガラス小玉、青銅製釧、鉄製釧がある。弥生式土器は重複しているH2号住居址と同期の弥生時代中期と後期のものがある。18・19は弥生中期の甕、20は弥生後期の甕である。

須恵器は1の壺は甕の口縁部小片であろうか、外面に波状文が施される。胎土分析では陶邑産とされる。土師器は杯(2)、甕(3)、鉢(4・5・13)、甕(8～12)、甗(14)がある。2の杯は浅い丸底から外稜を持って、口縁が大きく外反するもので、内外面ミガキ、内面は黒色処理される。3のハソウは精製品で丁寧ミガキ調整されている。口縁は大きく外反し、下方に段を持つ。体部はやや扁球形を呈し、中位より上に径1.2cmの円形の孔が開くが周囲が欠損している。甕は口縁部が緩やかに外反し、胴部形は下方が膨らみを持っている。外面のヘラケズリは丁寧である。43は鉛ガラスで群青色をしている。47は青銅製釧で幅1.05cm 厚さ0.15cmを測り、推定直径は5.52cmである。48は鉄製釧で幅1.1cm 厚さ0.2cm、推定直径4cmを測る。

これらより、本住居址は古墳時代後期前半に位置づけられよう。

2) H2号住居址 (第92図、第56表、図版33・59・65)

あ4グリットにあり、H1号住居址、単独ピットP1～P4に切られる。南北長は推定で676cm、東西長516cmの隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-35°-Wを指す。北側の主柱穴、炉はH1号住居址に壊されてなく、南の主柱穴2本を検出した。円形で径36・40cm、深さ48cm、柱痕径は12・16cmを測る。南壁にはP5・P6の出入り口施設のピットがある。P3は長径88cm 短径72cm 深さ16cmを測り、炭化物を含む。住居址の覆土が浅いため本址に伴うものか確認できていない。

出土遺物には弥生式土器、スリ石、磨製石鏃がある。弥生式土器は壺(1・3～5)、甕(2・6)がある。1の壺は中型品の単純口縁で短く口縁が外反し、首は太く胴中位で膨らみ最大径を持つ。口縁端部は面取りし、縄文施す。頸部は縄文を施し、平行沈線を横位に3本ヘラで描く。胴上部には鳥足状の沈線を施す。器面外面にはハケ目を残す。3の壺は口縁が大きく外反し、頸部にヘラ描沈線を平行に施し、間にヘラ描波状文を2本巡らす。甕は、拓本に示した波状文・斜条痕の甕がある。H1号住居址の18・19等受け口甕も該当するものであろうか。

これらより、本住居址は弥生時代中期に位置づけられよう。

2. 土坑

1) D1号土坑 (第93図、図版33)

こ3グリットにあり、角張った楕円形を呈し、長径144cm、短径120cm、深さ16cmを測る。

出土遺物は弥生式土器で、櫛描横線文を頸部に施す壺片等がある。

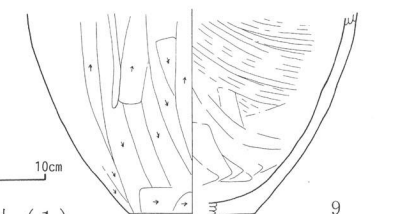
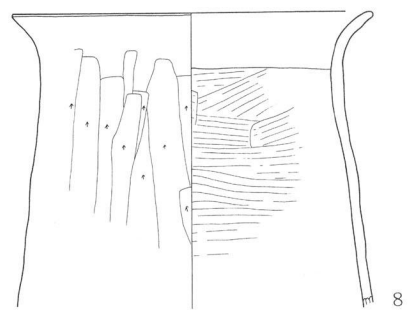
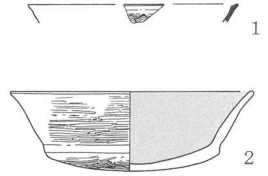
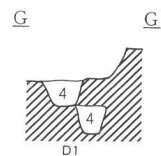
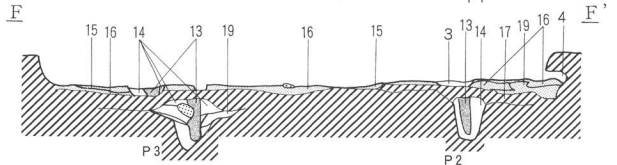
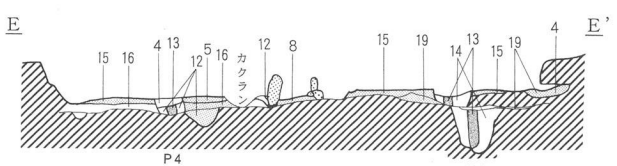
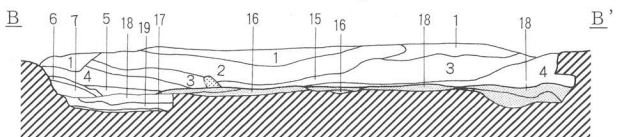
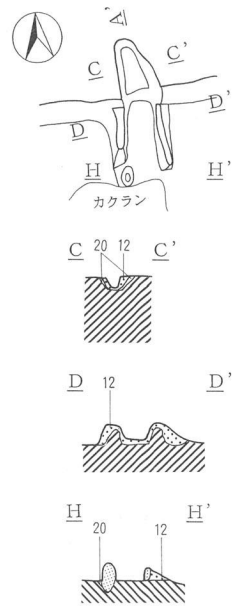
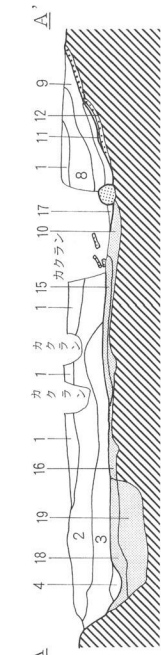
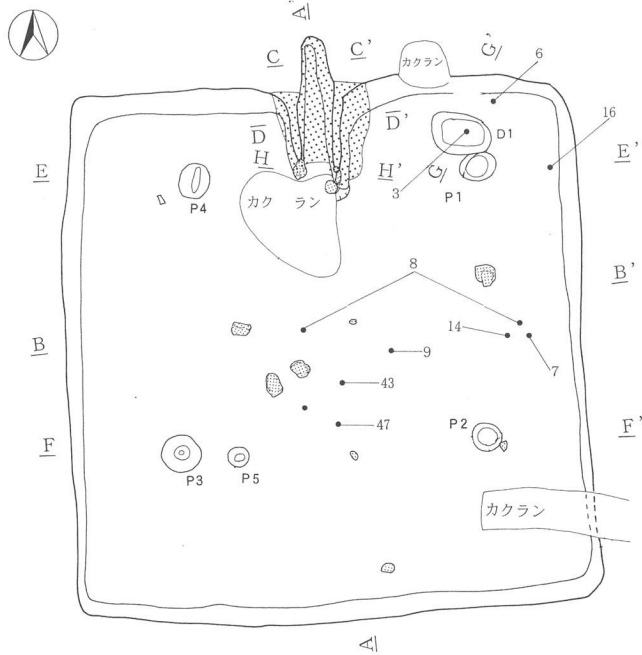
これらより弥生時代後期またはそれ以降の土坑であろう。

2) D2号土坑 (第93図、第57表、図版33・65)

え4グリットにあり、円形を呈し、長径232cm、短径196cm、深さ104cmを測る。

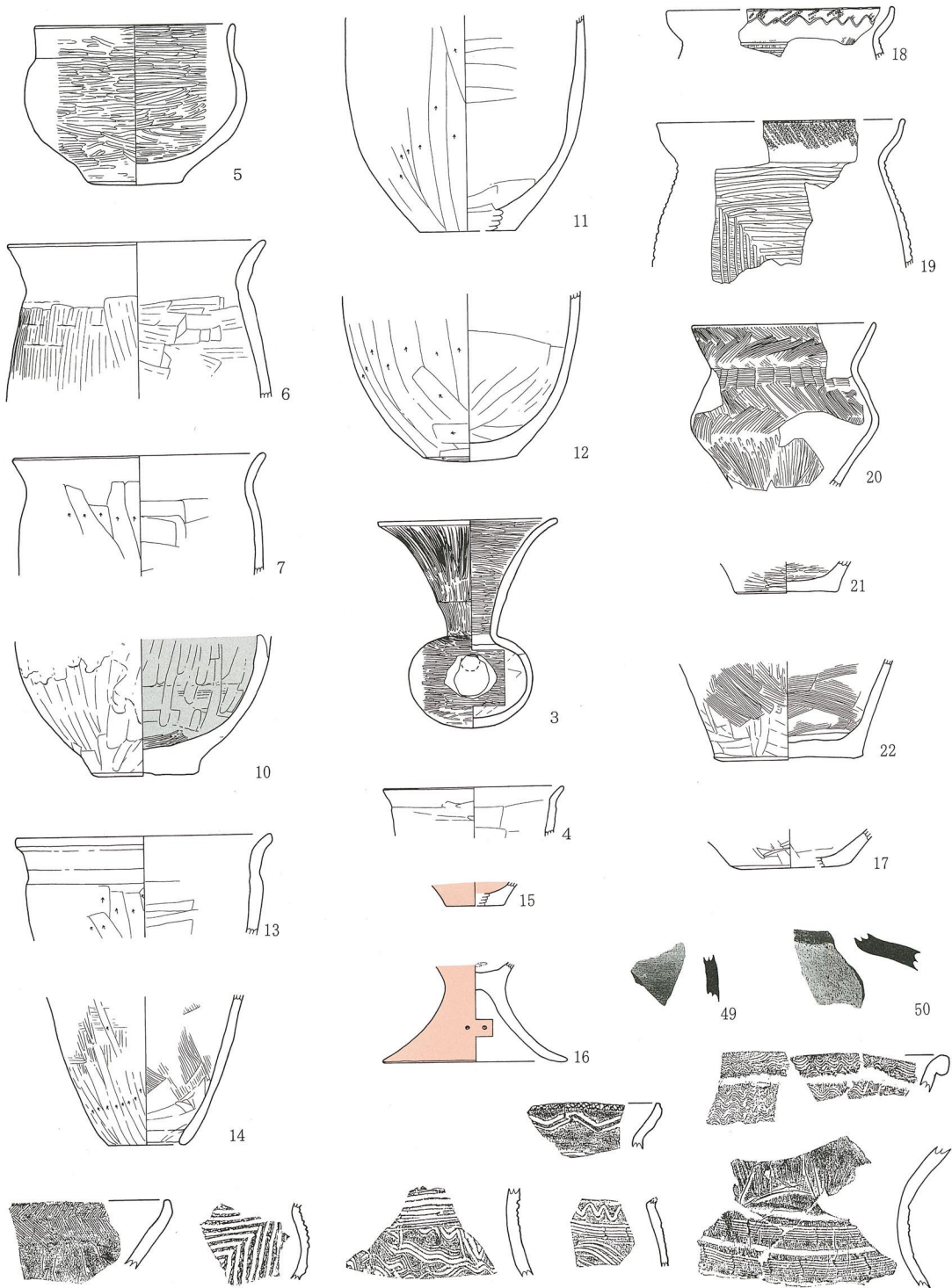
出土遺物には須恵器杯と土師器杯がある。1の須恵器杯はロクロナデされ、底部回転糸切りである。2の土師器杯は器高が深いもので、外面ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ、内面はミガキ黒色処理される。

これらより、本土坑は平安時代前半に位置づけられよう。

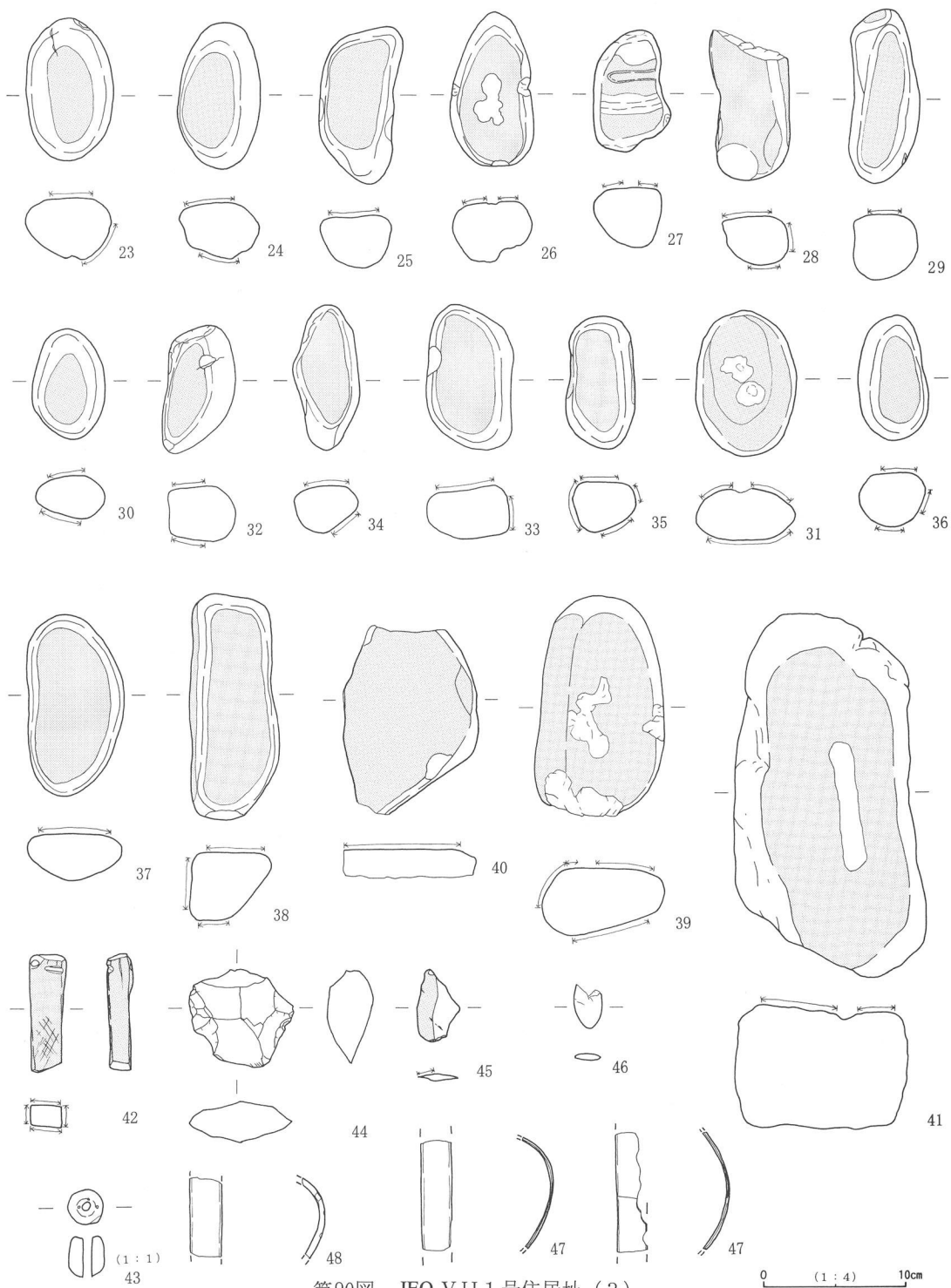


- H1 土層説明
1. 黒褐色土層 (10YR2/3)
 2. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)
 3. 黒褐色土層 (10YR2/2)
 4. 暗褐色土層 (10YR3/4)
 5. 暗褐色土層 (10YR3/3)
 6. 赤褐色土層 (5YR4/6)
 7. 黒褐色土層 (10YR2/3)
 8. 黒褐色土層 (7.5YR3/2)
 9. 黒褐色土層 (10YR3/2)
 10. 黒褐色土層 (7.5YR3/2)
 11. 褐色土層 (7.5YR4/6)
 12. 黒褐色土層 (7.5YR3/2)
 13. 暗褐色土層 (10YR3/3)
 14. 褐色土層 (10YR4/4)
 15. 黒褐色土層 (10YR2/3)
 16. 暗褐色土層 (10YR3/4)
 17. 明黄褐色土層 (10YR6/6)
 18. 黄褐色土 (10YR5/6) ・暗褐色土 (10YR3/4) の混在土。
 19. 黒褐色土層 (10YR2/2)
 20. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)
- ローム・バミス含む。
 ローム粒子多量に含む。
 ローム・バミス含む。
 ローム・バミス多量に含む。
 ローム・バミス含む。
 焼土。
 ローム粒子含む。
 粘質土含む。
 粘質土・焼土・ローム・バミス・炭化物を含む。
 粘質土に焼土ブロック含む。(カマド崩壊層)
 灰・焼土層。
 粘土。
 ローム・バミス含む。(柱痕)
 ローム・バミス多量に含む。(貼り床)
 細かいロームブロック・バミス含む。上面、焼けた所がある。
 ロームブロック主体、バミス多い。
 ローム。

第88図 IEO VH 1号住居址 (1)



第89图 IEO V H 1 号住居址 (2)



第90图 IEO V H 1 号住居址 (3)

第55表 I E O V H 1号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器 壺	(12.8) — <1.1>	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ→櫛描波状文	口縁部1/16残存 内 N5/0 (灰) 外 N5/0 (灰)	1mm以下の石英・長石粒子少量 含む。 自然釉付着。	Ⅱ区
2	土師器 杯	(14.8) 10.6 4.8	内 ミガキ→黒色処理 外 ミガキ	口縁部1/2残存、底部完形 内 N1.5/0 (黒) 外 10YR8/3 (浅黄橙)	0.5mm以下の石英・長石を含む。	Ⅱ区堀方
3	土師器 甗	12.5 — 14.4	内 口縁部ミガキ・胴~底部ヘラナデ 外 ミガキ	ほぼ完形 内 5YR7/6 (橙) 外 5YR7/6 (橙)	1mm以下の石英・長石を含む。 2mm以下の土器片(?)を含む。 焼成前穿孔。	
4	土師器 鉢	(12.6) — <3.6>	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ	口縁部1/3残存 内 2.5YR7/4 (淡赤橙) 5YR6/2 (灰褐) 外 5YR8/4 (淡橙)	1mm以下の石英・長石・土器片 含む。 外面磨耗。	検出
5	土師器 鉢	(14.1) 6.6 11.1	内 ミガキ 外 胴部ミガキ・底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存、底部完形 内 10YR7/4 (にぶい黄橙) 外 7.5YR7/4 (にぶい橙)	石英・輝石・土器片含む。	I区堀方
6	土師器 甗	(18.0) — <10.9>	内 口縁部横ナデ→ヘラナデ(柁目) 外 口縁部横ナデ→ヘラナデ(柁目)	口縁部1/4残存 内 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石・輝石・ 土器片(?)含む。	
7	土師器 甗	(17.6) — <8.5>	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/2残存 内 2.5YR7/3 (にぶい橙) 2.5YR6/2 (灰褐) 外 2.5YR7/3 (にぶい橙) 2.5YR5/1 (褐灰)	1mmの石英・長石・角閃石・土 器片を含む。 磨耗。	Ⅱ区
8	土師器 甗	22.1 — <18.1>	内 胴部ヘラナデ(柁目)・口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部3/4残存 内 5YR6/4 (にぶい橙) 外 5YR6/4 (にぶい橙)	1mmの石英・長石・土器片(?) を含む。	I区、IV区
9	土師器 甗	— (7.8) <12.4>	内 ヘラナデ(柁目) 外 胴・底部ヘラケズリ	底部ほぼ完形 内 10YR7/2 (にぶい黄橙) 外 7.5YR7/2 (明褐灰) 7.5YR8/3 (にぶい黄橙)	1mmの石英・長石・輝石・土器 片(?)を含む。	I区、堀方
10	土師器 甗	— 7.5 <9.6>	内 ヘラナデ→底部にのみミガキ→黒色処 理 外 胴・底部ヘラナデ	底部完形 内 5YR6/2 (灰褐) 7.5YR5/1 (褐灰) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙)	石英・長石・土器片・輝石を含 む。	Ⅲ区床
11	土師器 甗	— (6.6) <15.0>	内 ヘラナデ(柁目) 外 胴部ヘラケズリ・底部ナデ	底部1/4残存 内 5YR6/6 (橙) 外 5YR7/6 (橙)	石英・長石・輝石・土器片含む。	カマド
12	土師器 甗	— 6.6 <11.7>	内 ヘラナデ 外 胴・底部ヘラケズリ	底部完形 内 7.5YR6/3 (にぶい褐) 外 7.5YR6/3 (にぶい褐)	1mmの石英・長石・輝石・土器 片(?)を含む。	I区、IV区
13	土師器 鉢	(17.9) — <7.1>	内 口縁部横ナデ・胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 7.5YR8/4 (浅黄橙) 外 7.5YR8/4 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石・輝石を 含む。	I区、カマド
14	土師器 甗	— (5.2) <10.3>	内 胴部ハケナデ→下半部ヘラナデ 外 ハケナデ→ヘラケズリ	底部3/4残存 内 2.5YR6/6 (橙) 外 2.5YR6/6 (橙)	1mmの石英・長石含む。 土器片(?)含む。	P 2 Ⅱ区、IV区
15	弥生土器 杯	— (4.0) <1.6>	内 ミガキ→濃い赤色塗彩 外 ミガキ→濃い赤色塗彩	底部1/2残存 内 10R5/4 (赤褐) 外 10R5/4 (赤褐)	1mm以下の石英・長石含む。	検出

第55表 I E O V H 1号住居址出土遺物一覧表

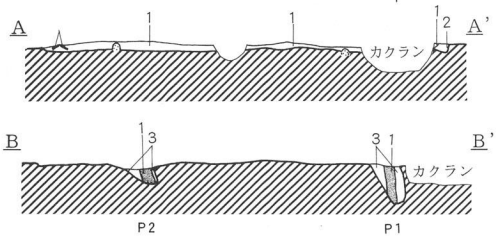
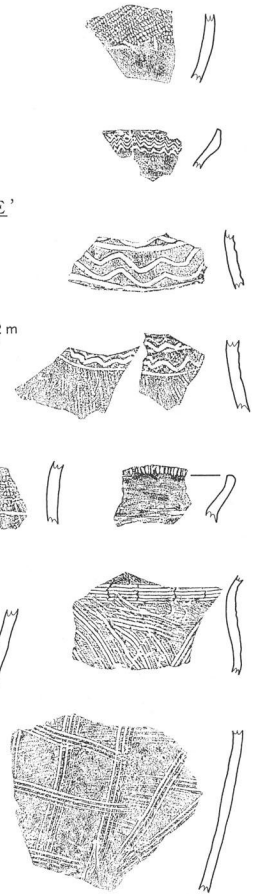
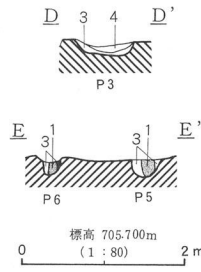
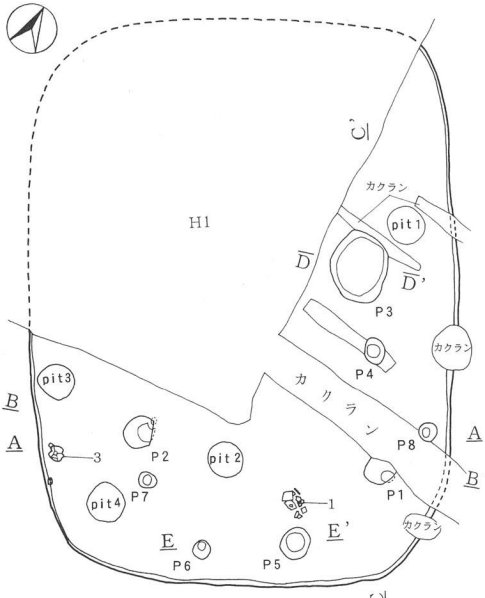
16	土師器 高杯	— 12.9 <6.9>	内 杯部ミガキ・脚注部ヘラナデ→裾部横ナ デ 外 ミガキ→濃い赤色塗彩			裾部1/8残存 内 7.5R4/6 (赤) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	1mmの石英・長石を含む。 脚注部に2コの孔あり。(焼成前 穿孔)	I区堀方
17	土師器 鉢	— (8.4) <2.6>	内 ヘラナデ 外 胴部ナデ→ミガキ・底部ナデ→ミガキ			底部1/3残存 内 5YR7/3 (にぶい橙) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石・土器片 含む。	IV区
18	弥生土器 甕	(15.9) — <3.6>	内 ミガキ→黒色処理(?) 外 口縁部横ナデ・頸部ハケナデ 文 口縁L R 縄文を地文として、ヘラ描山形 文を施す。頸部にヘラ描「コ」字文を施す。			口縁部1/4残存 内 N2/0 (黒) 外 7.5YR6/1 (褐灰)	1mm以下の石英・長石を含む。	I区、II区、 III区
19	弥生土器 甕	(17.4) — <10.3>	内 ミガキ 外 口縁部横ナデ・胴部ハケナデ 文 口縁L R 縄文・胴部ヘラ描「コ」の字重 ね文を施す。			口縁部1/3残存 内 10YR5/2 (灰黄褐) 外 10YR5/2 (灰黄褐)	1mm以下の石英・長石・輝石少 量含む。	II区堀方
20	弥生土器 甕	(12.8) — <7.2>	内 ミガキ 外 文 口縁部に4~8本1組とする櫛描斜走文を 施した後、頸部に11本1組とする櫛描簾状文 を施す。その後、胴部に4~8本1組とする櫛 描斜走文を施す。一部に櫛描波状文を施す。			口縁部1/3残存 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 10YR7/1 (灰白) 10YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石を含む。	II区堀方
21	弥生土器 壺	— (7.2) <2.1>	内 ミガキ 外 ミガキ			底部1/2残存 内 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 7.5YR6/1 (褐灰)	1mmの石英・長石・土器片(?) を含む。	III区
22	弥生土器 甕	— (10.4) <6.8>	内 ヘラナデ(柾目) 外 胴部ヘラナデ(柾目)→ミガキ・底部ナデ			底部2/3残存 内 7.5YR7/2 (明褐灰) 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	1mm以下の石英・長石含む。 炭化物含む。	II区堀方 III区
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土地	
23	編物石	10.0	6.2	4.3	350	安山岩? 擦面あり。		
24	編物石	10.4	5.8	3.9	240	軽石。擦面あり。		
25	編物石	11.1	5.9	3.7	310	安山岩。擦面あり。	II区	
26	編物石	10.7	5.8	4.3	160	軽石。擦面あり。		
27	編物石	8.6	5.3	4.3	250	安山岩。擦面あり。		
28	編物石	10.6	5.7	3.4	280	硬砂岩。擦面あり。		
29	編物石	12.2	5.0	4.6	410	砂岩。擦面あり。	III区	
30	擦石	7.8	5.1	3.1	160	砂岩。		
31	編物石・擦石	10.3	7.0	3.7	190	軽石。擦面あり。		
32	編物石	9.0	5.1	3.9	260	チャート。擦面あり。		
33	編物石	10.2	6.2	3.8	290	安山岩。擦面あり。		
34	編物石	10.2	4.8	3.4	230	安山岩。擦面あり。	III区	
35	編物石	9.3	4.8	3.6	250	安山岩。擦面あり。		
36	編物石	8.8	4.8	3.9	270	安山岩。擦面あり。	III区	
37	編物石	12.6	6.9	3.4	370	安山岩。擦面あり。	III区	
38	編物石	15.8	6.4	4.8	780	安山岩。擦面・打痕あり。		
39	編物石	15.5	9.2	4.7	920	安山岩。擦面あり。	III区	
40	編物石・石皿	13.2	9.6	2.1	395	安山岩。擦面あり。	III区	
41	台石	25.5	13.5	8.8	3650	軽石。擦面あり。		
42	砥石	8.2	2.5	1.6	60	凝灰岩。穴あり。携帯用。		
43	ガラス小玉	0.7	0.6	—	0.5			
44	石核	6.9	7.3	3.0	140	黒色緻密安山岩。		

第55表 I E O V H 1号住居址出土遺物一覧表

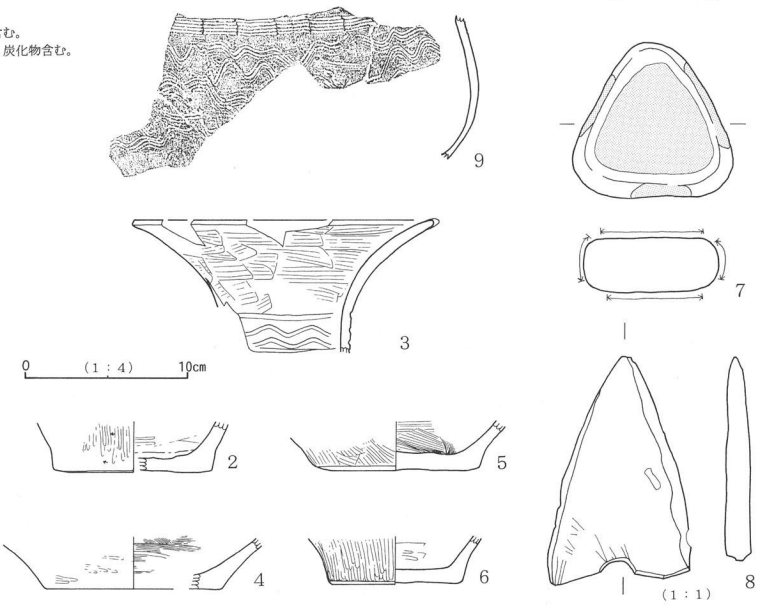
45	剥片	5.1	3.0	0.4	6	擦面あり。	
46	土版	3.1	2.0	0.4	2	土製品？	
47	銅釦	8.0	1.1	0.15	—	黒色緻密安山岩。	
48	鉄釦	2.7	1.1	0.2	—	擦面あり。	

第56表 I E O V H 2号住居址出土遺物一覧表

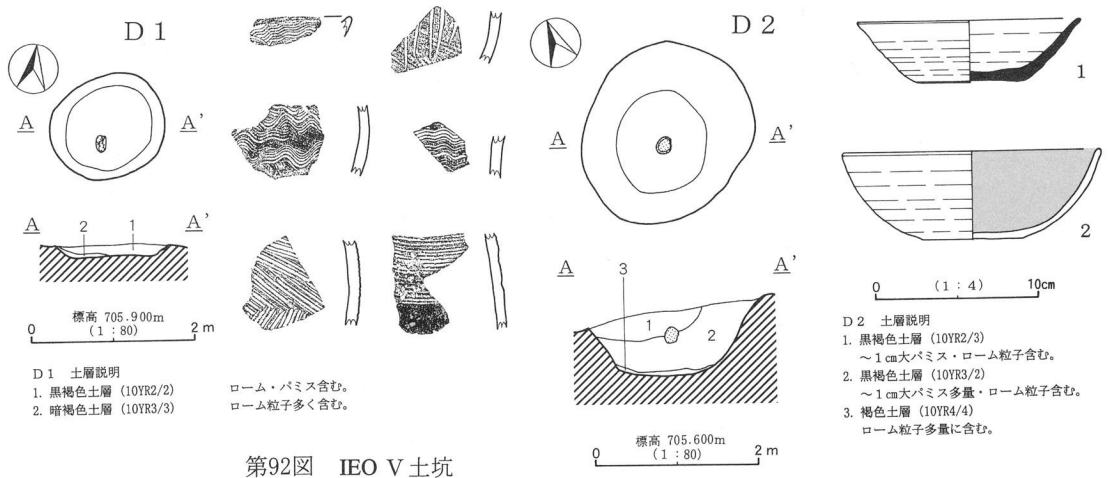
番号	器種	法量	成形・調整			残存量・色調	胎土・特徴	出土地
1	弥生土器壺	12.4 8.1 26.7	内 口縁部横ナデ・胴・底部ハケナデ 外 口縁部横ナデ・口縁～胴部ハケナデ・底部ヘラケズリ→ナデ 文 口唇部LR縄文・頸部LR縄文を地文として、3条のヘラ描横走平行線文を施す。胴上半部にヘラ描の鳥の足の文様あり。			ほぼ完形 内 7.5YR8/2 (灰白) 外 7.5YR8/2 (灰白)	1mm以下の石英・輝石・土器片含む。	S
2	弥生土器甕	— (9.7) <3.1>	内 ヘラナデ→一部ミガキ 外 胴部ミガキ・底部ヘラケズリ			底部1/4残存 内 10YR6/3 (にぶい黄橙) 外 10YR6/3 (にぶい黄橙)	石英・長石を含む。	S
3	弥生土器壺	18.8 — <8.2>	内 ミガキ 外 ハケナデ 文 頸部に2条のヘラ描波状文を施し、2条のヘラ描平行横走線文で囲む。			口縁部3/4残存 内 2.5Y8/3 (淡黄) 外 10YR8/3 (淡黄橙)	石英・長石を含む。 突起あり。(3個か?)	S、検出
4	弥生土器壺	— (11.0) <3.2>	内 ハケナデ 外 ミガキ			底部1/4残存 内 10YR8/2 (灰白) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	石英・長石・輝石を少量含む。 外面磨耗。	N
5	弥生土器壺	— 10.1 <3.0>	内 胴部ハケナデ・底部ヘラナデ 外 胴部ハケナデ・底部ナデ			底部完形 内 10YR5/1 (褐灰) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	1mm以下の石英・長石を含む。	Ⅲ区
6	弥生土器甕	— (8.2) <3.0>	内 ヘラナデ 外 胴・底部ミガキ			底部1/4残存 内 10YR4/1 (褐灰) 外 10YR6/3 (にぶい褐)	1mm以下の石英・長石を含む。	検出
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土地	
7	編物石	9.6	9.8	3.3	510	安山岩。擦面あり。		
8	磨製石鏃	3.5	2.2	0.4	3	再加工品。片岩製。	南区	



- H2 土層説明
- | | |
|--------------------|------------------|
| 1. 黒褐色土層 (10YR2/3) | ローム・バミス含む。 |
| 2. 暗褐色土層 (10YR3/3) | ローム粒子多く含む。 |
| 3. 黒褐色土層 (10YR3/2) | ローム粒子・バミス含む。 |
| 4. 暗褐色土層 (10YR3/4) | ローム粒子・バミス・炭化物含む。 |



第91図 IEO V H 2号住居址



第59表 IEO V H 4号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	弥生土器 甕	27.8 10.8 39.9	内 ハケナデ→ミガキ 外 口縁・胴部ハケナデ→下半部ミガキ・底 部ナデ 文 口唇部ヘラによるキザミ・口縁部ヘラ描 波状文・頸部4~5本1組とする櫛描籬状文(一 連止め)・胴部5本1組とする櫛描斜状文を施 す。	ほぼ完形 内 7.5YR5/2 (灰褐) 外 10YR7/2 (にぶい黄橙)	1mm以下の石英・長石を含む。	

第58表 IEO V D 2号土坑出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器 杯	(13.6) (6.6) 3.8	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・底部回転糸切り	口縁部1/4、底部1/2残存 内 10Y8/1 (灰白) 外 N8/0 (灰白)	石英・長石・輝石を含む。 内外面に火だすき有り。	D 2
2	土師器 杯	(15.8) (6.2) 5.4	内 ミガキ→黒色処理 外 ロクロナデ・底部手持ちヘラケズリ	口縁部1/2、底部1/2残存 内 N1.5/0 (黒) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	石英・長石を含む。	D 2

第V章 総括

第1節 弥生時代

円正坊遺跡Ⅳからは弥生時代の周溝が検出され、弥生時代～古墳時代初頭の住居址は検出されていない。南西にあたる円正坊遺跡Ⅴでは弥生時代中期の住居址が1棟検出された。

(1) 弥生時代中期

本報告書では弥生時代中期の住居址を円正坊遺跡Ⅴで1棟のみ報告している。本報告書は比較資料を持たないので他の機会に述べることとする。

(2) 弥生時代後期

本期に該当する住居址はなく、円形ないし方形の周溝址が11基検出された。これらは周溝内部に竪穴住居址や掘立柱建物址等がなく、周溝を伴う建物址ではなく、主体部は検出されていないが周溝墓であろう。周溝墓は台地の縁辺に立地している。

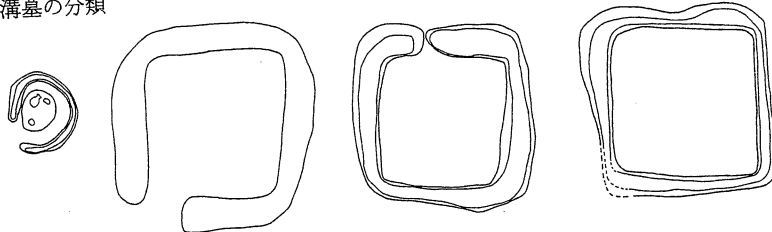
1) 周溝墓

千曲川流域の方形周溝墓については青木氏が研究ノートにまとめたものがある(注1)。4タイプに分類し、

- A. 不整形円形ないし円形の円形の溝。比較的規模が小さい。
- B. 方形プランの一辺中央の溝を掘り残す。大型が多く、ブリッジが外方に伸び、区画部の規模が他に比べ大型化する。埋葬主体部が確認できない例が多く、盛り土を行っている。
- C. 形・規模はBタイプとほぼ変わりなく、比較的大きい。方形プランのコーナー部分を掘り残すタイプである。
- D. 方形で溝の掘り残し部分をもたない。B・Cと同様低墳丘が想定できる。

と分類している

周溝墓の分類



Aタイプ

Cタイプ

Bタイプ

Dタイプ

第93図 周溝墓分類図

		Aタイプ	Cタイプ	Bタイプ	Dタイプ
弥生後期	千野 1~2 段階	北西久保			
	3	須多ヶ峰 周防畑B 聖川堤防			
古墳前期	4~5	安源寺	後沢 ↓	聖川堤防 久保田 下小平 瀧峰	平紫平(?) 塩崎小(?)
	御屋敷				小島境 上野
	善光寺平 I(古)				

第94図 周溝墓変遷表図

(青木氏ノートより転載) 千曲川流域の周溝墓の変遷

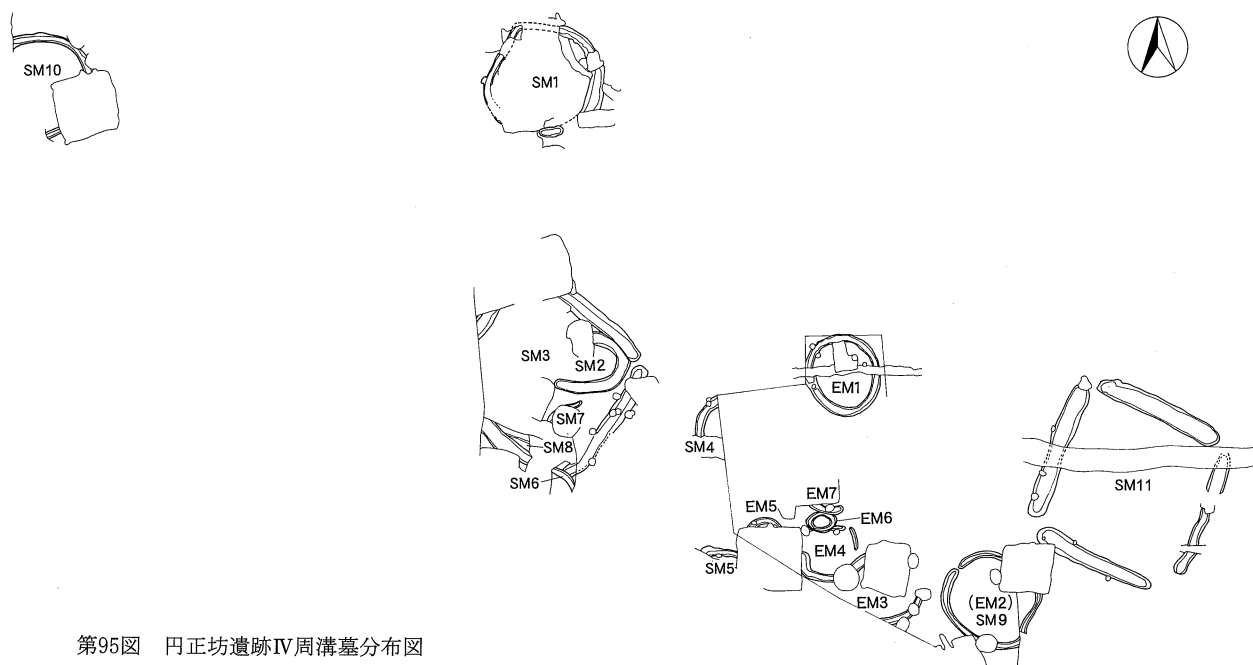
本遺跡の周溝はAタイプの円形の周溝を持つタイプと、と四隅が切れているタイプである。一カ所ではないがコーナーが切れることからするとCタイプに分類できる。

C. 溝を方形に巡らし、四隅が切れ、コーナーに陸橋持つもの。大型である。

Cタイプ

遺構名	規模(外周)	溝幅	深さ(最大)	台状部	陸橋
SM1	9.76m	134	39cm	方形	四隅切れるか攪乱のため不明
SM3	14m90cm	162	71cm	方形	四隅切れ
SM11	15m26cm	176cm	63cm	形	四隅切れ
後沢1号	10.5m	200cm	—	方形	南東隅切れ 弥生後期の住居と重複
2号	12m	200~300cm	—	方形	〃
3号	7m	100~125cm	—	方形	〃

円正坊遺跡ⅣのCタイプは形態が方形基調で、規模は外周を入れた最大径で10m~15mを測り、溝幅は1.34m~1.72m深さ39~71cmを測る。SM3号周溝にはほぼ確実に相伴するのは大型品の壺2点で、赤色塗彩され頸部羽状文を施すものと、無彩の大型品で、頸部に櫛描T字文を施すものである。これらは壺胴上部がやや膨らんで球胴形を呈することなどから弥生時代後期後半に分類できよう。またSM11号周溝からは赤色塗彩の鉢、高杯、台付きの鉢なのか甕かわからない無彩で、施文されないものがある。また甕では口縁部櫛描波状文、頸部簾状文、胴上部斜条痕の文様構成



第95図 円正坊遺跡IV周溝墓分布図

の甕を伴う。従って弥生時代後期の周溝墓といえよう。

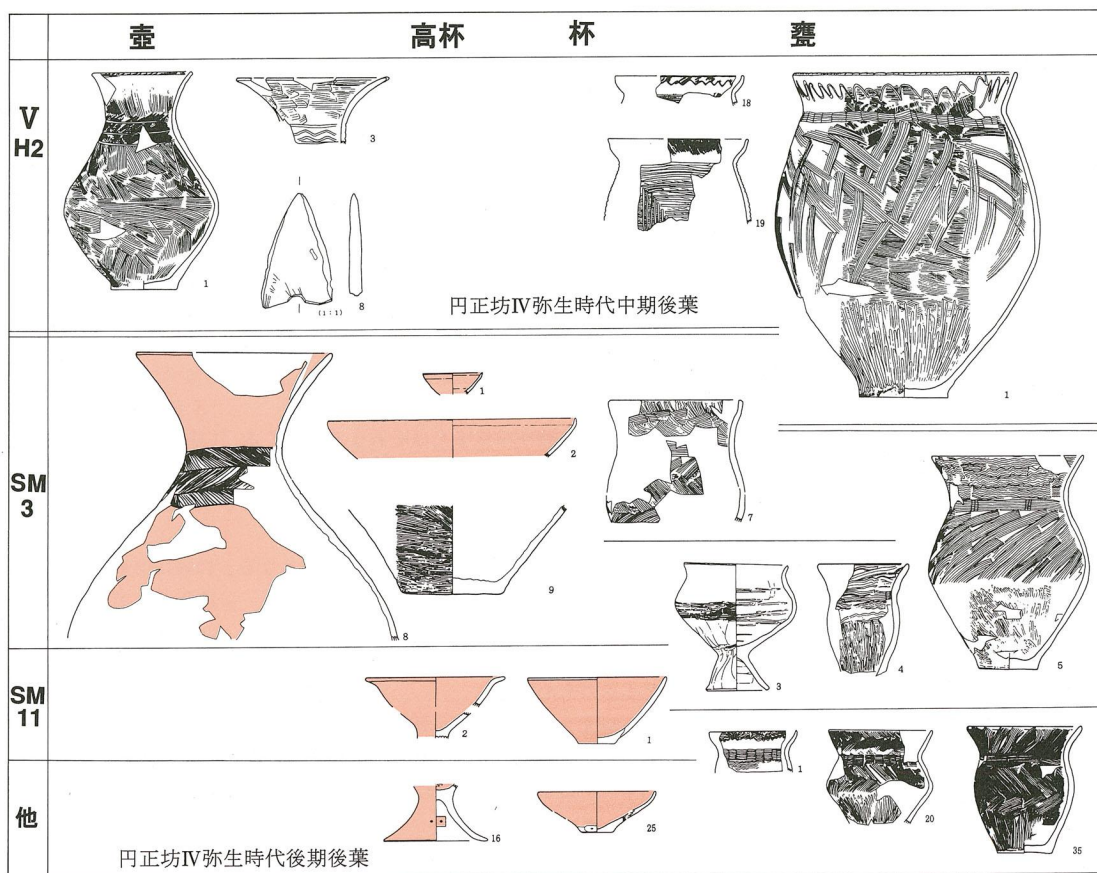
Cタイプの方形を呈する周溝は後沢遺跡（注2）で報告されている。報告書が未完の遺跡であるため詳細はわからないが、本遺跡の方形を呈する周溝墓は同様のタイプと推定される。青木氏は詳細は不明としながら、弥生時代後期後半に置いている。

A. 溝を円形に巡らし、一カ所に陸橋を持つもの。1例を除いて、部分的な残存状況であるため、切れているかどうかは明確ではない。Cタイプより小型である。Aタイプの円形を呈する周溝墓を円正坊遺跡IVでは規模のわかるもの、また周辺遺跡の資料で挙げると、（注2）

Aタイプ

遺構名	規模(外周m)	溝幅(最大cm)	溝深さ(最大cm)	台状部	重複関係・陸橋
SM4	(6.24)	88	21	円形	古墳中期末～後期の住居にきられ不明。
SM5	(6.40)	59	19	円形	古墳後期の住居に切られる。攪乱で不明。
SM9	8.0	73	44	形	古墳後期の住居に切られる。西に1カ所。
SM10	8.80	72	46	円形	古墳後期の住居に切られる。区域外で不明。
EM1	6.40	82	36	円形	円正坊IVM1・攪乱のため不明。
EM3	6.40	78	30	円形形	平安時代の住居址に切られる。東にあり。
円正坊II1号	8.2	75	54	円形	西1カ所?調査区外あり。
五里田1号	7.6	60	40	円形	弥生時代中期の住居を切る。東に1カ所。
(1号内周溝)	5.2	60	15	円形	弥生時代中期の住居を切る。東に1カ所。
2号	6.5	50	40	円形	弥生時代後期の住居を切る。北に1カ所。
3号	7.6	55	50	円形	古墳後期の周溝に切られる。北に1カ所。
北西久保S4	11.52	136	32	円形	古墳に切られる。不明。
S11	8.84	100	26	円形	弥生時代中期の住居を切る。東に1カ所。
竹田峰2号	6.72	60	20	円形	弥生時代後期土器片含む。南1か箇所?
周坊畑B2号	7.0	80	32	円形	西
柳堂OM1号	5.84	72	20	円形	西
OM2号	5.76	104	28	円形	南西

形態が円形基調で、規模は直径6.24～8.80m溝幅59～82cm深さ19～46cmを測る。円正坊Iの調査時では古墳時代の堅穴住居址を切るとされていたが、本調査ではいずれも堅穴住居址に切られており、古墳時代後期より、古いことが確認された。



第96図 円正坊遺跡IV土器編年図(1)

またCタイプのSM3号周溝をSM6号周溝が切ることなどから、本遺跡の円形周溝は弥生時代後期かそれより新しく古墳時代中期末以前であろうが、決定的資料を欠いている。主体部が本遺跡では検出できず、共伴する土器がない周溝もあるが、出土するの弥生時代後期の土器片である。また、他遺構に混入する弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器片などは他に該当する時期の遺構のないことから、本遺跡のAタイプの周溝墓にあてられるのではと推測される。古墳時代前期の土器もないことからCタイプの大型の周溝墓と大差のない時期がといえるのではなかろうか。

南東にあたる五里田遺跡では本址と同様な円形周溝墓が検出され、第2号周溝の主体部から青銅製の釧が5点出土するが、周溝内からは多段の櫛描横線文の弥生時代後期壺片があるのみである。五里田遺跡でも共伴遺物がみられない。また北西にあたる周坊畑B遺跡からはやはりAタイプの周溝墓が検出され、不整ながら円形を呈し、7.0×6.3mを測る。主体部からは弥生時代後期の赤色塗彩の壺棺を伴っている。頸部はヘラ描平行横線文の間に羽状文を施すものである。ガラス小玉を共伴する。小山編年(注3)では弥生時代後期前半に位置づけられている。

AタイプがCタイプに先行するであろう周坊畑B遺跡を除いて、本遺跡では後出する可能性(判断資料が少ない、また重複関係が1例だけである等から)を指摘しておきたい。

第2節 古墳時代

本報告書では円正坊遺跡IVの27棟、円正坊遺跡Iの2棟、円正坊遺跡Vの1棟、合計29棟が古墳時代の住居址として報告している。これらの中で、重複関係、土器様相などから、新旧の様相が窺われ、2001『川原端遺跡』(注4)に行った古墳時代の土器編年を踏まえ、1999小林『西一本柳Ⅲ・Ⅳ』(注5)、1999鳥羽『屋代遺跡群』(注6)の編年を参照し、円正坊遺跡IVの土器編年についてみる。

(1) 古墳時代の土器分類

1) 土師器杯

杯A類 丸底の底部がそのまま内湾して立ち上がり、上部で短く内稜を持って外折する。口縁部は直線的であり、端部をわずかに玉縁状に内湾させるものもある。



調整は内面 ナデ・口縁部横ナデ後・細く、密な暗文を渦巻きまたは、放射状に施す。黒色処理されるものとされないものがある。外面 口縁部横ナデ、底部手持ちヘラケズリ後ミガキを施す。ミガキ調整されない杯もある。

杯B類 底径/口径の割合が杯E類に比して小さい器形、口径と底径に差がある。底径に比して、口径が大きい器形。丸底の底部から内外に稜を持ち、口縁が長く外傾外反するもの。



B 1 外稜が中位あたりにあるもの。器高の割合が高く、底径と底径の差が少ない。(底径/口径75%) (I E O I H 1.6)



B 2 口径に比して、底径が小さく、稜が中位またはそれより下にくる。口縁が大きく外反するものが多い。(底径/口径60%~75%) (H 5.7, I E O I H 1.3・4)



B 3 内面に明確な稜を持たない。B 2 に比して口径と底径の差は大きくなり、底径比が落ちる。(底径/口径60~65%) (H29.1, H21.2)

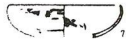


B 4 さらに口径と底径さが大きくなり、丸底は平底に近いものとなる。口縁は直線的で長い。(底径/口径45~55%) (H 3.5, H 4.6)

杯C類 丸底の底部から口縁端部まで内湾したままのもの。



C 1 細かい放射・渦巻き状の暗文を内面に施す。外面は内面同様の暗文を施すもの、横ナデ・底部ヘラケズリ後、ミガキ調整を加えるもの、横ナデ・底部ヘラケズリのままのものもある。

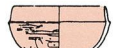


C 2 扁平になる。内外面、ミガキ調整される。(H22.7) (H 8.7, H12.10)

杯D類 須恵器模倣杯で杯身模倣



D 1 丸底から受け部を水平に外方にわずかに伸ばし屈曲して、立ち上がりは内傾する。口縁端部は、内傾する段を有する。TK10窯型式の模倣であろうか。胎土は緻密、調整は横ナデ、底部外面手持ちヘラケズリされる。有段口縁杯と同質のものである。(H23.31, H 5.5)



D 2 丸底から器高の1/3かそれより上部に外稜を持ち、屈曲して口縁(立ち上がり)が内傾する。杯Eに比して器高の割合が大きい。鉢に近い。(H23.2)



D 3 口縁部が屈曲せず、外稜をなして、内傾する。(H22.5)

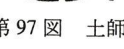
杯E類 須恵器模倣杯で、杯蓋模倣



E 1 丸底の底部で、中位に稜を持ち、屈曲して口縁部が直立ないし外傾する。中に口縁部の外反が強く、端部を内湾させる1群がある。(H 8.15)



E 2 丸底の底部で中位に曖昧な稜を持つもの (H 4.2)



E 3 有段口縁杯 (H10.2)

第97図 土師器杯分類図(古墳時代)

2) 土師器甕

甕A 口縁部の形態は「く」字形を呈する。頸部は口縁から収縮し、なで肩で胴中位にかけて膨らんで最大径を持つ。胴部外面にわずかにミガキを施す。(H8.28・H30.22)

甕B 甕Aと同じ口縁部形を呈し、胴上部が球胴形に張り、外面ナデ調整のものがみられる。壺に近い。(H12.41・H14.11)

- 甕C 短い口縁は横ナデ、胴部外面にハケ目を残し、下部はヘラケズリされる中型品。下膨れして胴下部に最大径を持つ。(H 8.26)
同器形だが内外面ミガキ調整されるミガキ甕がある。(H30.9)
- 甕D 胴部球形に張り、胴部外面がミガキ調整の甕(球胴甕)
- 甕E 胴部外面がヘラ状具で縦方向にヘラナデまたはヘラケズリ調整される甕
- E 1 長胴化し、口縁部が「く」字形を呈し、胴下部が膨れ、口径と胴最大径がほぼ等しい。内面にハケ調整を残す。
- E 2 長胴化し、口縁部が外反する。最大径は口縁部にある。内面はヘラナデされる。
- 甕F 胴部外面にハケ調整を残す甕
- F 1 長胴化し、口縁部形は「く」形を呈す。口縁と胴部の間がやや屈曲する。最大径は口径にある。
- F 2 長胴化し、口縁部が外反する。最大径は口縁部にある。

小型甕・鉢

小型甕と鉢については調整から内面及び外面にミガキ調整されるものは鉢、内面がヘラナデ・ハケナデのままで、器面を整えず、「く」字形ないし外反する口縁のあるものものは小型甕とした。しかしながら黒色処理をしたのか、使用して内面が炭化したのかわからない例があり、小型甕と鉢の機種の違いは今回曖昧である。両方の用途に使用したものもあると考えられ、明確ではない。

(2) 各期の特徴

1) 第Ⅰ期(屋代・古墳6期・5C末～6C初頭)

杯A・杯C1が主体を占め、杯Eが出現してくる。

高杯は有段口縁で暗文が多用され、脚部は裾が内稜を持って外方に広がっている。杯A・杯C・高杯は全般に赤褐色を呈すが、これらとは明らかに異なる浅黄褐色を呈し、器面に暗文は施さず丁寧にミガキ調整する高杯がある。脚部の裾が折れずに外反気味に開く(H8.20、H12.15)。杯Eが杯部にのる高杯もある。

甕は長胴甕がない。甕A・甕B・甕Cで構成され、小型甕の口縁部も外反せず直線的であり、胴部形も球形に近い。甕Dの球形を呈す丸胴甕がある。

甗はいずれも大型品で口縁が「く」字形を呈し、胴下部が膨らむ器形があり、一孔である。H14.17にみられる、胴形がスリムなものもみられるようになる。滑石製模造品・勾玉・紡錘車を伴う。

須恵器はいずれも陶邑産である。H12.1、H30.1の須恵器杯身は、TK23号型式と類似しており、5C末頃の年代が与えられている。

胎土分析では土師器の杯A・杯Cともに地元産と推測され、またH12号住居地の南壁下ピット脇から出土した粘土と胎土が近いとしている。杯C等はことに精製品で他からの搬入を考えていたが結果は在地であろうということである。

H8・30号住居址が代表的住居である。この期の住居は焼失家屋であり、同一の時期であることが確認できる。H14号住居址はやや新しい様相がある。

2) 第Ⅱ期(川原端Ⅰ・Ⅱ期、屋代・古墳7期、6C前半～中頃)

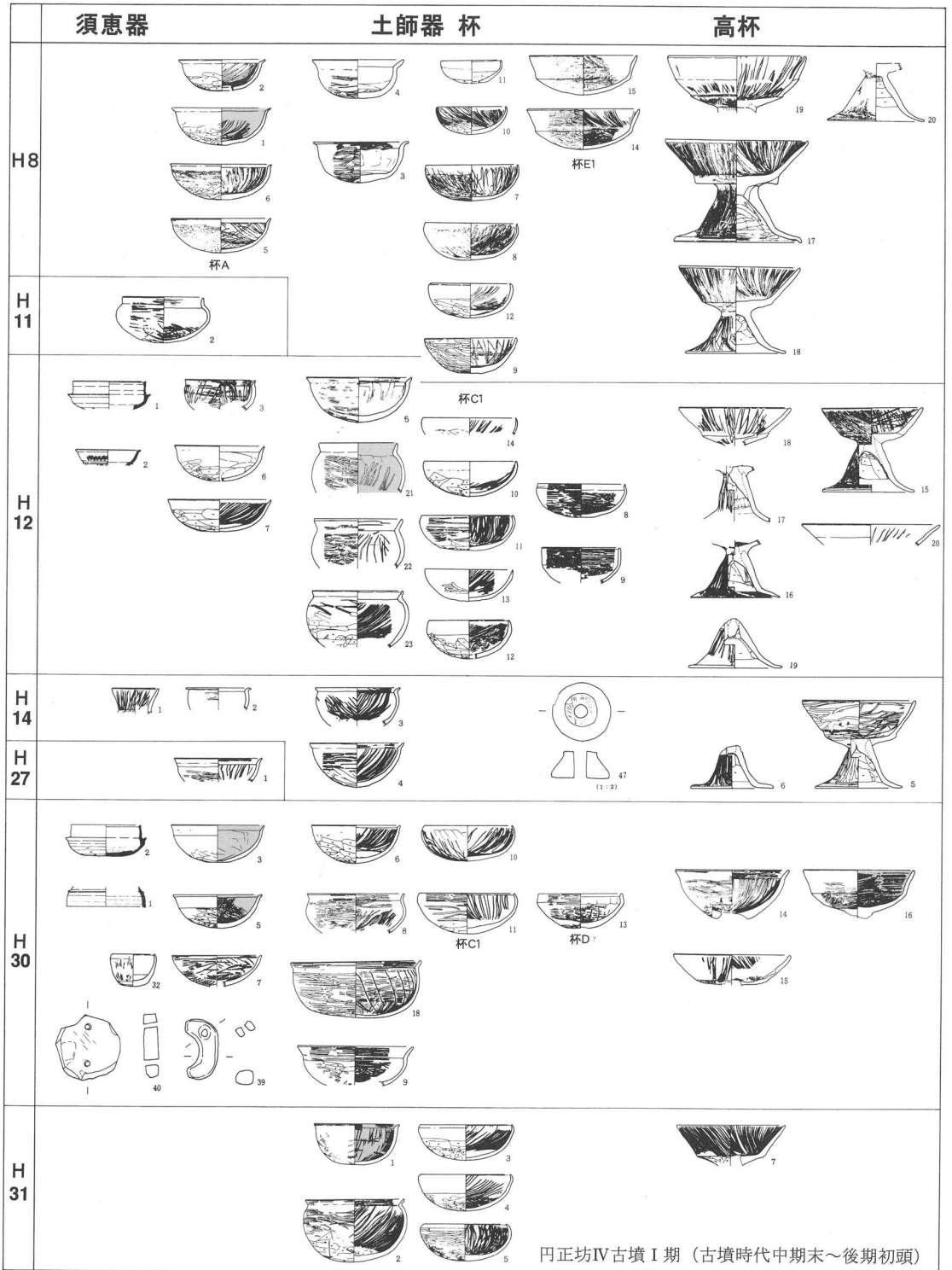
杯Aはなく、杯Bがあらわれ、杯D1・D2、杯E1・E3が主体である。杯Cも数を減らして伴う。新相と古相に分かれるが、連続するため資料は入り混ざる。

杯B2が主体である。杯B3も伴う。杯E3は有段口縁が段を留めるものと沈線状になるものがある。沈線状になるものを新相とした。高杯は減り、全器形のわかる資料はないが、脚部は柱状になり、裾部は短く外反し、脚外面はミガキ調整される。新相では杯Cの底部が平らな杯部がのってくる。

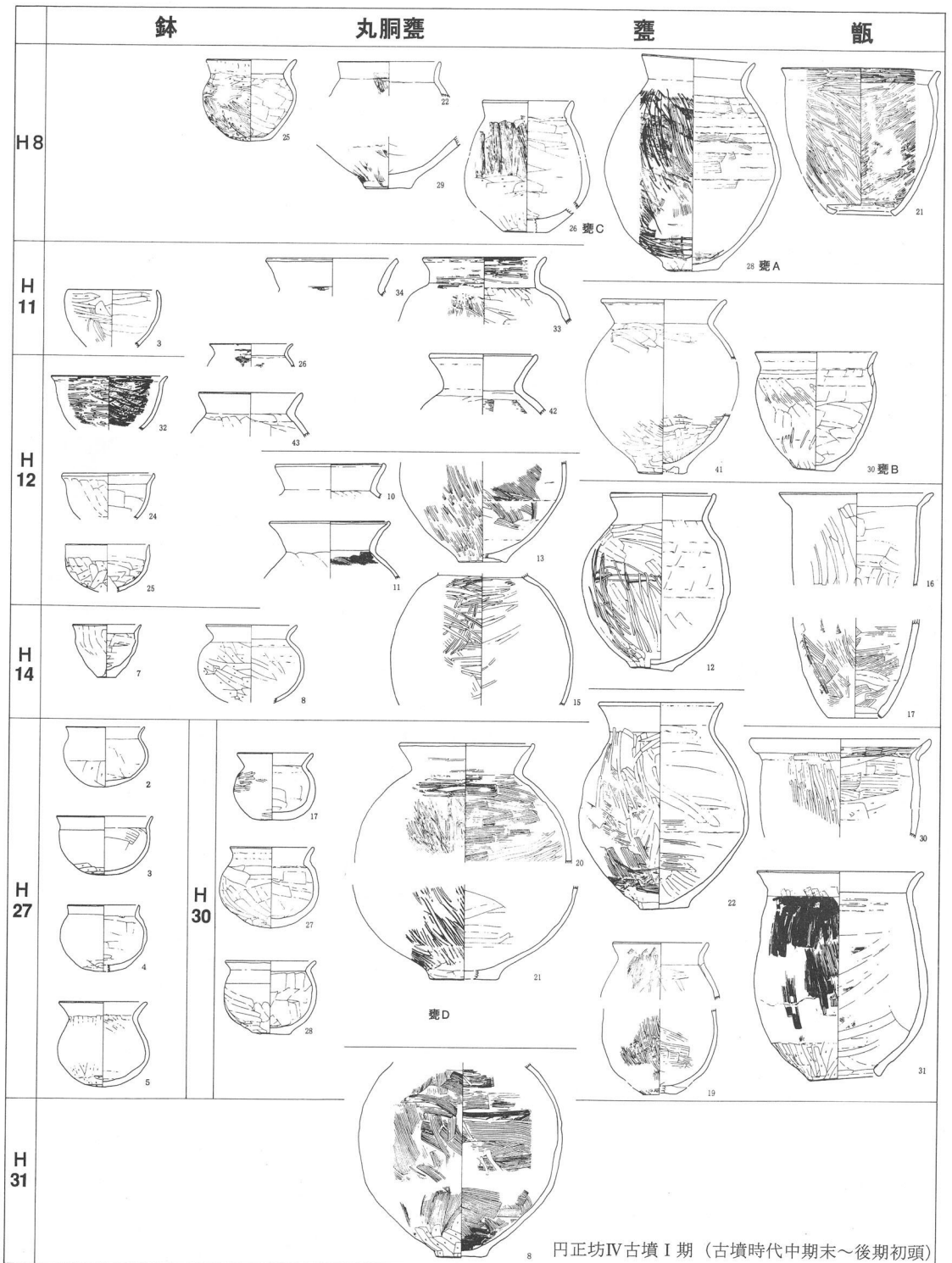
甕はD・E・F甕が主体を占める。甕Dは胴部が球胴形を呈し、ミガキ調整される。古相はより球胴形が強く、新相は張りが弱いものとなる。甕EはE1とE2が共伴する。新相では甕E1が見えなくなり、口縁が外反する甕E2が主体となる。器台など伝承品としては甕E1が残る。甕FはF1である。

また鉢に脚がつく台付きの鉢を伴う。

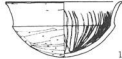
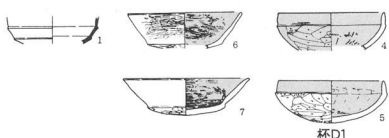



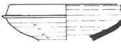




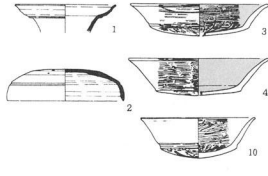







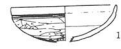


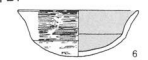



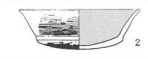
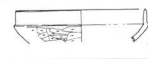


甗の大型品は口縁部形が「く」字形がゆるくなり、外反器形に近くなる。胴形が比較的スリムになり、一孔である。小型で鉢形または鉢から転用し、径の小さい一孔の甗がある。



第98図 円正坊遺跡IV土器編年図 (2)



第98図 円正坊遺跡IV土器編年図 (2)

	須恵器	土師器 杯	高杯	鉢・他
H 17				
H 5			 	
H 10		  		
I H 1		  	 	 
H 26			 	
H 25			 	
V H 1		 		
H 29		 		

円正坊IV古墳Ⅱ期古相（古墳時代後期）

第99図 円正坊遺跡IV土器編年図（3）

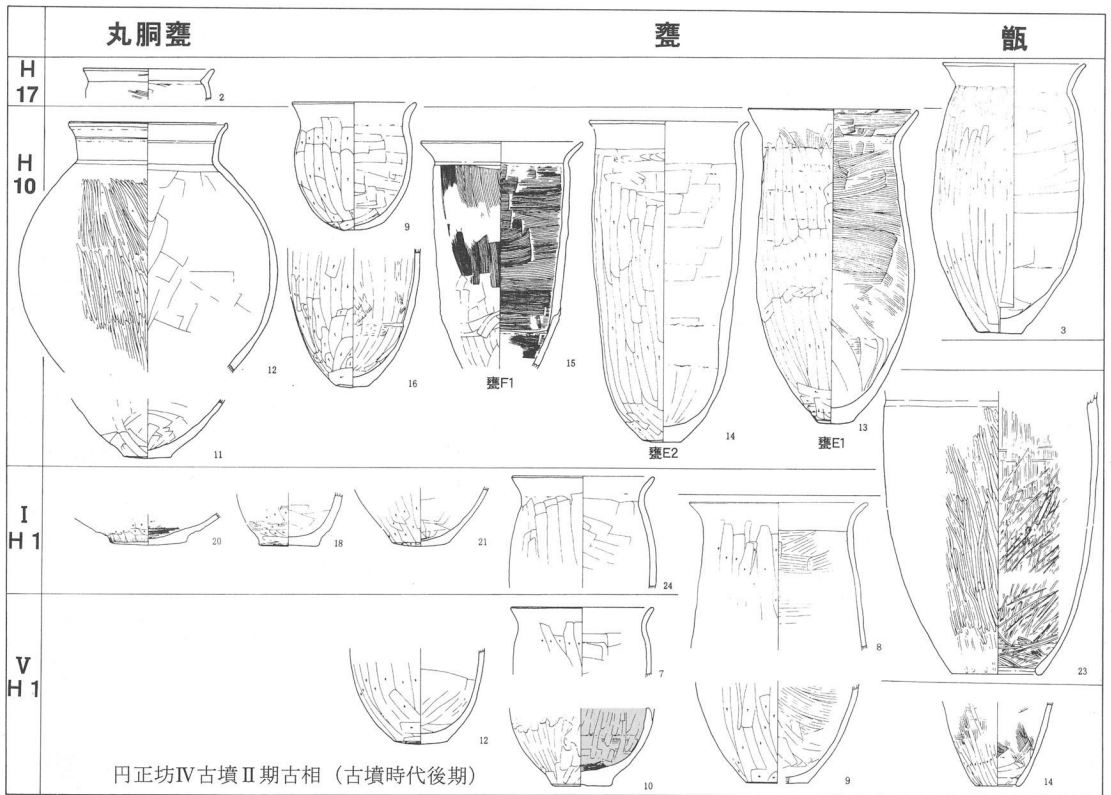
杯B 1の存在が複数存在しないことからI期から連続せず、時間があるようだ。

土師器の杯E 3はⅡ期新相の段が沈線化してくるものは別として、古相の、段を留める（H28.2）ものは搬入品と考えていたが、H12の粘土の組成と近いという分析結果である。それに対し、Ⅱ期古相・新相の甕D類の丸胴甕H14.15、H13.18、と甕H13.21が在地ではなく、生産地不明とされた。この期に須恵器が産地不明が多くみられ、ともに搬入された可能性がある。

Ⅱ期古相ではH10号住居址、円正坊I H 1号住居址、円正坊VのH 1号住居址が代表的な住居址である。

須恵器は円正坊IのH 1.2の杯蓋があり、陶邑産である。MT15・TK10号型式と類似しており、6C前半～後半の年代があてられている。H10.1は産地は不明であるがほぼ同期と思われる。

Ⅱ期新相ではH 3・H 7号住居址が代表的な住居址である。須恵器が陶邑産から地元でもなく、猿投でもないものとなる。H 3.1の長径壺は産地は不明であるが、頸部が太く、球形に近い胴部形、胴下部がヘラケズリ後、ナデ調整されるなどTK10号型式が該当するものであろう。



第99図 円正坊遺跡IV土器編年図（3）

3) 第Ⅲ期（川原端Ⅲ、屋代・古墳8期、6C後半～7C初頭）

杯BがB4となり、杯EはE2になり、E3の有段口縁杯は良好な資料がない。杯Dは外稜を持って内傾する。杯D3になる。高杯は杯Bが扁平なって杯部としてのっている。甕は底径が比較的大きいE2・F2がみられる。また前代の甕Aも伝承品として残る。新たな甕として、底部径が大きく、樽型の成形の整わない甕がある（H22.20）。甕Dは胴形が球形を呈する。滑石製白玉を伴う。

Ⅲ期ではH22号住居址が代表的な住居址である。須恵器はH4.1の壺がある胎土分析で猿投窯跡群が産地とされた。壺底部のみで器形は明らかではないが胴下部は回転ヘラケズリされている。

	須恵器	杯	高杯	鉢・他
H1				
H3		杯B2 		
H7				
H13		杯D1 		
H23		杯D2 		
I H2				
H20				
H21		第100図円正坊遺跡IV土器編年図(4) 円正坊IV古墳II期新相(古墳時代後期)		

	須恵器	土師器杯	高杯	鉢・他
H2				
H4		杯B4 		
H22		杯D3 		
H28		杯E3 		
	第101図円正坊遺跡IV土器編年図(5) 円正坊IV古墳III期(古墳時代後期)			

(3) 古墳時代の遺構

1) 竪穴住居址

古墳時代の土器の分類に従って、各住居址の時期についてみると

①古墳Ⅰ期

H 8・H11・H12・H14・H27・H30・H31 7棟

②古墳Ⅱ期古相

H 5・H 6・H10・H17・H25・H26・IEOH 1・IEOV H 1 8棟

③古墳Ⅱ期新相

H 1・H 3・H 7・H13・H15・H20・H21・H23・IEO I H 2 9棟

④古墳Ⅲ期

H 2・H 4・H 9・H22・H28 5棟

①古墳Ⅰ期

古墳Ⅰ期の住居址は本遺跡では焼失家屋が多く、炭化材が多量に残っていた。またH14は明らかに人為埋土の住居であった。住居址の形態は方形を呈し、カマドを北壁中央に付近に持っている。

規 模 (() 内数値は南北長であるが南北が不明なものは東西長である。単位cm)

大規模 H30 (752)

中規模 H 8 (452)・H11 (478)・H12 (540)・H14 (438)

小規模 H31 (316)

形 態 方形

主 軸 北より20° 前後西をさす。

カマド 地山である黄褐色ロームを袖として掘り残し、粘土を張る。

柱 穴 主柱穴は4本。堀方に柱痕を伴い、床面より70~80cm 深く掘る。

貯蔵穴 または作業用ピットであろうか。南壁下中央より右にある。ピットの北肩に小堤を設ける。

遺 物 勾玉・石製模造品を伴い、土器の量が多い。

②古墳Ⅱ期古相

規 模 (() 内数値は南北長であるが南北が不明なものは東西長である。単位cm)

大規模 IEO I H 1 (860cm)・H10 (798cm)・IEOV H 1 (606)

中規模 H 6 (418)・H25 (430)・H26 (440)

小規模 H 5 (386)

①古墳Ⅰ期と比較すると大型の住居址が出現する。

形 態 南壁に方形の張り出しがつく住居址がある。

主 軸 ほぼ北を指す。

カマド 煙道を長く住居址の外に伸ばす傾向がある。資料が少ないが袖は粘土で構築。

柱 穴 主柱穴は4本。堀方に柱痕を伴い、床面より70~80cm 深く掘る。

貯蔵穴 カマド側の東または西の北東に移り、ピット南方に小堤を持つ。

遺 物 前代より数は減るが土器量が多い。

③古墳Ⅱ期新相

規 模 (() 内数値は南北長であるが南北が不明なものは東西長である。単位cm)

大規模 IEO I H 2 (800)

中規模 H 1 (428)・H 3 (522)・H 7 (576)・H13 (492)・H21 (420)・H23 (488)

小規模 H20 (366)

形 態 南壁に方形の張り出しがつく住居址がある。

主 軸 東に傾くものがある。

カマド 資料が少ないが袖は粘土で構築。

柱 穴 主柱穴は4本。堀方に柱痕を伴い、床面より70~80cm 深く掘る。

貯蔵穴 カマド側の北東に移り、ピット南方に小堤を持つ。

遺物 変わらず多くの土器が出土する。

④古墳Ⅲ期

規模 (() 内数値は南北長であるが南北が不明なものは東西長である。単位cm)

大規模 H22 (820)

中規模 H 2 (460)・H 4 (520)・H28 (472)

小規模 H 9 (396)

形態 方形。

主軸 北・やや西を指す。

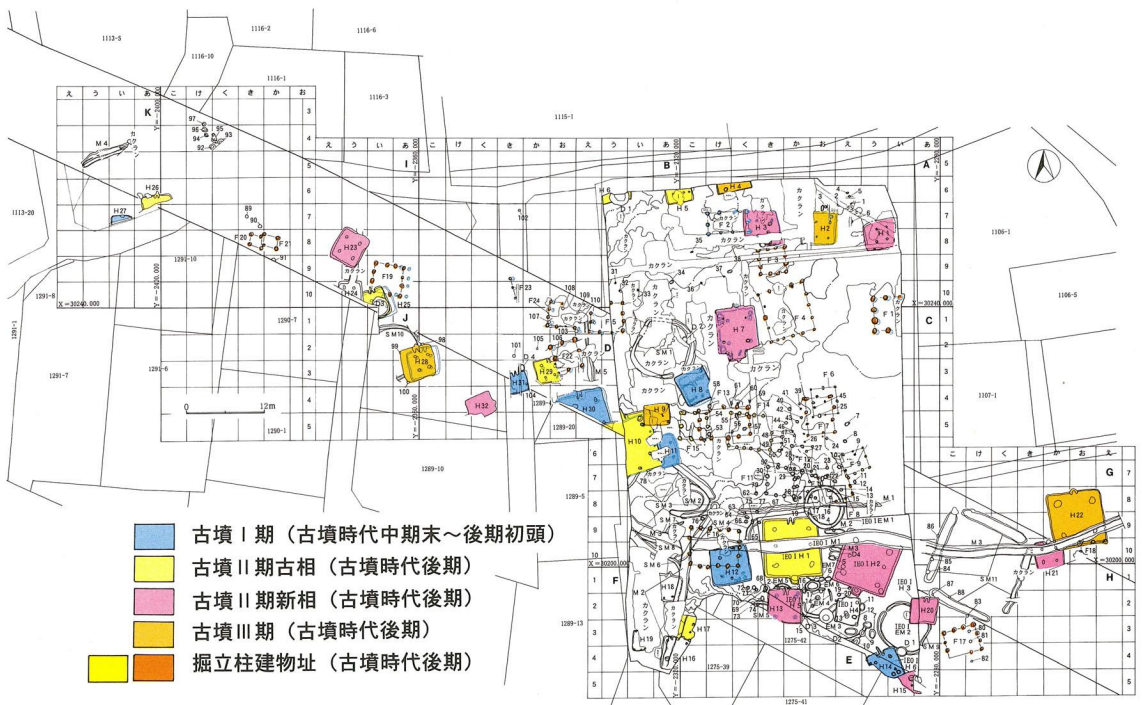
カマド 袖石を芯材に置き粘土を貼る。

柱穴 支柱穴は4本。深く掘り、H22では柱を貼床と同時に埋めている。

貯蔵穴 カマド側の北東に移り、ピット南方に小提を持つ。

遺物 前代より土器の数が減る。

古墳時代中期末から後期初頭にかけての集落が本遺跡に初めて集落を形成し、他に要因はあったのかもしれないが直接は火事で住居址を放棄している。土器などの様相からは継続せず、しばらく時間をおいて、6C代にまた集落を形成し、古墳時代後期の後半7C頃集落が途絶えたのであろう。そしてまた平安時代まで200年間は集落は途絶える。



第 102 図 円正坊遺跡Ⅳ古墳時代堅穴住居址変遷図

(1 : 1,000)

2) 掘立柱建物址

円正坊遺跡Ⅳの掘立柱建物址は24棟検出された。そのうち古墳時代と決定できるのはF 2号掘立柱建物址だけである。古墳時代後期の、H 3号住居址に切られ、古墳時代の土器片を出土している。しかしながら古墳時代の集落の中に展開する遺構であること。後代の土器片を含まない。また移動した古墳時代の竪穴住居址同様、地盤のズレがみられる。これらより、これから述べる掘立柱建物址は古墳時代後期の所産といえよう。

またF 6を除いて側柱式である。

掘立柱建物址の規模

(桁行×梁行 単位m)

3間×2間	F 2 (5.7×2.98)・F 7 (5.54×4.18)・F 9 (4.02×3.36)・F 10(5.32×4.02)	・・・4棟
3間×3間	F 3 (4.08×3.88)・F 5 (5.2×4.44)・F 8 (4.44×4.04)・F 17 (5.24×3.88) ・F 19 (4.52×4.4)・F 24 (4.33×3.74)	・・・6棟
4間×3間	(F 1ー×5.08)・F 13 (7.74×4.24)	・・・2棟
5間×4間	F 14 (6.56×5.04)・F 16 (7.6×5.68)	・・・2棟
1間×1間	F 20 (1.96×1.64)・F 21 (2.16×1.64)	・・・2棟
2間×2間	F 6 (4.28×3.84)・F 12 (3.84×3.22)・F 15 (4.08×4)・F 22 (4.16×3.86)	・・・4棟
4間×4間	F 4 (7.72×7.04)	・・・1棟

最大桁行き F 14

桁行き5.4m前後掘立柱建物址 F 1・F 2・F 4・F 5・F 7・F 10・F 13・F 14・F 17・F 16

桁行き3.6m前後 F 3・F 6・F 8・F 9・F 12・F 15・F 19・F 22・F 24

桁行き2m前後 F 20・F 21

1998松村「古代の大型建物跡」(注7)によると、古代の掘立柱建物址は梁行きは2～3間が基本とし、官衛の建物でも桁行きを伸して規模を拡大する。東国の集落掘立柱建物址の規模は桁行き3間と2間の建物のが全体の8割を占める。また東国の柱間寸法にはばらつきがあり、規格性を欠くとしている。

本遺跡でも最も多いのは3間の建物であり、次が2間の建物である。また柱間の寸法も異なる。この中でF 14は桁行き5間(6.56m)を測り中心的な建物であることが考えられる。

3間×3間、2間×2間の方形を呈する掘立柱建物址がこの古墳時代後期には多く、3間×2間の長方形の掘立柱建物址が多い。柱穴の規模が大きく直径50～90cmを測る。

3) 古墳

SM 2号周溝は出土遺物に古墳時代後期の土器がみられ、溝も楕円形を呈し、他の周溝址とは異なる。古墳の周溝ではないかと推測される。攪乱により、主体部の痕跡がないが、古墳が存在したようだ。SM 3から出土する6の須恵器杯身は本址の近くで出土しており、本址に伴う可能性もある。6C代であろうか。

第3節 平安時代

本遺跡からは4棟の竪穴住居址と3棟の掘立柱建物址、IEOVから土坑1基が検出される。

(1) 竪穴住居址

4棟の竪穴住居址は土器がほぼ同一期のものであり、同時に存在した住居址であろう。住居址の規模はH16号住居址の南北長462cmが最大で、408・402センチのH18・IEOIH 4号住居址、最小はH19号住居址の288cmである。

カマドは北壁にあり、粘土で構築し、カマドの幅が広がっている。主柱穴が明瞭なのはH16号住居址で他は不明瞭である。H19・IEOIH 4号住居址には壁下に壁柱穴が巡っている。

出土遺物は須恵器では蓋・杯・高台付杯・四耳壺があり、土師器では杯・皿・甕がある。

須恵器蓋は扁平な宝珠状のつまみが付き、端部が屈曲して折れるものである。須恵器杯はすべて回転糸切り離しのままである。須恵器杯は灰色を呈する。高台付杯は器高が深い。土師器杯は内面ミガキ黒色処理される。破片ではあるが墨書土器も2点あった。甕はいずれも武蔵甕で口縁部形態が「コ」字形を呈する武蔵甕である。器肉は薄く、底径が小さい。これらより、平安時代の前半9C頃に位置づけられよう。

H24.1の須恵器杯は依田窪窯址群、原山窯跡産と胎土分析されている。他の須恵器杯も同じ窯のものであろう。

	須恵器 蓋	杯	台付杯	土師器 杯	皿	甕
H 16						
H 18						
H 19						
H 24						
I H 4						
V D2						

第 103 図 円正坊遺跡IV土器編年図(6) 平安時代

4 節 まとめ

円正坊遺跡IVは弥生時代後期には墓域、古墳時代中期末～古墳時代後期後半(5C末～7C初頭)は集落、また約2世紀ほど途絶えて平安時代の前半の一時期集落となり、また集落は消えて、中世?であろうか道路として、人々が往来したことが今回の調査でわかった。

古墳中期末から古墳時代初頭の堅穴住居址が、本遺跡、長土呂の下聖端遺跡、岩村田の北西の久保遺跡・大井城跡・内西浦遺跡II(報告書は平成14年以降で未完)等において、焼失家屋であることが確認されている。この時期にこの岩村田・長土呂地籍で大きな火災があり、集落を焼き尽くしたのであろう。本遺跡においては、初めて集落形成されたため古墳I期の資料には混入品がなく、土器編年の良好な資料である。

須恵器については古墳I期ではすべて陶邑窯跡群産、古墳にII期では陶邑窯跡群産もあるが、在地ではなく陶邑窯跡群産でもなく猿投窯跡群産でもない須恵器がみられる。今のところ窯跡は不明である。古墳III期になると猿投窯跡産の須恵器が出土している。土師器はI期では在地の胎土であるが、II期になると土師器も在地ではない搬入されたものがでてくる。それも甌・丸胴甕・長胴甕など大型品である。また土師器と須恵器の胎土には関連性はないと言うことである。

最後に、この地点の地盤のズレは、調査する上で常に課題であり、十分に理解できず、また検出しきれないまま調査が進行かつ終了に至ったことは担当として反省するところである。その上攪乱が深く多々あり、住宅街に道路を新たに造成するため、上物が移り次第の調査であり、数回にわたって1遺構を調査したりした。費やした労力と時間は並々ならぬものであった。

こうした状況の中で報告書の刊行まで関係していただいた皆様には深く感謝いたします。ありがとうございました。

引用・参考文献

- 注1. 1991 青木 一男 「研究ノート・千曲流域の周溝墓覚書」『長野県考古学会誌－弥生文化特集号－63』長野県考古学会
- 注2. 1981 林 幸彦 「後沢遺跡」『長野県史考古資料編 全1巻(2)』長野県史刊行会
1999 佐久市教育委員会 『鳴沢遺跡群五里田遺跡』
1984 佐久市教育委員会 『北西の久保(1次)』
1985 佐久埋蔵文化財センター 『西浦遺跡群西裏・竹田峯』
1987 佐久埋蔵文化財センター 『北西の久保－南部台地の状の調査』
2001 佐久市教育委員会 『岩村田遺跡群柳堂遺跡』
- 注3. 1990 小山 岳夫 「地域編年の再検討－弥生土器佐久地方様相と変化」『信濃』42-10
- 注4. 2001 佐久市教育委員会 『大和田遺跡群川原端遺跡』
- 注5. 1999 小林 真寿 『一本柳遺跡群西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ』佐久市教育委員会
- 注6. 1999 鳥羽 英継 「更埴条理遺跡・屋代遺跡群－総論編－」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28』長野県埋蔵文化財センター
- 注7. 松村 恵司 公開セミナー「古代の大型建物跡－役所か邸宅か－」(財)かながわ考古学財団平成9年度発掘調査成果発表会
- 注8. 1996 佐久市教育委員会 『佐久市埋蔵文化財年報4』「清水田遺跡」
- 注9. 1997 佐久市教育委員会 『円正坊Ⅱ』

その他

1978. 歴史図書社 『北佐久郡の考古学的調査』
1981. 中村 浩 『和泉陶器の研究－須恵器生産の基礎的考察』
1981. 田辺 昭三 『須恵器大成』角川書店
1986. 佐久市教育委員会 『大井城跡』
1990. 中村 浩 『研究入門須恵器』柏書房
1992. 佐久市教育委員会 『国道141号線関係遺跡』
1999. 長野県考古学会弥生部会編 『長野県の弥生土器編年』
2000. 福田 聖 『方形周溝墓の再発見』(株)同成社

I E O V 竪穴住居址一覧表

<残> (推定)

遺構名	出土位置	形態	規模 (cm・cm ²)				主軸方位	かまど	柱 穴	備 考
			南北長	東西長	壁 高	面積 (南北長)×(東西長)				
H1	A-い-7	方 形	428	420	6~22	179,760	N-80° -W	(東?)	主 柱 4 その他 2	
H2	A-え-7	〃	460	458	20~40	210,680	N-4° -E	北	主 柱 4 その他 3	
H3	A-き-7	〃	490	522	1~14	255,780	N-0°	(北)	主 柱 3 その他 2	F2を切る。
H4	A-く-6	〃	<148>	520	15~28	-	N-10° -W	不明	主 柱 1	北側調査区外。
H5	A-こ-6	〃	<218>	386	20~27	-	N-14° -W	不明	主 柱 2	〃
H6	B-い-6	〃	<110>	<418>	4~17	-	N-3° -E	不明	-	北側・西側調査区外。 D1に切られる。
H7	C-く-1	長方形	576 774	556	13~51	320,256 430,344	N-7° -W	北	主 柱 4 その他 3	
H8	C-こ-3	方 形	452	436	32~55	197,072	N-28° -W	北	主 柱 4 その他 1	SM1を切る。
H9	D-あ-4	長方形	<306>	396	2~20		N-5° -W	北?		H10を切る。
H10	D-い-5	方 形	798	<800>	6~38		N-13° -W	北	主 柱 3 その他 4	西側調査区外。 H9に切られる。H11・SM3・単P78を切る。
H11	D-あ-5	〃	478	452	17~44	216,056	N-16° -W	北	主 柱 3	H10に切られる。SM3を切る。
H12	C-く-10	〃	540	560	12~46	302,400	N-10° -W	北	主 柱 4 その他 4	F16・M3に切られる。
H13	E-か-1	〃	492	510	27~50	250,920	N-2° -E	北	主 柱 4 その他 2	南西側カクラン SM5・IEOI EM4・EM5を切る。
H14	E-い-4	〃	438	442	4~59	193,596	N-20° -W	北	主 柱 4 その他 3	南西側カクラン IEOI D1・H15に切られる。SM9を切る。
H15	E-あ-5	-	<272>	<228>	22~42		N-18° -W	不明	主 柱 1	西側カクラン H14切る。
H16	E-こ-3	方 形	462	<412>	12~43		N-7° -E	北	主 柱 3 その他 1	H17を切る。M2に切られる。
H17	E-こ-2	-	<360>	<168>	4~29		N-16° -E	不明	主 柱 2 その他 1	東側カクラン H16に切られる。
H18	E-こ-1	方 形	408	<354>	31~57		N-10° -E	北	その他 1	西側カクラン M2に切られる。
H19	F-い-3	-	288	<192>	6~24		N-3° -E	不明	主 柱 1 壁 柱 5	東側カクラン
H20	E-あ-2	方 形	366	388	16~47	142,008	N-6° -E	北	主 柱 4 その他 1	SM9・SM11を切る。
H21	G-か-10	-	<406>	420	9~25		N-8° -W	北	主 柱 4	南側カクラン M3・H22に切られる。
H22	G-え-8	方 形	820	812	5~54	665,840	N-9° -W	北	主 柱 4 その他 4	M3に切られる。H21を切る。
H23	I-い-8	長方形	488	434	14~42	211,792	N-29° -E	北	主 柱 4 その他 4	
H24	I-う-10	-	<250>	332	10~46		N-3° -W	北	主 柱 2	南側調査区外 H25を切る。
H25	I-い-10	方 形	430	(436)	31~47		N-23° -W	北	主 柱 3	南西側調査区外 H24・F19・D3に切られる。
H26	I-こ-6	-	<178>	440	2~15		N-12° -W	北	主 柱 2 その他 1	南側カクラン
H27	K-い-7	-	<156>	286	4~10		N-2° -E	不明	その他 1	南側道路で未調査
H28	B-こ-2	方 形	移動後472 452	478 452	36~57	204,308	N-13° -W	北	主 柱 4 その他 1	SM10・単P98・P99・P100を切る。
H29	B-お-3	〃	364	356	0~27	129,584	N-16° -W	北	主 柱 4 その他 1	東側カクラン 単P106を切る。F22に切られる。
H30	B-う-4	-	<650>	758	1~74		N-16° -W	北	主 柱 3 その他 3	南西側調査区外
H31	B-か-3	-	316	<300>	9~34		N-15° -W	北	その他 8	西側カクラン D4・単P104に切られる。

IEOⅣ 掘立柱建物址一覧表

〈残〉(推定)

遺構名	様式	検出位置	桁行×梁間 (間)	桁行×梁間 (m)	桁行柱間 (m)	梁間柱間 (m)	長軸方位	柱穴規模 (cm)		備考
								径	深さ	
F1	側柱式	Aい10	〈2〉×2	〈3.78〉×5.08	1.64~1.96	1.61~1.85	N-87° - E	66~94	16~38	東側調査区外
F2	〃	Aく7	3×2	5.7×2.98	1.82~1.84	1.32~1.66	N-86° - E	40~67	24~53	H3に切られる。
F3	〃	Aか8	3×3	4.08×3.88	1.22~1.58	1.1~1.45	N-86° - E	48~63	19~38	北側カクラン
F4	〃	Aか10	4×4	7.72×7.04	1.62~2.22	1.5~2.02	N-16° - W	33~80	17~42	北側カクラン 南北棟
F5	〃	Bう10	3×3	5.2×4.44	1.69~1.74	1.44~1.51	N-91° - E	44~54	24~48	北側調査区外。 M5を切る。
F6	総柱式	Cえ4	2×2	4.28×3.84	2.06~2.26	1.88~1.96	N-5° - W	20~52	8~26	南北棟
F7	側柱式	Cお4	3×2	5.54×4.18	1.56~2.08	1.76~2.42	N-5° - W	32~110	20~42	南北棟
F8	〃	Cえ7	3×3	4.44×4.04	1.36~1.52	1.3~1.44	N-73° - E	23~44	26~40	南西側・北側カクラン F8・EM1を切る。 IEOIM1に切られる。
F9	〃	Cう6	3×2	4.02×3.36	1.26~1.48	1.54~1.8	N-68° - E	31~48	16~27	北側カクラン F8に切られる。
F10	〃	Cえ7	3×2	5.32×4.02	1.64~1.94	1.86~2.54	N-104° - E	31~75	32~58	F11・IEOI EM1を切る。 IEOIM1に切られる。
F11	〃	Cか7	3×3	4.38×4.28	1.28~1.62	1.18~1.58	N-95° - E	56~65	16~42	
F12	〃	Cお6	2×2	3.84×3.22	1.9~1.94	1.34~1.9	N-5° - E	42~61	24~35	東側カクラン 南北棟
F13	〃	Cく4	4×3	7.74×4.24	1.47~2.75	1.26~1.52	N-86° - E	46~71	32~48	F14を切る。
F14	〃	Cき5	5×4	6.56×5.04	1.03~1.82	1.16~1.36	N-95° - E	45~58	32~56	北側・西側カクラン F13に切られる。
F15	〃	Cけ5	2×2	4.08×4	2~2.08	1.8~2.2	N-3° - E	50~94	21~44	南北棟
F16	〃	Cく9	5×4	7.6×5.68	1.3~1.76	1.24~1.6	N-94° - E	51~70	40~94	H12・SM3を切る。 M2・M3に切られる
F17	〃	Hけ3	3×3	5.24×3.88	1.49~1.9	1.2~1.35	N-74° - E	40~76	10~26	南東側検出時に削平
F18	〃	Gえ10	〈2〉×〈1〉	〈3.88×1.54〉	1.84~2.04	1.54	N-89° - E	47~80	39~71	南側カクラン M3に切られる。
F19	〃	Iあ9	3×3	4.52×4.4	1.23~1.72	1.22~1.7	N-101° - E	50~78	34~78	H25を切る。
F20	〃	Kき8	1×1	1.96×1.64	1.44~1.96	1.64	N-2° - E	56~62	39~65	南北棟
F21	〃	Kか8	1×1	2.16×1.64	2.16	1.64	N-95° - E	47~69	15~42	
F22	〃	Dえ2	2×2	4.16×3.86	1.72~2.44	1.64~2.22	N-16° - W	64~88	24~44	単P106新旧不明。 南北棟、H29を切る。
F23	不明	Bき9	-×2	-×3.06	-	1.38~1.68	N-72° - E	44~46	18~35	西側カクラン
F24	側柱式	Dお1	3×3	4.23×3.74	1.4~1.48	1.22~1.26	N-94° - E	48~53	13~35	

IEOⅣ 溝址一覧表

〈残〉(推定)

遺構名	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	備考
M1	Cう8~Cこ9	3,298	36~90	3~27	東から西に低い。(70cm) F10・SM2・SM3・単P63・P70を切る。IEOI EM1を切る。
M2	Cこ9~Fあ4	〈2,022〉	96~184	12~59	北から南に低い。(110cm) H16・H18・F16・SM3・SM6・M3を切る。
M3	Gう9~Dい9	〈7,613〉	145~222	13~49	M2に切られる。東から西に低い。(168cm)。IEOI H1・H2・M2を切る。 H12・H21・H22・F16・F18・SM3・SM4・SM7・SM11を切る
M4	Kい4~Kえ5	〈796〉	86~139	24~47	東から西に低い。(6cm)
M5	Dえ1~Dえ3	〈960〉	34~115	4~32	南から北に低い。(5cm) F5に切られる。

I E O V 土坑一覧表

〈残〉(推定)

遺構名	出土位置	平面形	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	深さ (cm)	長軸方位	備 考
D1	B-う-6	円形	300	<200>	121	N-85° - E	北側は区域外。 H6を切る。
D2	C-こ-2	隅丸方形	88	80	41	N-16° - W	SM1に切られる。
D3	I-い-10	楕円形	327	272	52	N-9° - E	H25を切る。
D4	D-か-3	〃	108	100	17	N-2° - W	H31を切る。

I E O V 周溝址一覧表

〈残〉(推定)

遺構名	出土位置	形態	規模 (cm)		溝幅 (cm)	溝深さ (cm)	備 考
			外 周	内 周			
SM1	C-こ-1	円形	南北976×東西958		50~134	3~39	D2を切る。H8に切られる。
			南北(824)×東西(750)				
SM2	C-け-8	楕円形	南北510×東西<660>		65~118	5~44	SM3を切る。M1に切られる。
			南北293×-				
SM3	C-け-8	方形	南北1,416×東西1,490		112~162	21~71	西側調査区外。SM8を切る。 H10・H11・F16・M1・M3・SM2・SM6・単P76に切られる。
			南北1,124×東西1,240				
SM4	C-く-9	円形	(624)		57~88	7~21	単P75との新旧不明。1/6残存。 M3・単P65・IEO I H 1に切られる。
			(480)				
SM5	E-き-2	楕円形	(640)		46~59	6~19	H13・単P74に切られる。1/7残存。
			(560)				
SM6	D-あ-10	円形	(432)		42~49	9~29	SM3を切る。M2に切られる。
			(320)				
SM7	C-こ-9	〃	(416)		48	5~27	M3に切られる。
SM8	D-あ-10	方形	東西<232>		94	21~36	SM3に切られる。
SM9	C-あ-3	円形	長径800×短径736		33~73	9~44	H14・H20・IEOI D1に切られる。
			長径720×短径624				
SM10	J-あ-1	〃	南北880×東西<556>		37~72	5~46	H28に切られる。
			南北742×-				
SM11	G-き-10	方形	南北1,526×東西1,494		65~176	9~63	単P87・P88との新旧不明。 H20・M3・単P83・P84・P85・P86に切られる。
			南北1,212×東西1,200				

I E O IV 単独ピット一覧表

No.	出土位置	規模 (cm) 長径×短径×深さ	平面形	覆 土 ・ 他	重 複 関 係
P1	Aえ7	36×(38)×24	円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子、バミスを含む。2,暗褐色土層 (10YR3/4)	カクランに切られる。
P2	Aえ7	50×(32)×23	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子、バミスを含む。2,暗褐色土層 (10YR3/4)。	カクランに切られる。
P3	Aお7	40×38×38	円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子、バミスを少し含む。2,暗褐色土層 (10YR3/4)	
P4	Aえ6	38×26×39	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) バミスを含む。	
P5	Aえ6	38×34×20	円形	暗褐色土層 (10YR3/3) ローム、バミスを多量に含む。	
P6	Aえ7	46×(42)×24	円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミスを含む。	カクランに切られる。
P7	Cえ5	82×46×32	楕円形	黒色土層 (10YR1.7/1) ローム粒子、バミスをわずかに含む。焼土、炭化物粒子わずかに含む。	
P8	Cえ6	52×42×23	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミスを含む。にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) ローム主体。	
P9	Cえ6	44×36×26	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミスを含む。にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) ローム主体。	
P10	Cえ7	56×48×36	不整楕円形	黒色土層 (10YR1.7/1) ローム粒子、バミスをわずかに含む。焼土、炭化物粒子わずかに含む。	カクランに切られる。
P11	Cえ7	60×36×27	楕円形	黒色土層 (10YR1.7/1) 褐色土層 (10YR4/4) ローム混在土、バミスを多く含む。	
P12	Cえ7	24×24×10	円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミスを多く含む。	
P13	Cえ8	38×26×13	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミスを多く含む。	
P14	Cえ8	52×42×33	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) 柱痕。2,黒褐色土層 (10YR2/3) バミス、ローム粒子を多く含む。	
P15	Cお8	68×(58)×31	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミスを多く含む。2,黒褐色土層 (10YR2/2)	IEOIのEM1に切られる。
P16	Cお8	44×40×31	円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミスを含む。	
P17	Cお8	52×44×29	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) 2,暗褐色土層 (10YR3/4) 2cm大バミス、ローム多量に含む。	IEOIのEM1を切る。
P18	Cか8	42×32×41	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、バミスわずかに含む。2,黒褐色土層 (10YR2/3)	IEOIのEM1に切られる。
P19	Cか8	62×50×32	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミスを多く含む。	
P20	Cお7	36×34×46	円形	1,黒褐色土層 (10YR2/3) 柱痕、ローム粒子含む。2,黒褐色土層 (10YR2/3)	
P21	Cお7	64×54×21	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミス多く含む。大きい石あり。	
P22	Cお7	58×48×24	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム少、バミス2cm大・小含む。	
P23	Cお7	50×42×48	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/3) 柱痕。2,褐色土層 (10YR4/4) 3,黒褐色土層 (10YR2/3)	
P24	Cお6	42×30×24	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、バミスを含む。	
P25	Cお5	54×40×43	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、バミスわずかに含む。	
P26	Cか6	26×26×13	円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、バミスを含む。	
P27	Cか6	34×32×10	円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、バミスを含む。	
P28	Cか6	28×26×17	円形	黒褐色土層 (10YR3/2) ローム、バミスを多く含む。	
P29	Cか7	48×44×22	円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、バミスを多く含む。	
P30	Cか7	(64)×60×24	円形	黒褐色土層 (10YR3/2) ローム、バミスを多く含む。	
P31	Bう10	48×42×13	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミス、炭化物を含む。	
P32	Bう10	48×42×12	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミス、炭化物を含む。	
P33	Bい10	(28)×24×23	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子多く含む。バミスを含む。	
P34	Bあ10	62×40×25	長方形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、バミスを含む。	
P35	Aこ8	40×24×33	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) 柱痕。2,黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミスを含む。	
P36	Aこ10	34×22×15	不整楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2) ローム、バミスを多く含む。	

P37	Aけ9	38×26×22	楕円形	褐色土層 (10YR4/4) ローム、暗褐色土層混在。	
P38	Aけ9	72×34×27	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) パミス、ローム粒子含む。	
P39	Cか4	36×28×16	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、パミス含む。	
P40	Cか4	56×50×49	楕円形	黒色土層 (10YR1.7/1) ローム、パミス少々含む。	
P41	Cか4	34×32×17	円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、1cm大パミスを含む。	
P42	Cか5	42×40×24	円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、パミスを含む。	
P43	Cか5	44×42×41	円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、パミスを含む。	
P44	Cか5	46×36×13	楕円形	黒色土層 (10YR1.7/1) ローム、パミスを少々含む。	
P45	Cお4	38×32×21	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、1cm大パミスを含む。	
P46	Cか5	24×22×7	円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、パミスを含む。	
P47	Cか5	40×30×15	楕円形	暗褐色土層 (10YR3/3) ローム、パミスを含む。	
P48	Cき6	58×44×26	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) 2,黒褐色土層 (10YR2/3)	
P49	Cき6	34×28×10	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) 2,黒褐色土層 (10YR2/3)	
P50	Cき6	54×42×28	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) 2,黒褐色土層 (10YR2/3)	
P51	Cき6	26×20×13	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、パミスを含む。	
P52	Cき7	50×40×45	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、パミス含む。2,黒褐色土層 (10YR2/3)	
P53	Cけ5	58×52×30	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR3/2) 2,黒褐色土層 (10YR2/2)	
P54	Cけ5	52×46×33	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、パミスを含む。2,暗褐色土層 (10YR3/3)	
P55	Cく5	90×38×20	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、パミスを含む。	
P56	Cく5	(56)×(44)×32	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、パミスを含む。	カクランに切られる。
P57	Cく5	56×44×45	楕円形	褐色土層 (10YR4/4) ローム、パミスを多く含む。	
P58	Cけ4	(98)×40×35	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) 炭化物を含む。ローム、パミスを含む。	カクランに切られる。
P59	Cく4	44×28×9	楕円形	暗褐色土層 (10YR3/3) ローム、パミスを含む。	
P60	Cく4	42×38×-	円形	暗褐色土層 (10YR3/3) ローム、パミスを含む。	
P61	Cく4	(54)×52×10	円形	褐色土層 (10YR4/4) ローム、パミスを多く含む。	カクランに切られる。
P62	Cく8	36×32×44	円形	黒褐色土層 (10YR2/3) 1cm大パミス多く、ローム粒子を含む。	P79を切る。
P63	Cく9	42×38×43	円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子、パミスを含む。炭化物粒子含む。	M1に切られる。
P64	Cく9	66×40×22	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) 3cm大パミス、ローム粒子を多く含む。	
P65	Cく9	36×30×32	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子、パミス、炭化物粒子を含む。	SM4を切る。
P66	Cく9	56×50×28	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子、パミス、炭化物粒子を含む。	
P67	Cき9	44×38×33	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子、パミス、炭化物粒子を含む。	
P68	Eき1	82×56×19	不整楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ~5cm大パミスを含む。	P69を切る。
P69	Eき2	38×(30)×7	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム、パミスを含む。	P68に切られる。
P70	Eく1	42×36×15	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子、2cm大パミスを含む。	
P71	Eく1	54×40×20	楕円形	暗褐色土層 (10YR3/3) ローム、パミスを含む。	
P72	Eく1	48×46×13	円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、パミスを含む。	
P73	Eき2	66×56×17	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) 3cm大パミス、ローム柱痕。	
P74	Eく2	(46)×38×13	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子、2cm大パミスを含む。	SM5を切る。

P75	Cく9	36×28×27	楕円形	暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子を含む。	SM4との新旧不明。
P76	Cこ9	60×50×22	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) バミス、ローム粒子を含む。	SM3を切る。
P77	Cく9	50×42×29	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2) バミス、ローム粒子を含む。	M1に切られる。
P78	Dい7	40×36×27	円形	1,黒褐色土層 (10YR2/3) 柱痕。2,暗褐色土層 (10YR3/3) ローム、バミスを含む。	H10に切られる。
P79	Cく8	(46)×44×27	円形	黒褐色土層 (10YR2/3) ローム、バミスを含む。	P62に切られる。
P80	Hけ3	44×40×37	円形	1,暗褐色土層 (10YR3/3) 柱痕。2,暗褐色土層 (10YR3/4) ロームブロックを含む。	
P81	Hけ3	40×40×15	円形	1,にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ローム、バミスを含む。2,明黄褐色土層 (10YR6/6)	
P82	Hけ4	28×26×14	円形	1,褐色土層 (10YR4/4) ローム粒子を多く含む。	
P83	Hけ2	40×40×38	円形	1,黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子を多く含む。	SM11を切る。
P84	Eあ1	56×46×63	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR3/2) バミス、ロームを含む。2,にぶい黄褐色土層 (10YR5/4)	SM11を切る。
P85	Cあ10	58×24×50	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR3/2) バミス、ロームを含む。2,にぶい黄褐色土層 (10YR5/4)	SM11を切る。
P86	Cあ10の北	44×30×28	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR3/2) ローム、バミスを含む。	SM11を切る。
P87	Eあ2	28×22×17	楕円形	1,暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子、バミスを含む。	SM11との新旧不明。
P88	Hこ2	30×30×43	円形	1,黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子、バミスを含む。	SM11との新旧不明。
P89	Iき7	48×44×25	円形	1,黒色土層 (10YR1.7/1) 2,黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子、バミスを含む。	
P90	Iき7	54×50×25	円形	1,黒色土層 (10YR1.7/1) 2,褐色土層 (10YR4/4) 黒色土、ロームブロックの混在土。	
P91	Iか9	52×42×41	楕円形	1,黒色土層 (10YR1.7/1) 2,黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子、バミスを含む。	南側調査区外。
P92	Iく4	96×86×28	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) ロームブロック、バミスを含む。2,暗褐色土層 (10YR3/4)	
P93	Iく4	94×(44)×39	不整楕円形	1,黒褐色土層 (10YR3/2) バミス、ローム、砂粒を含む。2,暗褐色土層 (10YR3/3)	南側未調査。
P94	Iけ4	62×60×15	円形	1,暗褐色土層 (10YR3/3) 砂質土。	
P95	Iく4	154×82×25	不整楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/3) 粘質土。バミス、ロームブロック少量含む。	
P96	Iけ4	94×68×27	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR3/2) バミス、ローム、砂粒を含む。2,暗褐色土層 (10YR3/3)	
P97	Iけ4	68×64×26	円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) ロームブロック、バミスを含む。2,暗褐色土層 (10YR3/3)	
P98	Dこ2	36×(30)×52	不整楕円形	1,黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子、バミスを含む。	H28に切られる。
P99	Jあ2	32×(19)×30	不整楕円形	1,暗褐色土層 (10YR3/4) ローム。	H28に切られる。
P100	Jあ3	<42>×38×26	不整楕円形	1,暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土粒子、ローム、バミスを含む。	H28に切られる。
P101	Dき2	41×40×17	円形	1,黒褐色土層 (10YR3/2) 柱痕。2,暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子、バミスを多く含む。	
P102	Bき7	42×33×21	楕円形	1,黒褐色土層 (10YR2/3) 柱痕。2,褐色土層 (10YR4/4) ローム、バミスを多量に含む。	
P103	Dえ1	50×46×29	円形	1,黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子、バミスを含む。2,黒褐色土層 (10YR2/3)	ズレあり。
P104	Dか3	34×33×23	円形	1,黒褐色土層 (7.5YR3/2)	H31を切る。
P105	Dか2	35×35×10	円形	1,黒褐色土層 (10YR2/2) 柱痕。2,暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子を多量に含む。	
P106	Dお2	28×23×32	楕円形	1,暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子、バミスを含む。	F22との新旧不明。 H29に切られる。
P107	Dか1	50×47×38	円形	1,黒褐色土層 (10YR2/3) バミス、ロームを含む。2,暗褐色土層 (10YR3/3)	ズレあり。
P108	Dお1	42×38×12	円形	1,暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子、バミスを含む。2,黒褐色土層 (10YR2/3)	北側カクラン。
P109	Dえ1	32×(27)×15	楕円形	1,褐色土層 (10YR4/4) ロームを多量に含む。	東側カクラン。
P110	Dえ1	34×(19)×8	円形	1,黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子・バミスを含む。	北側カクラン。

IEOI 単独ピット一覧表

No.	出土位置	規模 (cm) 長径×短径×深さ	平面形	覆 土 他	重 複 関 係
欠番	-	-	-		F18、P6に変更。
P2	Eき1	48×36×32	楕円形		EM5を切る。
P3	Eか1	40×32×40	楕円形		H5、EM5を切る。
P4	Cえ9	32×28×8	楕円形		M2を切る。
P5	Eお10	100×72×23	楕円形		
1, (黒褐色土層) 粒子緻密、粘性中、黄色ローム微量混。 2, (褐色土層) 粒子細かく、粘性小、黄色ローム微量混、1～3cm大の軽石多量混。					
P6	Eお1	192×120×48	楕円形		
1, (暗褐色土層) 粒子緻密、粘性中、黄色ローム少量、軽石(1～2cm)少量混。2, (黒褐色土層) 粒子緻密、粘性小、 3, (褐色土層) 粒子緻密、粘性小、黄色ローム多量、軽石(1～2cm)少量。黄色ローム少量(1～2cm)多量。					
P7	Eう3	132×96×29	楕円形		
1, (黒色土層) 粒子緻密、粘性中、黄色ローム微量、1～3cm大軽石少量混、炭化粒子微量に含む。(ソフトな層) 2, (暗褐色土層) 粒子細かく、粘性小、 黄色ローム少量1～2cm大軽石少量混、炭化粒子微量含む。(ソフトな層) 3, (褐色土層) 粒子細かく、粘性小、黄色ローム多量、1cm大の軽石少量混。 (ややしまりある)					
P8	Eう3	136×100×37	不整楕円形		
1, (黒褐色土層) 粒子緻密、粘性中、黄色ローム少量と1～5cm大の軽石多量混。ソフトであるが、しまりがある。 2, (褐色土層) 粒子細かく、粘性小、黄色ローム多量、1～2cm大の軽石少量混。少しやわらかい。					
P9	Eえ3	104×88×53	楕円形		
1, (漆黒色土層) 粒子緻密、粘性中、黄色ローム、炭化粒子微量、1～2cm大の軽石少量。2, (暗褐色土層) 粒子細かく、粘性小、黄色ローム多量、炭 化粒子微量、1～3cm大軽石多量含む。3, (黒色土層) 粒子細かく、粘性小、黄色ローム少量、炭化粒子微量、1cm大の軽石少量含む。4, (褐色土層) 粒子細かく、粘性小、黄色ローム多量、1～2cm大の軽石少量含む。(1～4層まで固くしまりのある層)					
P10	Eえ4	-×96×40	楕円形		
1, (漆黒色土層) 粒子緻密、粘性中、黄色ローム微量、1～2cm大の軽石少量混。ソフトな層。 2, (黄褐色土層) 粒子細かく、粘性小、黄色ローム多量、1～2cm大の軽石少量混。ソフトな層。					
P11	Eえ2	108×80×20	楕円形		
1, (黒褐色土層) 粒子緻密、粘性中、黄色ローム少量、軽石1～2cm大少量混。(ソフトでひきしまった層) 2, (褐色土層) 粒子緻密、粘性中、黄色ロ ーム多量、軽石1～2cm大少量混。(ソフトでひきしまった層) 3, (黄色土層) 粒子細かく、粘性小、黄色ローム多量、軽石1～2cm大少量混。					
P12	Eえ3	70×52×10	楕円形		
(暗褐色土層) 粒子細かく、粘性小、黄色ローム、1cm大の軽石少量混。					
P13	Eえ2	108×60×26	楕円形		
1, (暗褐色土層) 粒子緻密、粘性中、黄白色ローム、ブロック状に多量混。1～2cm大の軽石少量含む。2, (黒褐色土層) 粒子緻密、粘性中、黄色ロ ーム、ブロック状に多量混。1～3cm大の軽石少量含む。3, (褐色土層) 粒子細かく、粘性小、黄色ローム多量混、軽石粒微量混。					
P14	Eお2	72×64×26	楕円形		
P15	Eお2	52×52×255	円形		
(黒褐色土層) 粒子緻密、粘性中、黄色ローム、軽石1～3cm大多量混。					
P16	Eか1	68×60×41	楕円形		
P17	Eお2	52×44×18	楕円形		
P18	Cお9	60×-×445	-		
P19	Eえ1	40×40×12	円形		
P20	Eえ2	54×48×22	円形		

IEOI 竪穴住居址一覧表

〈残〉(推定)

遺構名	出土位置	形態	規模 (cm・cm ²)				主軸方位	かまど	柱穴	備考
			南北長	東西長	壁高	面積 (南北長)×(東西長)				
H1	C-お-9	方形	860 990	838	0~64	720,680	N-3°-E	北	主柱穴 6 その他 2	IEO I EM7を切る。 IEO IV M3・IEO I EM1に切られる。
H2	C-い-10	◇	800 922	804	22~60	643,200	N-25°-E	北	主柱穴 6 その他 4	IEO I M3・D4を切る。 IEO IV M3に切られる。
H3										IEO IV H20に掲載。
H4	E-え-2	長方形	402	352	2~25		N-20°-E			IEO I EM3を切る。 IEO I P11に切られる。P12,13新旧不明。
H5										IEO IV H13に掲載。
H6										IEO IV H14に掲載。

IEOI 土坑一覧表

〈残〉(推定)

遺構名	出土位置	平面形	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	深さ (cm)	長軸方位	備考
D1	E-い-4	円形	156	152	46	N-1°-W	IEO IV、H14・IEO IV、SM9を切る。
D2	E-え-3	楕円形	192	112	29	N-83°-W	
D3	E-お-2	円形	248	222	93	N-69°-W	IEO I EM3・IEO I EM4を切る。
D4	C-え-10	楕円形	<164>	102	50	N-80°-W	IEO I H2・IEO I P5に切られる。IEO I M3を切る。

IEOI 周溝址一覧表

〈残〉(推定)

遺構名	出土位置	長さ (cm)		幅 (cm)	深さ (cm)	備考
		外周	内周			
EM1	C-え-8	南北640×東西618 南北522×東西476		50~82	11~36	IEO IV M1・F10・IEO V P15,P17,P18・IEO I H1に切られる。
EM2						IEO IV SM9に掲載。
EM3	E-う-3	南北406× 南北520×		44~78	12~30	南側カクラン IEO I H4,D3,P8,P9,P10に切られる。
EM4	E-お-2	南北452×東西452 南北352×東西379		28~66	5~30	IEO I P17を切る。 IEO IV H13・IEO I EM6・IEO I D3・IEO I P16に切られる。
EM5	E-か-1	-×東西<284> -×東西<168>		42~56	12~19	IEO IV H13・IEO I P2・IEO I P3に切られる。
EM6	E-お-1	南北192×東西238 南北104×東西155		28~46	8~23	北側カクラン IEO I EM4・IEO I EM7を切る。
EM7	E-お-1	-×東西<296>		76~80	15~26	IEO I H1・IEO I EM6に切られる。

IEOI 溝址一覧表

〈残〉(推定)

遺構名	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	備考
M1				IEO IV M3に掲載。
M2	C-え-9~C-お-9	<308>	68~80	東から西に低い。(5cm) IEO IV M3・IEO I P4に切られる。
M3	C-え-10~C-お-10	<202>	64~76	西から東に低い。(14cm) IEO I H2・IEO I D4に切られる。

IEOV 竪穴住居址一覧表

〈残〉(推定)

遺構名	出土位置	形態	規模 (cm・cm ²)				主軸方位	かまど	柱 穴	備 考
			南北長	東西長	壁 高	面 積 (南北長)×(東西長)				
H1	あ3	方 形	606	598	25.5~42	362,388	N-0°	北	主柱穴 4 その他 1	H2を切る。カクランに切られる。 ガラス小玉・釧
H2	あ4	長方形	(676)	516	1~12	359,840	N-35° -W	-	主柱穴 3 その他 5	H1・単独ピットP1~P4・カクランに切られる。 磨製石鏃出土。

IEOV 土坑一覧表

〈残〉(推定)

遺構名	出土位置	平面形	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	深さ (cm)	備 考
D1	こ3	楕円形	142	122	16	
D2	え3	楕円形	227	195	104	

IEOV 単独ピット一覧表

〈残〉(推定)

遺構名	出土位置	平面形	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	深さ (cm)	覆 土	備 考
P1	あ4	円 形	46	46	13	1,黒褐色 (10YR2/2) ローム・バミスを含む。 2,黒褐色 (10YR2/3) ローム粒子・バミスを含む。	H2を切る。
P2	あ4	円 形	45	42	17	1,黒褐色 (10YR2/2) ローム・バミスを含む。 2,黒褐色 (10YR2/3) ローム粒子・バミスを含む。	H2を切る。
P3	あ4	円 形	43	41	19	1,黒褐色 (10YR2/2) ローム・バミスを含む。 2,黒褐色 (10YR2/3) ローム粒子・バミスを含む。	H2を切る。
P4	あ5	円 形	47	46	14	1,黒褐色 (10YR2/2) ローム・バミスを含む。 2,黒褐色 (10YR2/3) ローム粒子・バミスを含む。	H2を切る。

円正坊遺跡IVの自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

円正坊遺跡は、佐久市大字岩村字下直路に所在し、浅間山の火砕流により形成された台地上に立地する。本台地は、濁川などの影響により「田切り地形」と称される地形が発達しており、円正坊遺跡はその台地上の東端に位置している。

今回の発掘調査では、古墳時代に比定される竪穴住居址、掘立柱建物址、円形周溝、溝址などの遺構が検出されており、住居址床面や付設された竈や柱穴、さらに、住居址内より出土した土器から炭化物・炭化材・炭化種子・灰・赤色顔料・骨片などが出土している。また、溝址からも骨片が出土している。

本報告では、円正坊遺跡における植物利用や動物利用に関する情報を得ることを目的とし、上記した各遺構から出土した植物質遺物（炭化材・種子）や灰、骨片を対象とし、樹種同定・灰像分析・骨同定を実施する。また、赤色顔料の原料に関する情報を得ることを目的とし、X線回折分析を実施する。

1. 試料

試料は、各住居址や溝址から出土した炭化物・炭化材、炭化種子、灰、骨片、赤色顔料など22点（試料番号1～21, H30No.28）である。試料の詳細、および、分析方法を表1に示す。

2. 分析方法

(1) 樹種同定

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕

第1表 分析試料および分析方法

番号	遺構名	出土位置	試料の種類	分 析 項 目				
				樹種同定	種実遺体同定	灰像分析	骨同定	X線回折
1	H 3	床下	木の实		●			
2	H 3	P 6	炭化材	●				
3	H 8	No.24	木の实		●			
4	H 8	No.3	炭化物と骨	●				
5	H 8	No.17	茅状炭化物	●		●		
6	H 8	No.18	炭化材	●				
7	H 8	No.22	茅状炭化物	●		●		
8	H 8	灰層 (カマドの袖下)	骨				●	
9	H 9	床下	木の实		●			
10	H 9		炭化物	●				
11	H11	No.1	炭化材	●				
12	H11	No.2	炭化材	●				
13	H14	灰層	骨				●	
14	H22	カマド	炭化物・灰	●		●		
15	H23	P 8	赤色顔料					●
16	H23	No.12	炭化材	●				
17	H28	No.3	炭化材	●				
18	H30	No.24	茅状炭化物	●		●		
19	H30	No.25	炭化材	●				
20	H30	No.15の壺	骨				●	
21	M 2		骨				●	
22	H30	No.28	炭化材	●				

微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(2) 種実遺体同定

肉眼あるいは双眼実体顕微鏡を用いて、その形態的特徴と現生標本との比較から種類を同定する。同定後の種実遺体は、乾燥剤とともにビンに詰める。

(3) 灰像分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壤中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となるが、植物遺体や植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993a）。そのため、珪化組織片の産状により当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

1) 茅状炭化物試料

灰像（珪化組織）の観察に障害となる有機物が含まれていたため、試料を過酸化水素水で漂白・灰化した。これを400倍の光学顕微鏡下で観察し、イネ科葉部（葉身と葉鞘）に由来した植物珪酸体を包含する珪化組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて調べる。

2) 竈内灰試料

試料は、灰と土壌が混在していたことから、以下のような手法を用いる。湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定する。

(4) 骨同定

試料に付着した土壌を筆により除去し、肉眼観察、および、標本との比較から種と部位の同定を行う。

(5) X線回折分析

土塊に混在した赤色顔料を抽出し、105℃で2時間乾燥させる。乾燥後の赤色顔料をメノウ乳鉢で微粉碎し、アセトンを用いてスライドガラスに塗布しX線回折測定試料とする。作成したX線回折測定試料を以下の条件で測定を実施する（足立, 1980; 日本粘土学会, 1987）。

検出された物質の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐, 未公表）により検索した。

装置：島津制作所製XD-3A	Time Constant：1.0sec
Target：Cu (K α)	Scanning Speed：2°/min
Filter：Ni	Chart Speed：2cm/min
Voltage：30KVP	Divergency：1°
Current：30mA	Receiving Slit：0.3mm
Count Full Scale：5,000C/S	Scanning Range：5~45°

3. 分析結果

(1) 樹種同定

樹種同定結果を表2に示す。H28No3（試料番号17）は、仮道管を主とすることから針葉樹剤であるが、小片で脆いために電子顕微鏡による観察ができず、種類の同定には至らなかった。その他の炭化材は、落葉広葉樹3種類（カバノキ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節）とイネ科に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・カバノキ属 (Betula) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2~4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は、比較的高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状~交互状に配列する。放射組織は同性、1~4細胞幅、1~30細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔

を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

(2) 種実遺体同定

種実遺体は全て完全に炭化している状態であった。表3に同定結果を示す。種実遺体は、広葉樹2種類(オニグルミ・モモ)に同定された。以下に各種類の形態的特徴を記す。

・オニグルミ (Juglans mandshurica Maxim. subsp. Sieboldiana (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

核破片が同定された。黒色。大きさは18mm以上。核は緻密で硬く、表面には不規則で複雑な凹凸があり、ごつごつしている。内側にも複雑な凹凸がみられ、子葉が入る2つの大きな窪みがある。完形ならば卵形で先端が尖り、明瞭な縦の縫合線がある。

・モモ (Prunus persica Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)の完形と破片が同定された。黒色。広楕円

形でやや扁平。基部は丸く大きな臍点があり、先端部はやや尖る。長さ18mm、幅14mm、厚さ11mm程度か。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。内果皮は厚く(3mm程度)硬い。表面は縦に流れる不規則な線状の溝があるため、全体として粗いしわ状に見える。内側にはゆるやかな丸みがある。

H8から出土したモモには、縫合線上に齧歯類(ネズミやリスなど)によると考えられる食害痕が観察された。

(3) 灰像分析

灰像分析結果を表4に示す。また、各試料の産状を以下に記す。

・茅状炭化物試料

いずれの茅状炭化物も、肉眼観察ではササ類やススキ等のイネ科植物の稈(茎)に類似する。しかし、珪化組織片中には、特徴的な形態を有する植物珪酸体が含まれず、種類の特定には至らない。

・竈内灰試料

イネ属とウシクサ族(ススキ属)に由来する珪化組織片が検出される。また、単体の植物珪酸体として、イネ属、ウシクサ族、ヨシ属機動細胞珪酸体などが認められる。この他、水生珪藻の珪藻殻も検出される。

(4) 骨同定

試料の同定結果を表5に示す。遺構毎の概要を以下に記す。

・竪穴住居址

H8(試料番号3)ではカマドの土師器甕内から、H14(試料番号13)では灰層から、H30(試料番号20)では壺内部の土壌から、それぞれ骨片が検出される。これらは全て焼骨であり、

灰白色を呈する。これら試料は、被熱による亀裂や劣化、さらに細片で特徴が失われていることから同定は不可能であった。緻密質の厚さなどから、イノシシやニホンジカ程度の中型獣の可能性が考えられる。

・溝址

M2(試料番号21)から検出された骨片の一つは左脛骨の遠位端片であり、形態的特徴からウマ(Equus caballus)

表2 炭化材の樹種同定結果

番号	遺構名	出土位置	樹種
2	H3	P6	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
4	H8	No.3	コナラ属コナラ亜属コナラ節
5	H8	No.17	イネ科
6	H8	No.18	コナラ属コナラ亜属コナラ節
7	H8	No.22	イネ科
10	H9		コナラ属コナラ亜属コナラ節
11	H11	No.1	コナラ属コナラ亜属コナラ節
12	H11	No.2	コナラ属コナラ亜属コナラ節
14	H22	カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
16	H23	No.12	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
17	H28	No.3	針葉樹
18	H30	No.24	イネ科
19	H30	No.25	カバノキ属
	H30	No.28	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

表3 種実遺体同定結果

No.	遺構名	出土位置	種類名	備考
1	H3	床下	モモ(破片)	
3	H8	No.24	モモ(完形1)	食害痕あり
9	H9	床下	オニグルミ(破片)	

表4 灰像分析結果

番号	遺構名	出土位置	遺物名	種類
5	H8	No.17	茅状炭化物	不明
7	H8	No.22	茅状炭化物	不明
14	H22	カマド	炭化物・灰	イネ属・ウシクサ族(ススキ属)

表5 骨同定結果

番号	遺構	出土位置	分類	部位	左右	部位	被熱	重量
3	H8	カマド袖下	獣類	不明		破片	有	1.1g
13	H14	灰層	獣類	不明		破片	有	1.3g
20	H30	No.15壺	獣類	不明		破片	有	0.3g
21	M2		ウマ	脛骨	左	骨体・遠位端	無	23.9g

と同定される。同一遺構から出土した他の破片も接合関係はないものの、左脛骨の骨体片と想定される。左脛骨遠位端と骨体との癒合状態が確認出来ないため、個体の年齢は不明である。また、骨片表面の保存状態は不良のため、解体痕跡等の確認はできない。

(5) X線回折分析

赤色顔料のX線回折図を図1に示す。赤色顔料において検出された鉱物は石英 (quartz)、斜長石 (plagioclase)、赤鉄鉱 (hematite) の3鉱物である。なお、約20° からバックグラウンドの上昇が見られることから、試料中には比較的多くの鉄の存在が示唆される。

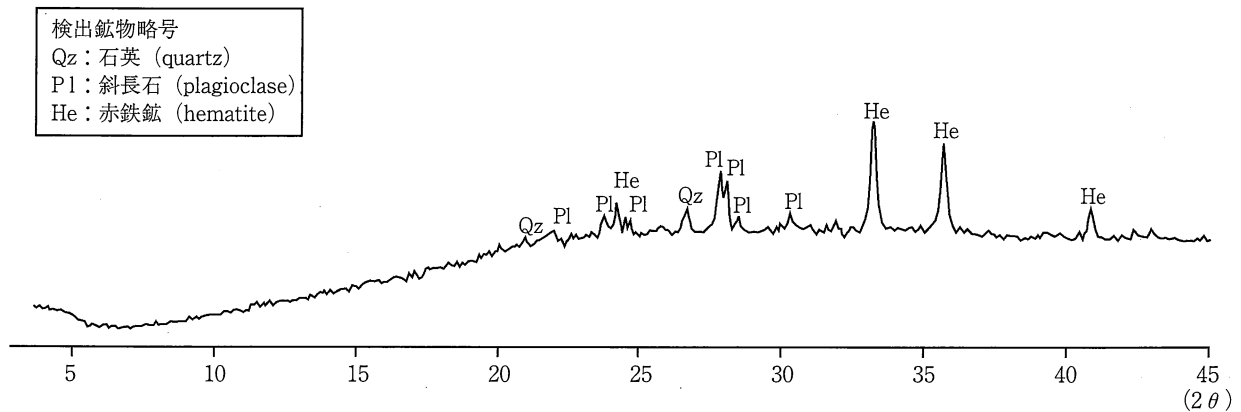


図1 赤色顔料 (試料番号15) のX線回折図

4. 考察

(1) 植物利用について

1) 住居構築材

H3・H8・H9・H11・H23・H30から出土した炭化材および茅状炭化物 (試料番号2・5・6・10~12・16・17~19、H30No28) は、柱穴や床面から出土していることから住居構築材に由来する試料と考えられる。茅状炭化物については種類を特定することはできなかったが、肉眼観察および横断面の観察からイネ科の稈と判断され、材質などを考慮すると、屋根材などに由来するものと考えられる。一方、炭化材は、種類不明の針葉樹、落葉広葉樹のカバノキ属、クヌギ節、コナラ節の4種類が認められ、クヌギ節やコナラ節が多数を占めている。落葉広葉樹の3種類は、いずれも強度の高い材質を有することから、強度を必要とする垂木、桁などに利用されたものと考えられる。

なお、佐久市内では、これまでに聖端遺跡、聖原遺跡、川原端遺跡、根々井芝宮遺跡等で住居構築材とされる樹種の同定が行なわれ (パリノ・サーヴェイ株式会社, 1992; 未公表資料)、基本的にクヌギ節・コナラ節が多く利用されている傾向を確認している。また、クヌギ節やコナラ節が住居構築材に多用される例は、佐久盆地およびその周辺地域の遺跡で多数確認されており (パリノ・サーヴェイ株式会社, 1988a, 1988b, 1989a, 1989b, 1991, 1993b, 1994a, 1994b, 1994c, 1995; 藤根, 1994; 高橋・辻本, 1998, 1999; 高橋, 2000)、円正坊遺跡をはじめ周辺地域で同様な用材の選択が行われていたことが推定される。

2) 燃料材

H22 (試料番号14) は、竈内から採取された試料であることから燃料材に由来すると考えられる。炭化材はクヌギ節に同定され、灰からはイネ属とウシクサ族 (ススキ属) の組織片が認められた。

クヌギ節は、薪炭材として利用した場合高いカロリーが得られることから、国産材の中でも最も有用な樹種の一つとされている。なお、このような木材を薪などの燃料材として利用する場合、最初は火がつきにくいいため、焚き付けとして燃えやすい草本類などを用いることが推測される。今回の分析結果では、イネ属やウシクサ族 (ススキ属) の組織片が認められていることから、これら草本類が焚き付け材として利用されていた可能性が考えられる。

なお、クヌギ節やコナラ節などは、雑木林 (二次林) の主構成種であり、人里周辺に一般的に見られる樹種である。したがって、本遺跡周辺にもクヌギ節やコナラ節を主とした雑木林 (二次林) が存在し、そこから住居構築材や燃料

材となる木材を入手していたことが推定される。こうした雑木林は、放置すると陰樹を中心とした森林に遷移してしまうため、下草の伐採、落葉の清掃、約20年周期での皆伐等を通じて、古くから維持・管理および資源の有効利用が計られてきた(犬井, 1992)。こうした利用形態が古墳時代まで遡るか定かでないため検討を要するが、本地域でクヌギ節やコナラ節が大量に利用されていることを考慮すると、当地域での雑木林の維持や資源の有効活用が行われていた可能性がある。

3) 植物食糧

H3・H8・H9(試料番号1・3・9)から出土した種実遺体は、それぞれオニグルミやモモに同定された。いずれの種類も植物食糧とされるものである。なお、H3・H9(試料番号1・9)は、住居址の床下から出土した試料であるため、厳密には食糧として利用されたものであるか判断が難しい。

オニグルミは、アク抜き無しで生食可能な堅果類である。長期保存が可能で収量も多く、油も採れることから、古くより里山で保護されてきた種類である。

モモは、大陸から渡来した栽培植物であり、果実や核の中にある仁などが食用、薬用等に広く利用される。最も古い出土例は縄文時代前期とされ、弥生時代以降になると全国各地の遺跡から出土例があり(粉川, 1988)、佐久市では聖原遺跡からモモ核が出土している(氏原・廣瀬, 1992)。したがって、古墳時代には、本遺跡や周辺地域でモモが食糧として利用されていた可能性が考えられる。

現在広く栽培されているモモは、明治時代以降に渡来したものであるため、当遺跡から出土したモモと直接のつながりはない。本遺跡から出土したモモの核は、現在のモモと(30?40mm程度)と比較して小型で球に近い形状を呈している。これまで、モモの核は、厚くて丸く小型のものが古い形質を表し、新しいものほど扁平になるとされ(堀田, 1980など)してきた。しかし、発掘調査による事例の増加から様々な形状のモモ核が確認され(金原ほか, 1992)、また、弥生時代以前の遺跡からも大型で扁平な核が出土しているため、現状では核の形状から品種や時代観について述べることはできない。なお、円正坊遺跡から出土したモモの核は、住居址の床面や床下から出土していることから、古墳時代またはそれ以前の所産であることが考えられる。

(2) 動物利用について

H8・H14・H30(試料番号3・13・20)から出土した骨片は、中型獣と考えられる獣類の焼骨である。残滓処理などのために意図的に、あるいは偶発的にカマド内で火を受けたと考えられる。

M2(試料番号21)からはウマの左脛骨が検出された。ウマは、考古学的遺物(馬具など)や遺存体の調査から、4世紀末~5世紀にかけて出現し、全国的にみると5世紀以降普及したと考えられている家畜である(松井, 1991、西中川ほか, 1991)。ウマの普及の背景には、古墳時代中期の広い範囲にわたる巨大な権力の出現と密接な関係があると考えられている(松井・久保, 1999)。本遺跡のある佐久市周辺では、奈良~平安時代には官牧が存在したと考えられており(松井, 1991)、鑄師屋遺跡群では多数の遺存体が調査されている(宮崎, 1988)。当試料は、古墳時代に比定される溝址から出土しており、当該期におけるウマの存在を示唆するものであるが、肢骨1点のみの出土であるため、その性格については判断できない。

M2(試料番号21)のウマ左脛骨の遠位端幅は、およそ51mm前後になると推測される。西中川ほか(1988)の報告によれば、日本在来馬の小型馬であるトカラ馬の脛骨遠位端幅は、雄6.04±0.25cm、雌6.05±0.26cmである。本試料が成獣であれば、トカラ馬より小さい小型馬の可能性はある。

(3) 赤色顔料について

赤色顔料に認められた鉱物のうち、赤色を呈する鉱物は赤鉄鉱が代表的である。他の検出鉱物は、岩石や土壌にごく一般的に認められる鉱物であることから、赤色顔料採取時に混在した土壌由来の鉱物と推定される。したがって、H23・p8から出土した赤色顔料(試料番号15)は、赤鉄鉱由来とする、いわゆるベンガラと考えられる。

ベンガラは、古墳時代では土師器、埴輪、遺体埋葬施設等に施された例が報告されている(市毛, 1998)。円正坊遺跡では住居址内のピットから出土していることから、何らかの用途に用いるため保管されていた可能性がある。

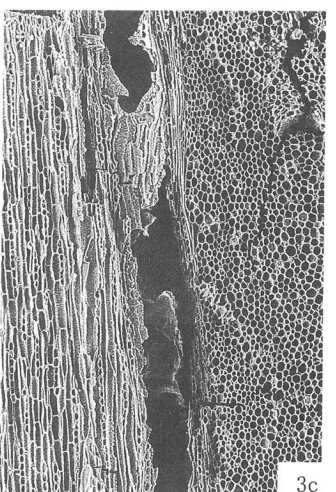
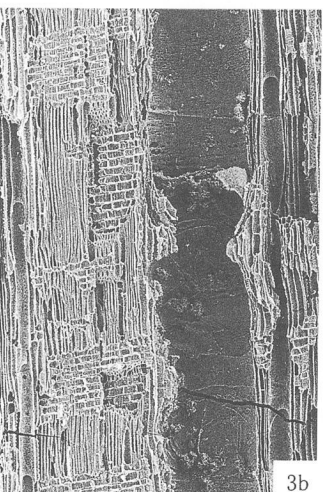
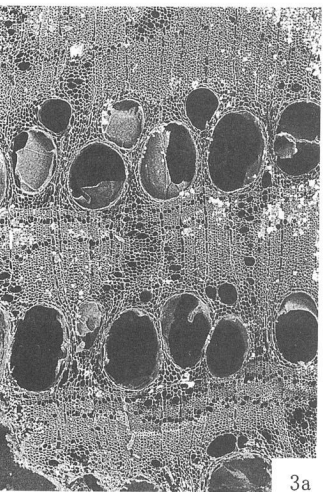
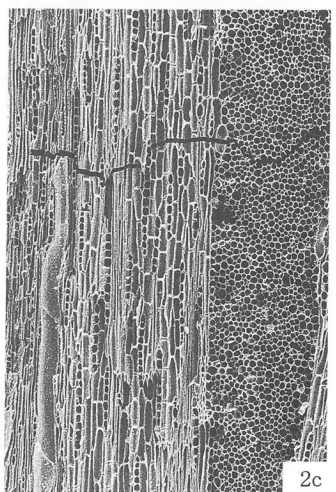
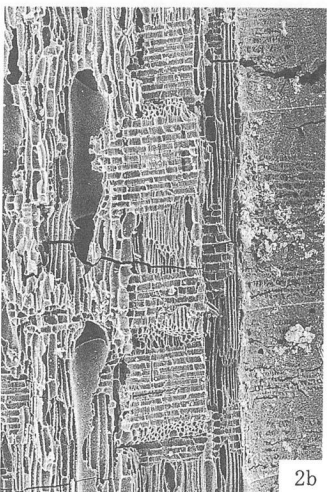
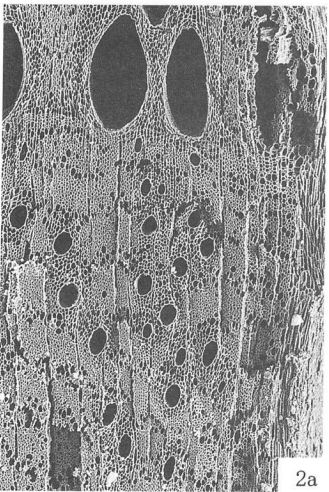
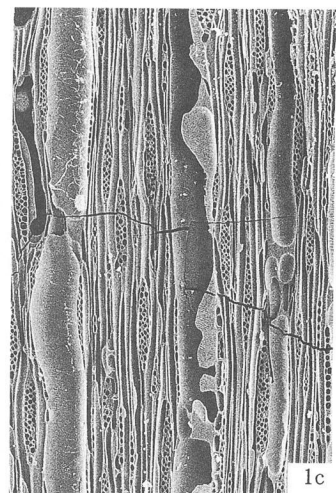
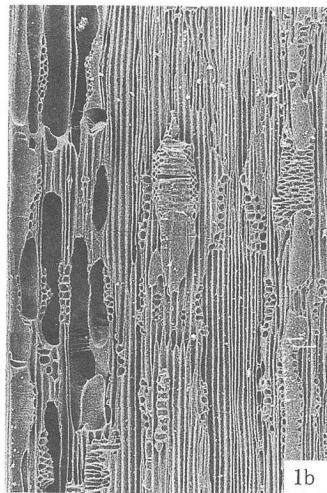
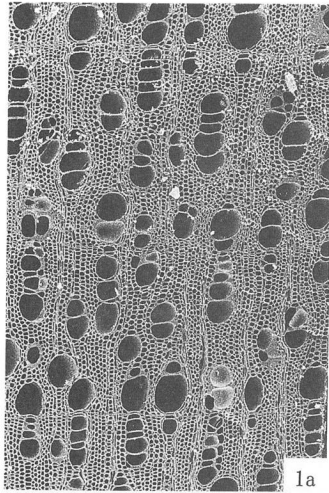
引用文献

- 足立吟也(1980) 粉末X線回折法。「機器分析のてびき3」. p.64-76, 化学同人。
藤根 久(1994) 出土柱材の樹種。「長野県更埴市 屋代遺跡群 大境遺跡IV・V」, p.66, 更埴市教育委員会。
堀田 満(1980) モモ。「植物の生活誌」, p.137-140, 平凡社。
市毛 勲(1998) 新版 朱の考古学。296p., 雄山閣。
犬井 正(1992) 関東平野の平地林。157p., 古今書院。

- 金原正明・粉川昭平・太田三喜（1992）モモ核を中心とする古代有用植物の変遷．日本文化財科学会第 9 回大会研究発表要旨集，p.76-77.
- 粉川昭平（1988）穀物以外の植物食．金関 恕・佐原 真編「弥生文化の研究 2 生業」，p.112-115.，雄山閣.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.
- 松井 章（1991）家畜と牧一馬の生産．「古墳時代の研究 4 生産と流通 I」，p.105-119，雄山閣出版.
- 松井 章・久保和士（1999）家畜その 2 -ウマ・ウシ．「考古学と自然科学 2 考古学と動物学」，西本豊弘・松井章編，p.169-208，同成社.
- 南木陸彦（1991）栽培植物．「古墳時代の研究 4 生産と流通 I」，石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編，p.165-174，雄山閣.
- 宮崎重雄（1988）鋳師屋遺跡群出土の馬歯・馬骨と獣骨類について．「鋳師屋遺跡群 根岸遺跡 長野県北佐久郡御代田町根岸遺跡発掘調査報告書」，p.297-310，御代田町教育委員会.
- 日本粘土学会編（1987）粘土ハンドブック 第二版．1289p.，技報堂出版.
- 西中川 駿・上村俊雄・松元光春（1988）「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究一とくに日本在来種との比較」．昭和63年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果 報告書，95p.，鹿児島大学農学部獣医学科.
- 西中川 駿・本田道輝・松元光春（1991）「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」．平成 2 年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書，197p.，鹿児島大学農学部獣医学科.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1988a）鋳物師屋遺跡出土炭化材同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集「鋳物師屋遺跡群 鋳物師屋 一長野県小諸市鋳物師屋遺跡発掘調査報告書一」，p.116-117，小諸市教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1988b）十二遺跡出土炭化材の樹種同定．「鋳師屋遺跡群 十二遺跡長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書一」，p.393-399，御代田町教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1989a）広畑遺跡出土炭化材の樹種同定．「広畑遺跡 一長野県北佐久郡御代田町広畑遺跡発掘調査報告書一」，p.35-40，御代田町教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1989b）根岸遺跡出土炭化材の樹種同定．「長野県北佐久郡御代田町大字御代田所在 鋳師屋遺跡群 根岸遺跡発掘調査報告書」，p.291-293，御代田町教育 委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1991）関口 A・B 遺跡出土材の樹種同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集「関口 A・関口 B・下柏原」，p.245-254，小諸市教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1992）下芝宮遺跡・下聖端遺跡炭化材同定報告．佐久市埋蔵文化財調査報告書第 9 集「国道141号線関係遺跡（本文編）」，p.355-391，佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化 財センター.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1993a）自然科学分析からみた人々の生活（1）．慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第 1 卷 総論」，p.347-370，慶應義塾.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1993b）郷土遺跡出土炭化材の同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集「郷土」，p.52-57，小諸市教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1994a）過去の植物利用について．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集「東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原 一長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書一」，p.613-624，小諸市教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1994b）大塚原遺跡における平安時代の住居構築材．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集「大塚原遺跡群 大塚原（第二次） 一長野県小諸市大塚原遺跡発掘調査報告 書一」，p.81-84，小諸市教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1994c）H-4号住居址から出土した炭化構築材の樹種．「塩野西遺跡群 塚田遺跡」，p.344-353，長野県御代田町教育委員会.

- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1995) 第1号住居址出土の炭化材の樹種. 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
「三子塚遺跡群 十石坂上遺跡 -長野県小諸市十石坂上遺跡発掘調査報告書-」, p.12-13, 小諸市教育委員会.
- 柴田桂太編 (1958) 資源植物事典. 904p., 北隆館.
- 高橋 敦 (2000) 各時代の木製品や住居構築材等の用材. 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書54
「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28 -更埴市内その7- 更埴条里遺跡・屋代遺跡群
(含む大境遺跡・窪河原遺跡) -総論篇-」, p.228-235, 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター.
- 高橋 敦・辻本崇夫 (1998) 古墳時代中期の木製品および住居構築材の用材. 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書29「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25 -更埴市内その4- 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 (含む大境遺跡・窪河原遺跡) -弥生・古墳時代編-」, p.225-228, 日本道路公団東京第二建設局・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター.
- 高橋 敦・辻本崇夫 (1999) 木製品・自然木、炭化材の樹種. 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 -更埴市内その5- 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 (含む大境遺跡・窪河原遺跡) -古代1編- 本文」, p.333-337, 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター.
- 氏原暉男・廣瀬玉紀 (1992) 下聖端遺跡出土炭化種子について. 「佐久市埋蔵文化財調査報告書第9集 国道141号線関連遺跡 -本文編-」, p.400-417, 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター.

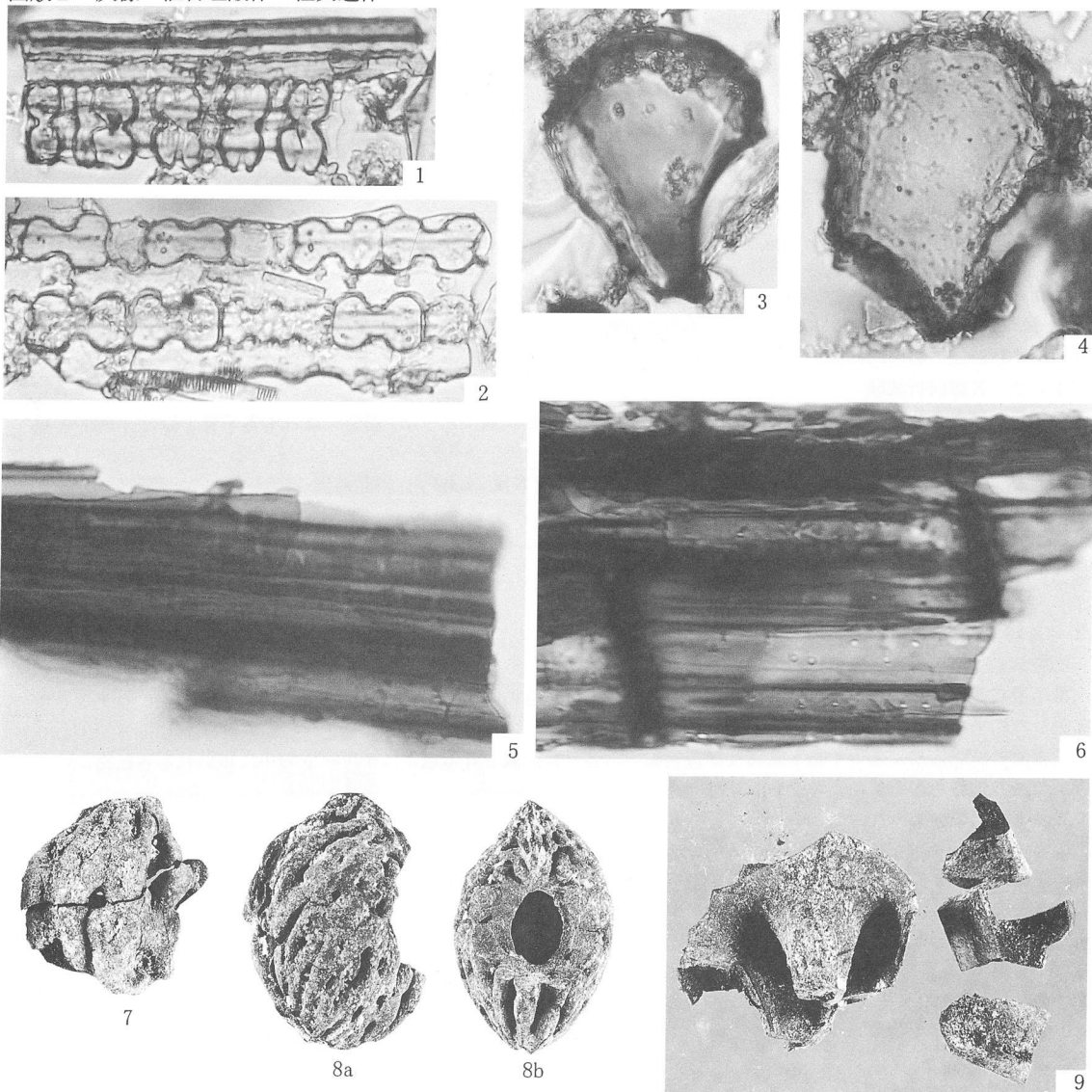
図版1 炭化材



1. カバノキ属 (試料番号19)
 2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (試料番号14)
 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (試料番号10)
 a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μm : a
 200 μm : b, c

図版2 灰像・植物珪酸体・種実遺体



- 1. イネ属短細胞列 (試料番号14)
- 2. ススキ属短細胞列 (試料番号14)
- 3. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号14)
- 4. ヨシ属機動細胞珪酸体 (試料番号14)
- 5. 不明組織片 (試料番号5)
- 6. 不明組織片 (試料番号7)
- 7. モモ (試料番号1)
- 8. モモ (試料番号3)
- 9. オニグルミ (試料番号9)

50 μ m
 (1-6)

1cm
 (7-9)

鑑定報告

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖

X線回折試験及び化学分析試験

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°, 計数時間: 0.5秒。

1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15kV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

2 X線回折試験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

2-1 組成分類

1) Mont-Mica-Hb三角ダイヤグラム

第1図に示すように三角ダイヤグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont-Mica-Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトはMont/Mont+Mica+Hb*100でパーセントとして求め、同様にMica, Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の1~4はMont, Mica, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

2) Mont-Ch, Mica-Hb菱形ダイヤグラム

第2図に示すように菱形ダイヤグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、

a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Chの2成分が含まれない、c) Mica, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイヤグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch*100と計算し、Mica, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイヤグラム内にある1~7はMont, Mica, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Chのうち3成分、各

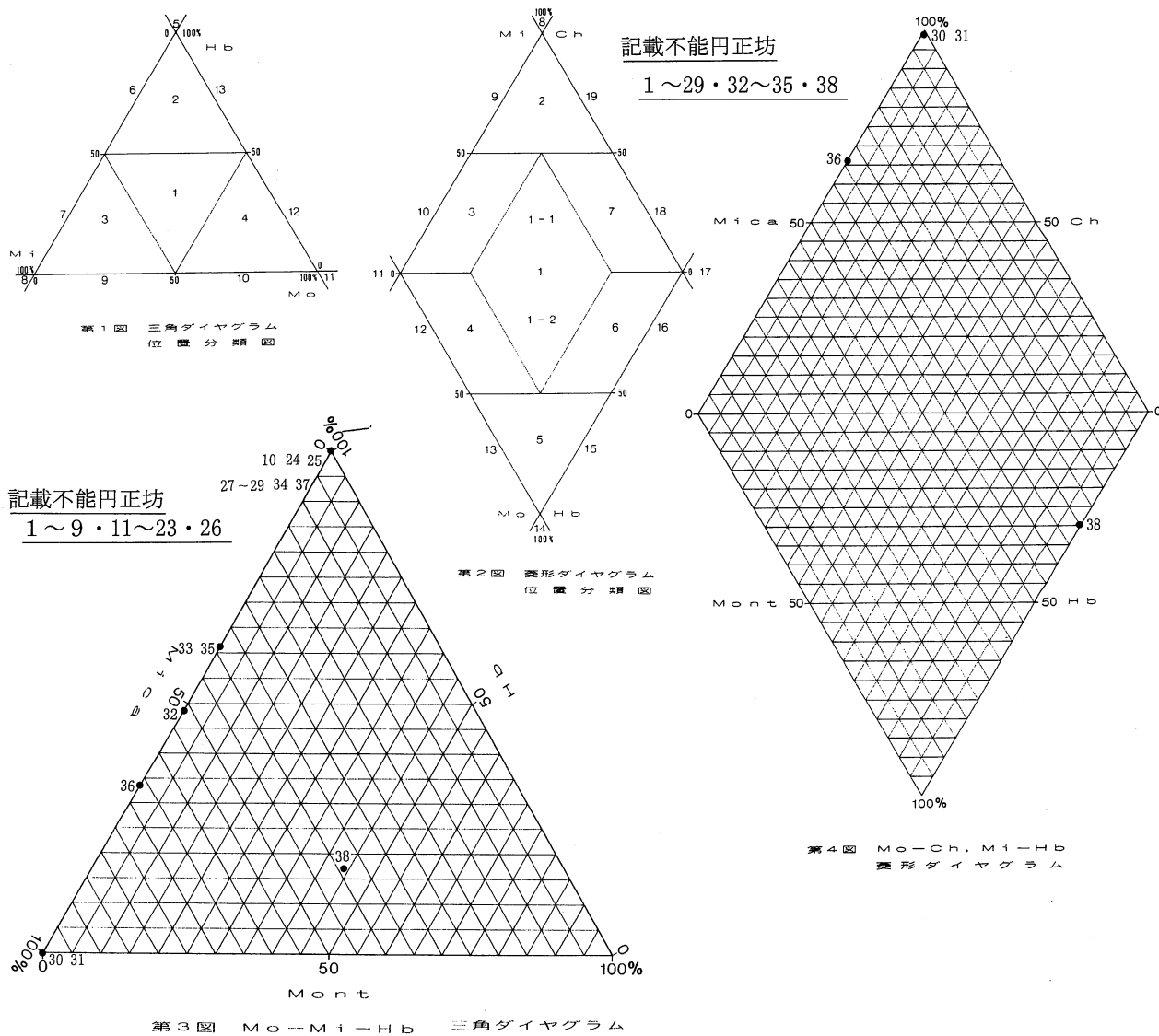
頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。

3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法（10元素全体で100%になる）で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてSiO₂-Al₂O₃図、Fe₂O₃-MgO図、K₂O-CaO図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

付 図 1



3 X線回折試験結果(須恵器十土師器)

3-1 タイプ分類

第1表胎土性状表には円正坊遺跡から出土した須恵器と土師器が記載してある。

第3表タイプ分類一覧表に示すように胎土はA～Gの7タイプに分類された。

Aタイプ：Mont,Mica,Hbの3成分を含み、Ch1成分に欠ける。

Bタイプ：Hb1成分を含み、Mont,Mica,Chの3成分に欠ける。

Cタイプ：Mica,Hbの2成分を含み、Mont,Chの2成分に欠ける。

Dタイプ：Mica,Hb,Chの3成分を含み、Mont1成分に欠ける。

Eタイプ：Mica,Hbの2成分を含み、Mont,Chの2成分に欠ける。Cタイプと組成的には類似するが検出強度が異なる。

Fタイプ：Mica,Chの2成分を含み、Mont,Hbの2成分に欠ける。

Gタイプ：Mont,Mica,Hb,Chの4成分に欠ける。

土師器の場合は主に、 $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O$ (アロフェン質ゲル) で構成される。須恵器の場合は高温で焼成されているため、鉱物が熱により分解し、ガラスに変質している。そのため4成分が検出されない。

須恵器は高温で焼成されているため鉱物はガラスに変質し、Gタイプとなっている。土師器は焼成温度が須恵器と比較して低く、鉱物が残っており、A～Gの7タイプが検出される。土師器で最も多いタイプはBタイプで16個のうち7個が該当する。個体数の多さから推察して在地あるいは在地近傍の可能性が高い。C、F、Gの各タイプは各2個、A、D、Eの各タイプは各1個で構成される。円正坊-31は粘土で、この粘土と鉱物組成が一致するものは円正坊-30の1個だけである。

3-2 石英(Qt)-斜長石(P1)の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るといったことは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第5図Qt-P1図(総合図)には円正坊遺跡から出土した須恵器と土師器が記載してある。(SiO₂-Al₂O₃の相関から須恵器と土師器は次のように分類し、名称をつけた。須恵器は須恵器IとIIが主体で、その他に須恵器III～VIに分類された。土師器は土師器I～Vに分類された。)

須恵器I～III、V、VI：Qtが700～2400、P1が0～200の領域に集中する。

須恵器IV：Qtが400～3200、P1が100～300の領域に集中する。

土師器I～IV：Qtが400～3600、P1が200～800の領域に分散して分布する。

土師器V：円正坊-38はP1の強度が高く異質である。

須恵器の中では、円正坊-18はP1の強度が高く、円正坊-15はQtの強度が高く、異質である。

4 化学分析結果(須恵器十土師器)

第2表化学分析表には円正坊遺跡から出土した須恵器と土師器が記載してある。

分析結果に基づいて第6図SiO₂-Al₂O₃図(総合図)、第7図Fe₂O₃-MgO図(総合図)、第8図K₂O-CaO図(総合図)を作成した。

4-1 SiO₂-Al₂O₃の相関について

第6図SiO₂-Al₂O₃図(総合図)に示すように須恵器は須恵器I~VI、土師器は土師器I~Vに分類された。

須恵器I：SiO₂が64~69%、Al₂O₃が21~25%の領域に集中する。

須恵器II~IV：SiO₂が62~69%、Al₂O₃が18~22%の領域に集中する。

須恵器V：SiO₂が70%と高く、異質である。

須恵器VI：SiO₂が74%と最も高く、異質である。

土師器I：SiO₂が53~58%、Al₂O₃が19~22%の領域に集中する。

土師器II：SiO₂が59~63%、Al₂O₃が23~28%の領域に集中する。

土師器III：SiO₂が60~63%、Al₂O₃が18~22%の領域に集中する。

土師器IV：SiO₂が65~69%、Al₂O₃が16~21%の領域に集中する。

土師器V：円正坊-38は土師器IVの領域に混在する。

須恵器と土師器は各々領域を異にし、関連性は認められない。

4-2 Fe₂O₃-MgOの相関について

第7図Fe₂O₃-MgO図(総合図)に示すように須恵器は須恵器IとII~IV、V、VI、土師器は土師器I、土師器II~IV、土師器Vの領域に分類される。

土師器II~IVは須恵器IIと領域が重複する。

須恵器I：Fe₂O₃が3~7%、MgOが0~0.2%の領域に集中する。

須恵器II~IV：Fe₂O₃が7~12%、MgOが0~0.3%の領域に集中する。

須恵器V：Fe₂O₃が4%、MgOが0%で、須恵器Iの領域にある。

須恵器VI：Fe₂O₃が6.5%、MgOが5%と高く異質である。

土師器I：Fe₂O₃が13~18%、MgOが0.2~1.2%の領域に集中する。

須恵器II~IV：Fe₂O₃が7~12%、MgOが0~0.3%の領域に集中する。

土師器V：円正坊-38はMgOが1.4%と高く、異質である。

円正坊-27、31はMgOが高く、円正坊-26はFe₂O₃が14%と高く、いずれも異質である。

4-3 K₂O-CaOの相関について

第8図K₂O-CaO図(総合図)に示すように須恵器I~VI、土師器I~Vに分類される。

須恵器I：K₂Oが1.8~2.6%、CaOが0~0.3%の領域に集中する。

須恵器II：K₂Oが2.8~4.3%、CaOが0~0.5%に分布する。

須恵器III：K₂Oが1.5~2.3%、CaOが0.4~0.8%の領域に集中する。

須恵器IV：K₂Oが0.5~2.0%、CaOが0.5~1.2%に分布する。

須恵器V：須恵器IIの領域に共存する。

須恵器VI：K₂Oが1.9%、CaOが0.3%にあり、異質である。

土師器I：K₂Oが1.6~2.4%、CaOが0.7~1.8%の領域に分布する。

土師器II：K₂Oが0.7~2.2%、CaOが1.0~1.7%の領域に分布する。

土師器IVの円正坊-24と27が混在する。

土師器III：K₂Oが1.9~3.5%、CaOが0.7~2.3%の領域に分布する。

土師器IV：K₂Oが1.5~2.6%、CaOが0.5~1.2%の領域に集中する。

土師器V：円正坊-38は土師器IVの領域に混在する。

5 まとめ

5-1 須恵器の分析結果

須恵器は佐久平周辺の古窯跡群と陶邑窯跡群、美濃須衛窯跡群、猿投窯跡群と比較対比した。その結果は第4表組成分類表に示す通りである。

- 1) 須恵器Ⅰは陶邑窯跡群のタイプⅠの胎土に近く、須恵器Ⅱは陶邑窯跡群のタイプⅡの胎土に近い。
- 2) 須恵器ⅢとⅣは陶邑窯跡群、美濃須衛、猿投窯跡群及び佐久平の古窯跡群の須恵器とは組成が異なり、別の古窯跡で焼成されていると考えられる。
- 3) 須恵器Ⅴの円正坊-2は猿投窯跡群の組成に近い。
- 4) 須恵器Ⅵの円正坊-22は依田窯跡群：原山窯跡の胎土の組成に近い。

5-2 土師器の分析結果

- 1) 土師器は須恵器とは異なる組成をしており、須恵器との関連性は薄い。
- 2) 土師器Ⅰは甕が主体で、生産地は不明である。
- 3) 土師器Ⅱは甕が主体で、胎土はBタイプで、在地近傍の土器の胎土の鉱物組成と近く、在地近傍と推察される。
- 4) 土師器Ⅲは円正坊-31の粘土と化学組成が近く、在地の可能性はある。
- 5) 土師器Ⅳは坏が主体で、タイプ分類ではBタイプに該当し、検出された個体数の多さから推察して在地近傍の可能性が高い。
- 6) 土師器Ⅴの円正坊-38はPⅠの強度が高く、MgOの値も高く、異質である。

引用文献

長野県埋蔵文化財センター 1999 「更埴条理遺跡屋代遺跡群」 古代1 編本文

第1表 胎土性状表

試料 No	タイプ 分類	粘土鉱物および岩石鉱物											備考								
		Mo:Mr:Hb	Mo:Ch:Mt:Hb	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	器種	器型	時期	備考	
円正坊-1	G	14	20					535	252	386						86		須恵器	長頸壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-2	G	14	20					2194	91	1014						156		須恵器	壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-3	G	14	20					2146	130	828						102		須恵器	短頸壺	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内との比較
円正坊-4	G	14	20					983	93	413						197		須恵器	壺	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内との比較
円正坊-5	G	14	20					1073	81	283						186		須恵器	壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-6	G	14	20					1526	158	268						92		須恵器	高坏坏部	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-7	G	14	20					1974	69	759						208		須恵器	坏身	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内、土師器との比較
円正坊-8	G	14	20					2055	88	130						148		須恵器	はそう	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内、土師器との比較
円正坊-9	G	14	20					2117	66	918						129		須恵器	坏身	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内、土師器との比較
円正坊-10	B	5	20				162	2918	240	138								須恵器	坏蓋	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内、土師器との比較
円正坊-11	G	14	20					1690	89	655						192		須恵器	壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-12	G	14	20					1238	93	151						161		須恵器	はそう	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-13	G	14	20					1917	75	536						250		須恵器	はそう	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内との比較
円正坊-14	G	14	20					2124	64	749						255		須恵器	坏身	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内との比較
円正坊-15	G	14	20					3234	57	91				95		93		須恵器	坏蓋	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内との比較
円正坊-16	G	14	20					1763	69	566						221		須恵器	壺	古墳中期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-17	G	14	20					1454	77	910				85		108		須恵器	蓋	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-18	G	14	20					1939	243	625				167		127		須恵器	蓋	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-19	G	14	20					1445	115	562				169		188		須恵器	壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-20	G	14	20					1018	145	681				131		119		須恵器	壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-21	G	14	20					2239	71	370				186		183		須恵器	瓶	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-22	G	14	20					2362	145	150				59				須恵器	坏	平安	在地か、八重原窯・猿投・美濃との比較
円正坊-23	B	14	20					1895	325	197								土師器	坏	古墳中期	搬入品か
円正坊-24	B	5	20				164	1530	600	259								土師器	坏	古墳中期	搬入品模倣品か
円正坊-25	B	5	20				142	2586	629	132								土師器	坏	古墳中期	在地か
円正坊-26	G	14	20					1828	337	173								土師器	高坏	古墳中期	搬入品か
円正坊-27	B	5	20				183	1625	471	172								土師器	鉢	古墳中期	在地か搬入品か
円正坊-28	B	5	20				64	633	695	165								土師器	壺	古墳中期	在地か
円正坊-29	B	5	20				212	512	1027	185								土師器	丸胴壺	古墳中期	在地か
円正坊-30	F	8	8					1661	313	169						73		土師器	丸胴壺	古墳中期	搬入品か
円正坊-31	F	8	8					1884	450	190								粘土		古墳中期	H12住居址出土
円正坊-32	E	7	20				108	1406	418	235								土師器	坏	古墳後期	在地か
円正坊-33	C	6	20				57	1890	329	174								土師器	坏	古墳後期	搬入品か
円正坊-34	B	5	20				108	1201	751									土師器	長胴壺	古墳後期	在地か
円正坊-35	C	6	20				85	2561	525	89								土師器	丸胴壺	古墳後期	在地か
円正坊-36	D	7	9				171	85	168	63						101		土師器	丸胴壺	古墳後期	在地か
円正坊-37	B	5	20					735	435	184								土師器	小型壺	古墳後期	搬入品か
円正坊-38	A	1	16				284	3241	874						91			土師器	長胴壺	古墳後期	混入物の粒子が粗く、少数例である。搬入品か。

Mont: モンモロロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 (Ch:Fe 一次反射, Ch:Mg 二次反射) Qt: 石英 Pl: 斜長石
Mullite: ムライト K-fels: カリ長石 Halloy: ハロイサイト Kaol: カオリナイト Pyrite: 黄鉄鉱 Au: 普通輝石 Py: 紫輝石
Crist: クリスタバライト

第2表 化学分析表

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NI0	Total	器種	器型	時期	備考	法記番号
円正坊-1	0.88	0.04	21.34	64.12	0.72	1.13	1.18	0.12	10.26	0.21	100.00	須惠器	長頸壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H3-10
円正坊-2	0.22	0.00	17.29	74.05	3.39	0.11	0.89	0.00	4.05	0.00	10.00	須惠器	壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H4-7
円正坊-3	0.88	0.01	20.49	65.61	1.82	0.58	1.31	0.18	8.88	0.25	10.00	須惠器	短頸壺	古墳中期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H5-拓
円正坊-4	0.67	0.13	24.10	65.96	3.42	0.37	0.98	0.21	4.17	0.00	100.01	須惠器	壺	古墳中期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H5-13
円正坊-5	0.95	0.00	19.10	68.61	2.91	0.18	0.83	0.25	7.06	0.11	100.00	須惠器	壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H7-拓
円正坊-6	0.78	0.00	23.38	65.39	1.71	0.57	1.11	0.00	6.93	0.12	99.99	須惠器	高坏坏部	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H10-3
円正坊-7	0.46	0.00	24.81	65.74	2.06	0.21	0.97	0.23	5.25	0.26	99.99	須惠器	坏身	古墳中期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H12-51
円正坊-8	0.59	0.14	20.81	66.81	2.85	0.18	1.11	0.17	7.27	0.07	100.00	須惠器	はそう	古墳中期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H12-52
円正坊-9	0.00	0.00	22.83	65.85	1.90	0.06	0.90	0.08	8.38	0.00	100.00	須惠器	坏身	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H13-19
円正坊-10	1.14	0.06	20.31	63.12	1.90	0.61	1.11	0.44	11.31	0.00	100.00	須惠器	坏壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内、土師器との比較	H13-20
円正坊-11	0.07	0.00	23.03	65.80	2.29	0.20	1.14	0.19	7.07	0.20	99.99	須惠器	壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H23-拓
円正坊-12	0.83	0.23	18.95	66.66	4.05	0.36	1.33	0.00	7.42	0.18	100.01	須惠器	はそう	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H23-拓
円正坊-13	0.40	0.00	23.13	65.02	2.32	0.16	0.85	0.35	7.78	0.00	100.01	須惠器	はそう	古墳中期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H25-拓
円正坊-14	0.31	0.00	22.77	67.27	2.01	0.25	0.90	0.00	6.49	0.00	100.00	須惠器	坏身	古墳中期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H30-1
円正坊-15	0.21	0.00	22.82	66.66	2.30	0.05	1.08	0.19	6.51	0.17	99.99	須惠器	坏壺	古墳中期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H30-2
円正坊-16	0.07	0.00	23.12	66.52	1.99	0.03	0.97	0.12	6.99	0.18	99.99	須惠器	壺	古墳中期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	H301区
円正坊-17	0.07	0.00	24.55	65.82	2.35	0.24	0.90	0.30	5.58	0.18	99.99	須惠器	蓋	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	I-H1-1
円正坊-18	0.48	0.00	22.87	66.72	2.48	0.29	0.87	0.04	6.25	0.00	100.00	須惠器	蓋	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	I-H2-1
円正坊-19	0.94	0.04	19.23	67.07	2.08	0.57	1.46	0.40	8.21	0.00	100.00	須惠器	壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	I-H2カムド
円正坊-20	1.43	0.00	22.05	64.12	1.80	0.83	1.15	0.17	8.45	0.00	100.00	須惠器	壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	V-H1-拓
円正坊-21	0.60	0.00	22.27	68.71	2.47	0.30	0.82	0.00	4.76	0.07	100.00	須惠器	瓶	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較	V-H1-拓
円正坊-22	0.63	0.51	19.03	69.84	1.86	0.33	1.30	0.37	6.13	0.00	100.00	須惠器	坏	平安	在地か、八重原窯・猿投・美濃との比較	H24-1
円正坊-23	1.09	0.00	20.20	66.53	1.77	0.59	0.68	0.44	8.71	0.00	100.01	土師器	坏	古墳中期	搬入品か	H12-53
円正坊-24	0.93	0.00	19.44	68.23	0.99	1.29	1.33	0.00	7.80	0.00	100.01	土師器	坏	古墳中期	搬入品織物品か	H12-49
円正坊-25	0.85	0.00	16.67	68.79	1.77	0.80	1.08	0.16	9.68	0.19	99.99	土師器	坏	古墳中期	在地か	H12-41
円正坊-26	0.86	0.00	18.93	61.33	2.05	0.85	1.05	0.21	14.74	0.00	100.02	土師器	高坏	古墳中期	搬入品か	H12-28
円正坊-27	1.52	0.52	19.96	66.83	1.45	1.55	1.13	0.00	6.99	0.05	100.00	土師器	鉢	古墳中期	在地か搬入品か	H12-54
円正坊-28	1.83	0.00	21.60	62.10	3.19	2.16	1.37	0.00	7.58	0.17	100.00	土師器	壺	古墳中期	在地か	H12-31
円正坊-29	1.15	0.00	24.57	60.49	1.95	1.68	1.12	0.09	8.93	0.00	99.98	土師器	丸胴壺	古墳中期	在地か	H30-3
円正坊-30	0.97	0.26	19.30	57.16	1.88	0.93	0.96	0.36	18.09	0.08	99.99	土師器	丸胴壺	古墳中期	搬入品か	H14-28
円正坊-31	0.89	0.39	20.73	52.90	2.19	0.95	0.83	0.23	10.87	0.03	100.01	粘土	古墳中期	H12住居址出土		
円正坊-32	1.75	0.00	20.21	65.95	1.63	0.87	1.36	0.19	8.04	0.00	100.00	土師器	坏	古墳後期	在地か	H13-15
円正坊-33	0.89	0.19	19.60	62.36	2.46	1.11	1.00	0.68	11.56	0.15	100.00	土師器	坏	古墳後期	搬入品か	H28-?区
円正坊-34	1.00	0.00	18.18	65.51	1.48	0.86	1.63	0.34	10.95	0.05	100.00	土師器	長胴壺	古墳後期	在地か	H13-検
円正坊-35	2.15	1.20	21.14	54.71	2.31	1.61	1.69	0.82	14.03	0.34	100.00	土師器	丸胴壺	古墳後期	在地か	H13-8
円正坊-36	1.14	0.67	20.15	54.00	1.96	1.26	1.06	1.99	17.15	0.62	100.00	土師器	飯	古墳後期	搬入品か	H13-5
円正坊-37	1.23	0.00	27.71	61.18	0.91	1.34	1.40	0.22	6.01	0.00	100.00	土師器	小型壺	古墳後期	在地か	H13-13
円正坊-38	1.69	1.49	16.93	66.12	2.23	1.06	0.83	0.17	9.09	0.39	100.00	土師器	長胴壺	古墳後期	搬入物の粒子が粗く、少数例である。	H28-N6.7

第3表 タイプ分類表

試料 No	タイプ 分類	備 考			
		器種	器型	時期	備 考
円正坊-38	A	土師器	長胴甕	古墳後期	混入物の粒子が粗く、少数例である。搬入品か
円正坊-10	B	須恵器	坏蓋	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内、土師器との比較
円正坊-24	B	土師器	坏	古墳中期	搬入品模倣品か
円正坊-25	B	土師器	坏	古墳中期	在地か
円正坊-27	B	土師器	鉢	古墳中期	在地か搬入品か
円正坊-28	B	土師器	甕	古墳中期	在地か
円正坊-29	B	土師器	丸胴甕	古墳中期	在地か
円正坊-34	B	土師器	長胴甕	古墳後期	在地か
円正坊-37	B	土師器	小型甕	古墳後期	在地か
円正坊-33	C	土師器	坏	古墳後期	搬入品か
円正坊-35	C	土師器	丸胴甕	古墳後期	在地か
円正坊-36	D	土師器	甌	古墳後期	搬入品か
円正坊-32	E	土師器	坏	古墳後期	在地か
円正坊-30	F	土師器	丸胴甕	古墳中期	搬入品か
円正坊-31	F	粘 土		古墳中期	H12住居址出土
円正坊-1	G	須恵器	長頸壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-2	G	須恵器	壺	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-3	G	須恵器	短頸壺	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内との比較
円正坊-4	G	須恵器	蓋	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内との比較
円正坊-5	G	須恵器	甕	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-6	G	須恵器	高坏坏部	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-7	G	須恵器	坏身	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内、土師器との比較
円正坊-8	G	須恵器	はそう	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内、土師器との比較
円正坊-9	G	須恵器	坏身	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内、土師器との比較
円正坊-11	G	須恵器	甕	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-12	G	須恵器	はそう	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-13	G	須恵器	はそう	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内との比較
円正坊-14	G	須恵器	坏身	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内との比較
円正坊-15	G	須恵器	坏蓋	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内との比較
円正坊-16	G	須恵器	甕	古墳中期	陶邑・猿投・長野県内との比較
円正坊-17	G	須恵器	蓋	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-18	G	須恵器	蓋	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-19	G	須恵器	甕	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-20	G	須恵器	甕	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-21	G	須恵器	瓶	古墳後期	陶邑・猿投・美濃・長野県内との比較
円正坊-22	G	須恵器	坏	平安	在地か、八重原窯・猿投・美濃との比較
円正坊-23	G	土師器	坏	古墳中期	搬入品か
円正坊-26	G	土師器	高坏	古墳中期	搬入品か

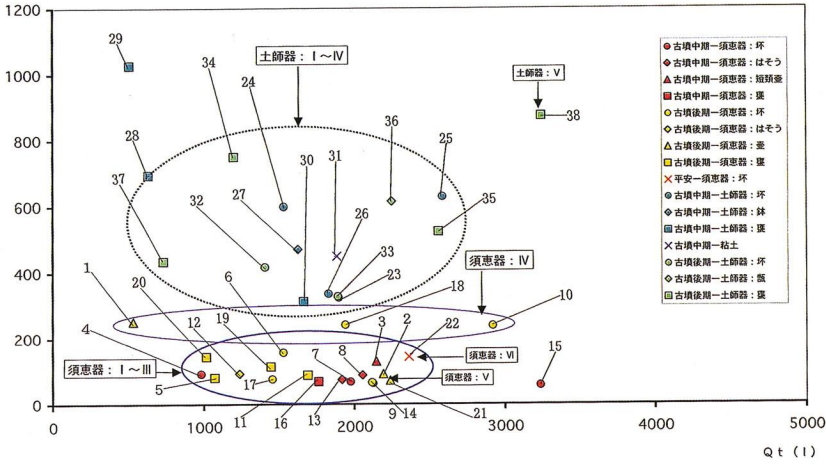
第4表 組成分類表

試料 No	タイプ 分類	備 考			
		器種	器型	時期	備 考
須恵器：I					
円正坊-4	G	須恵器	蓋	古墳中期	陶邑窯跡群：I
円正坊-7	G	須恵器	坏身	古墳中期	陶邑窯跡群：I
円正坊-9	G	須恵器	坏身	古墳後期	陶邑窯跡群：I
円正坊-11	G	須恵器	甕	古墳後期	陶邑窯跡群：I
円正坊-13	G	須恵器	はそう	古墳中期	陶邑窯跡群：I
円正坊-14	G	須恵器	坏身	古墳中期	陶邑窯跡群：I
円正坊-15	G	須恵器	坏蓋	古墳中期	陶邑窯跡群：I
円正坊-16	G	須恵器	甕	古墳中期	陶邑窯跡群：I
円正坊-17	G	須恵器	蓋	古墳後期	陶邑窯跡群：I
円正坊-18	G	須恵器	蓋	古墳後期	陶邑窯跡群：I
円正坊-21	G	須恵器	瓶	古墳後期	陶邑窯跡群：I
須恵器：II					
円正坊-5	G	須恵器	甕	古墳後期	陶邑窯跡群：II
円正坊-8	G	須恵器	はそう	古墳中期	陶邑窯跡群：II
円正坊-12	G	須恵器	はそう	古墳後期	陶邑窯跡群：II
須恵器：III					
円正坊-3	G	須恵器	短頸壺	古墳中期	不明-1
円正坊-6	G	須恵器	高坏坏部	古墳後期	不明-1
円正坊-19	G	須恵器	甕	古墳後期	不明-1
円正坊-20	G	須恵器	甕	古墳後期	不明-1
須恵器：IV					
円正坊-1	G	須恵器	長頸壺	古墳後期	不明-2
円正坊-10	B	須恵器	坏蓋	古墳後期	不明-2
須恵器：V					
円正坊-2	G	須恵器	壺	古墳後期	猿投窯跡群？
須恵器：VI					
円正坊-22	G	須恵器	坏	平安	依田窯跡群：原山窯跡
土師器：I					
円正坊-30	F	土師器	丸胴甕	古墳中期	不明
円正坊-35	C	土師器	丸胴甕	古墳後期	不明
円正坊-36	D	土師器	甌	古墳後期	不明
土師器：II					
円正坊-29	B	土師器	丸胴甕	古墳中期	Bタイプで、在地？
円正坊-37	B	土師器	小型甕	古墳後期	Bタイプで、在地？
土師器：III					
円正坊-26	G	土師器	高坏	古墳中期	粘土の組成に近く在地
円正坊-28	B	土師器	甕	古墳中期	粘土の組成に近く在地
円正坊-31	F	土師器		古墳中期	
円正坊-33	C	土師器	坏	古墳後期	粘土の組成に近く在地
土師器：IV					
円正坊-23	G	土師器	坏	古墳中期	個体数が多く在地近傍
円正坊-24	B	土師器	坏	古墳中期	個体数が多く在地近傍
円正坊-25	B	土師器	坏	古墳中期	個体数が多く在地近傍
円正坊-27	B	土師器	鉢	古墳中期	個体数が多く在地近傍
円正坊-32	E	土師器	坏	古墳後期	個体数が多く在地近傍
円正坊-34	B	土師器	長胴甕	古墳後期	個体数が多く在地近傍
土師器：V					
円正坊-38	A	土師器	長胴甕	古墳後期	MgOの値が高い

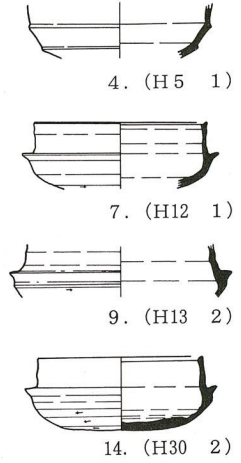
付 図 2

PI (I)

第5図Qt-P I図(総合図)

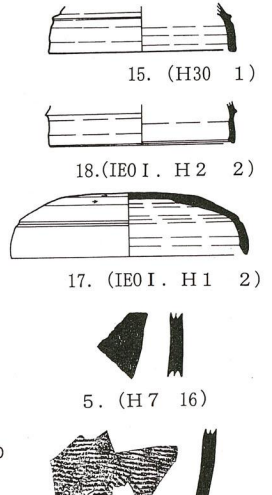
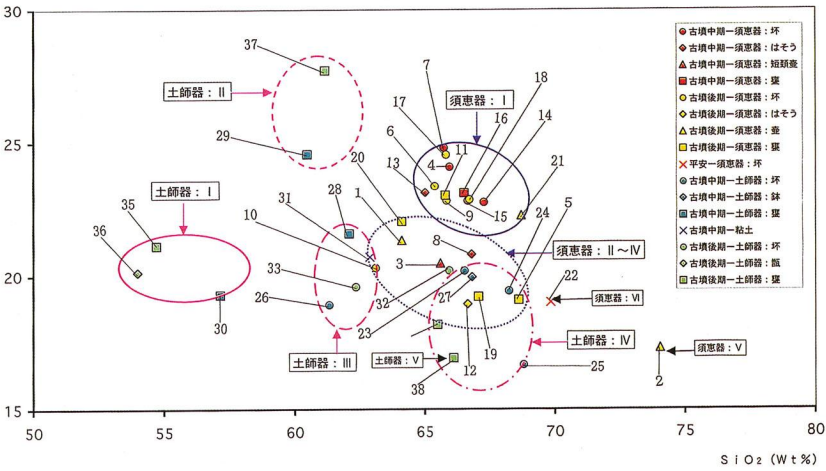


須 恵 器 : I



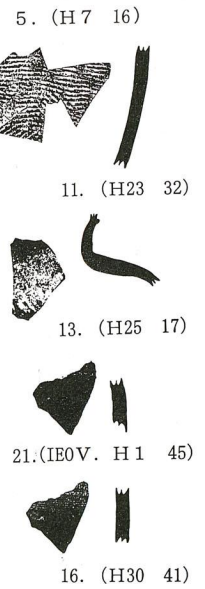
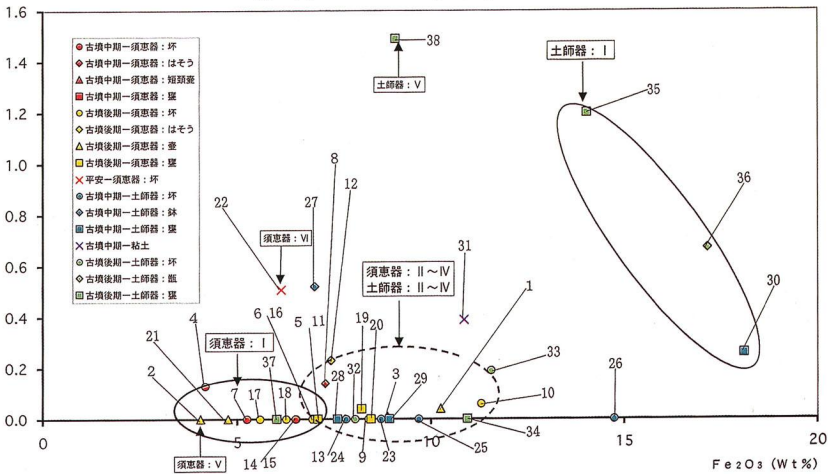
Al₂O₃ (Wt%)

第6図SiO₂-Al₂O₃図(総合図)



MgO (Wt%)

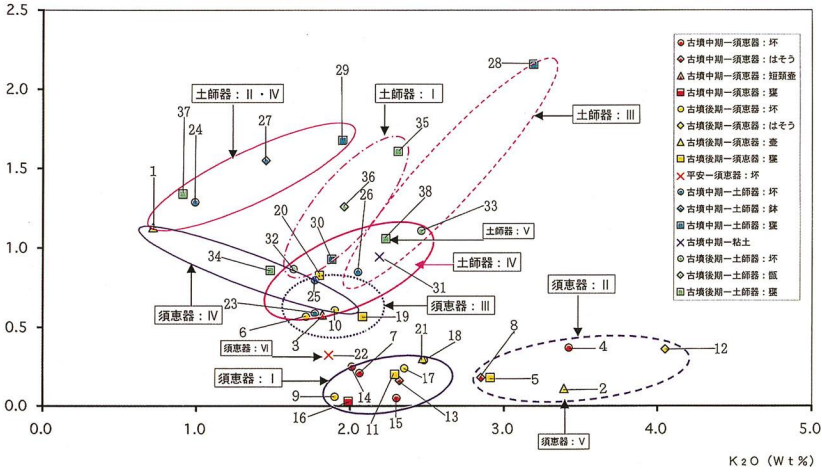
第7図Fe₂O₃-MgO図(総合図)



付図 3

CaO (Wt%)

第8図 K₂O-CaO図(総合図)



須恵器: II



8. (H12 3)



12. (H23 31)



5. (H7 16)

須恵器: III



3. (H5 18)



19. (IE0 I. H2 83)

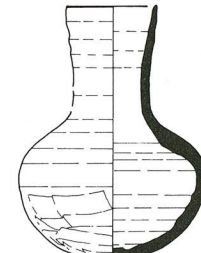


20. (IE0 V. H1 50)



6. (H10 1)

須恵器: IV



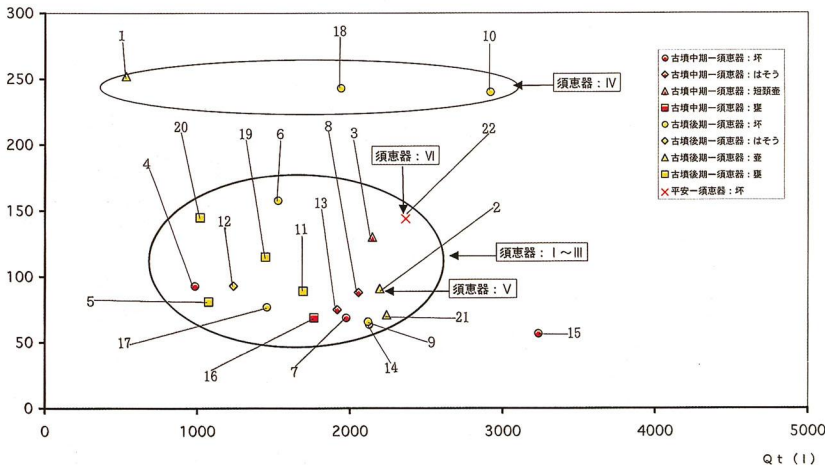
1. (H3 1)



10. (H13 1)

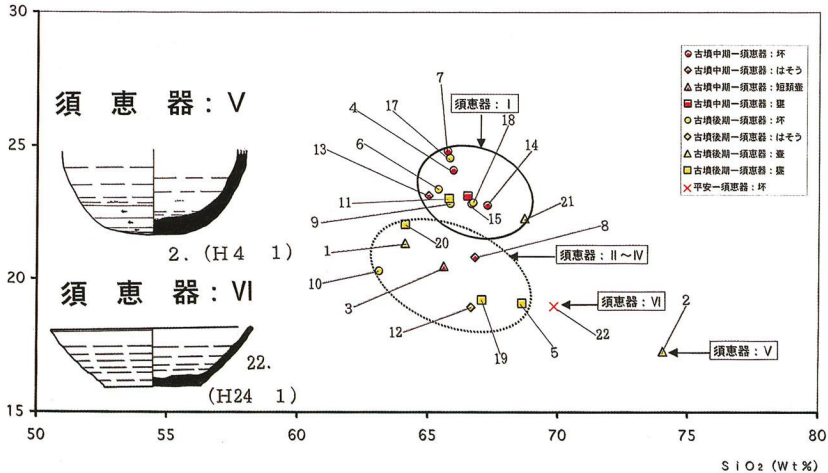
PI (1)

第5-1図 Qt-Pi図(須恵器)



Al₂O₃ (Wt%)

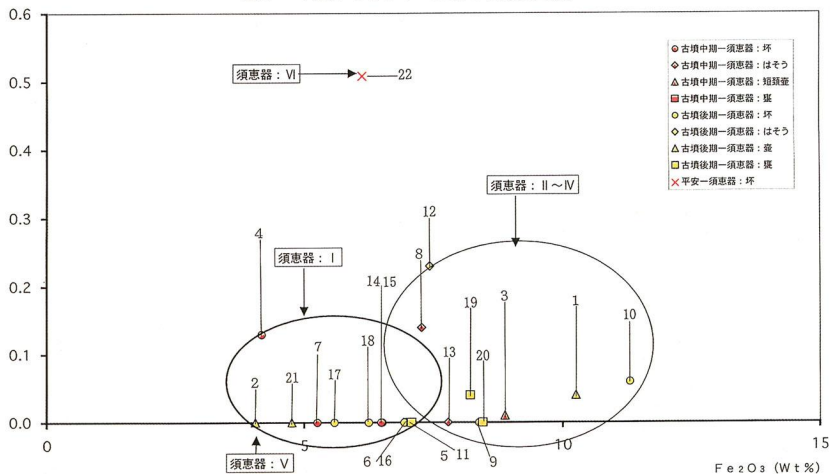
第6-1図 SiO₂-Al₂O₃図(須恵器)



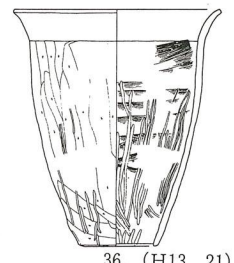
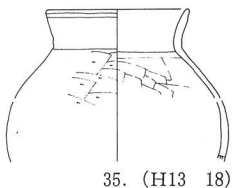
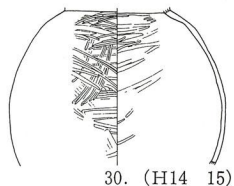
付 図 4

MgO (Wt%)

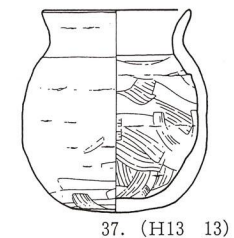
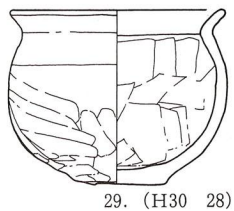
第7-1図 Fe₂O₃-MgO図(須恵器)



土 師 器 : I



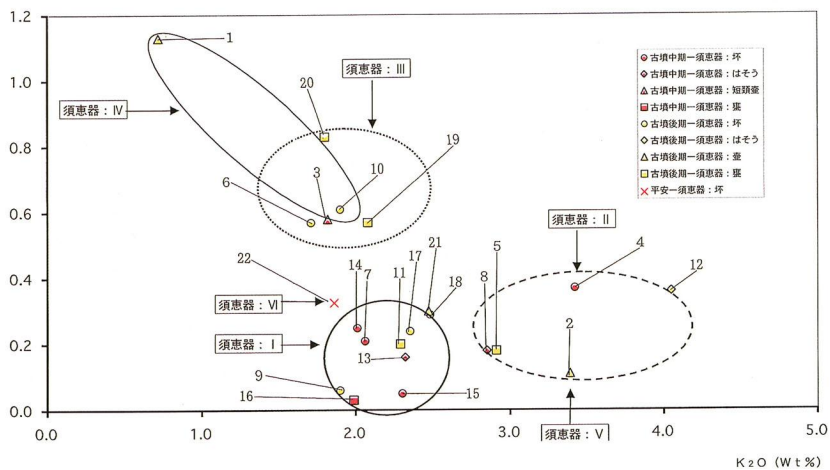
土 師 器 : II



土 師 器 : V

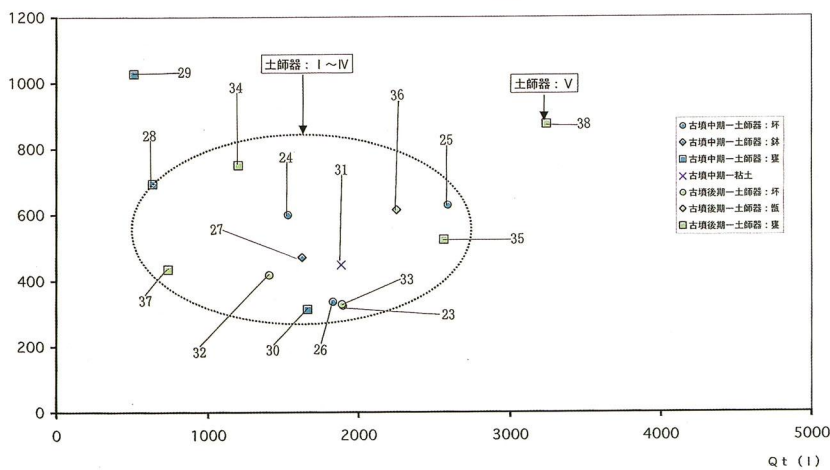
CaO (Wt%)

第8-1図 K₂O-CaO図(須恵器)



PI (t)

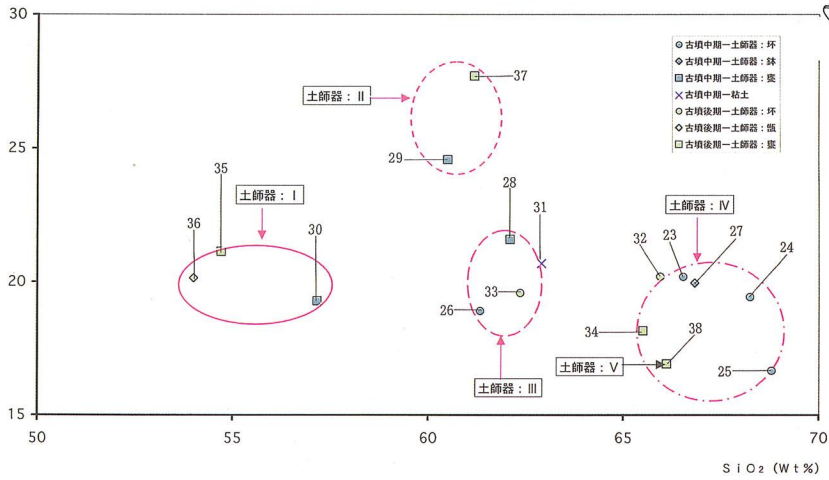
第5-2図 Qt-P I図(土師器)



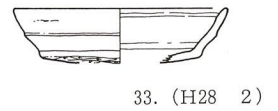
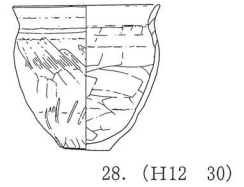
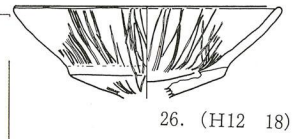
付 図 5

Al₂O₃ (Wt%)

第 6-2 図 SiO₂-Al₂O₃ 図(土師器)

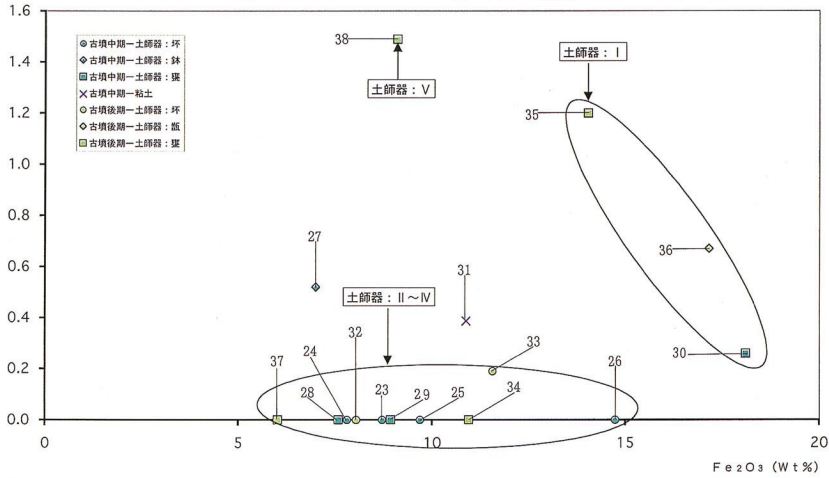


土 師 器 : III

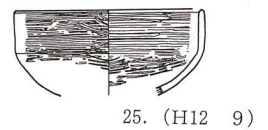
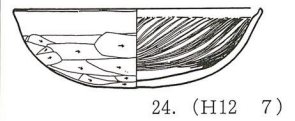
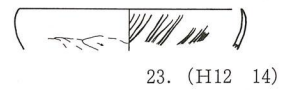


MgO (Wt%)

第 7-2 図 Fe₂O₃-MgO 図(土師器)

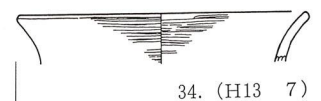
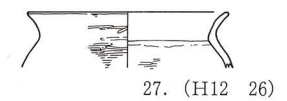
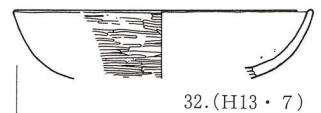
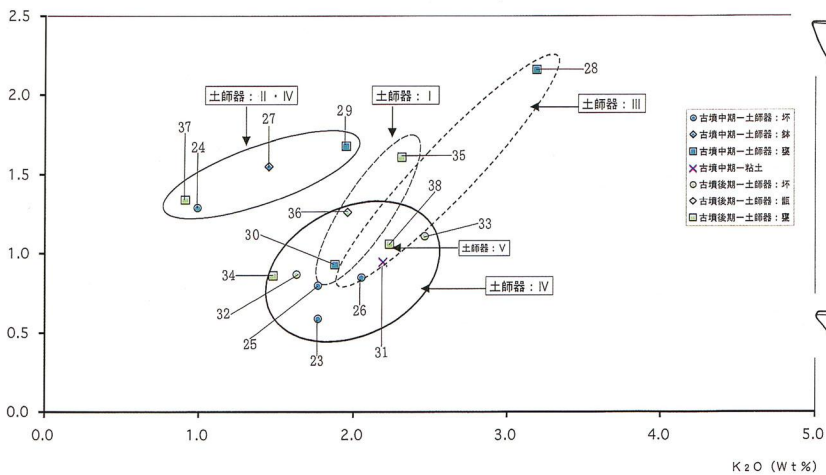


土 師 器 : IV

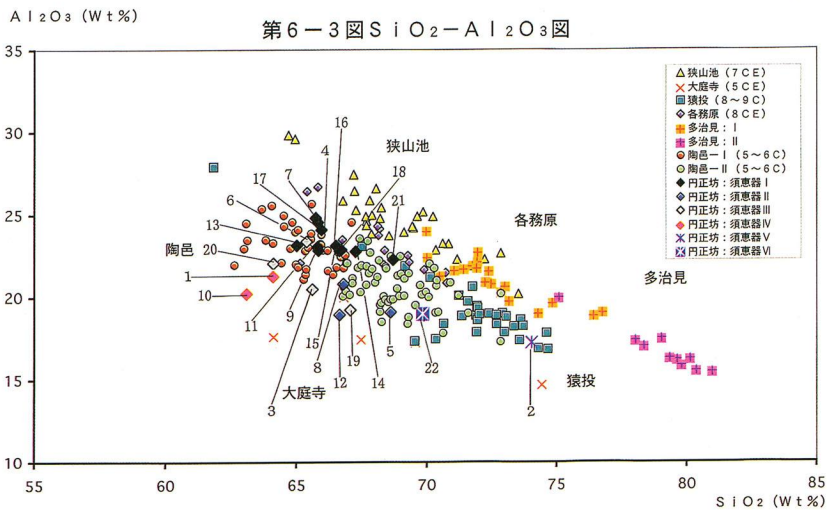
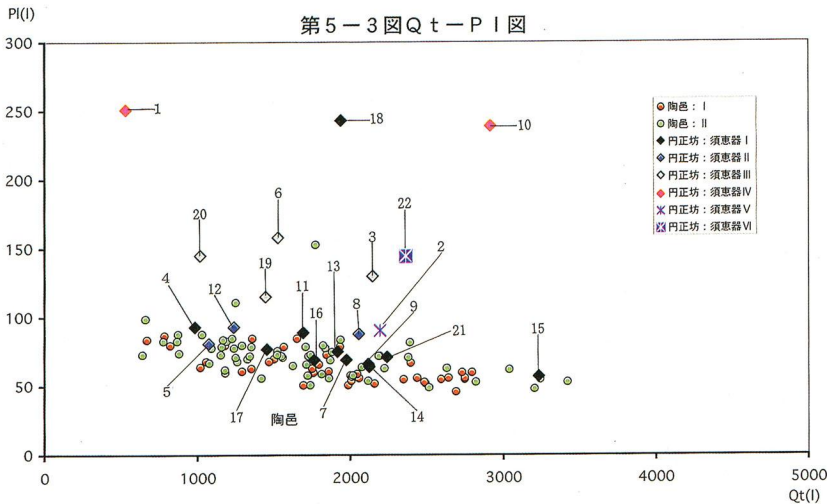
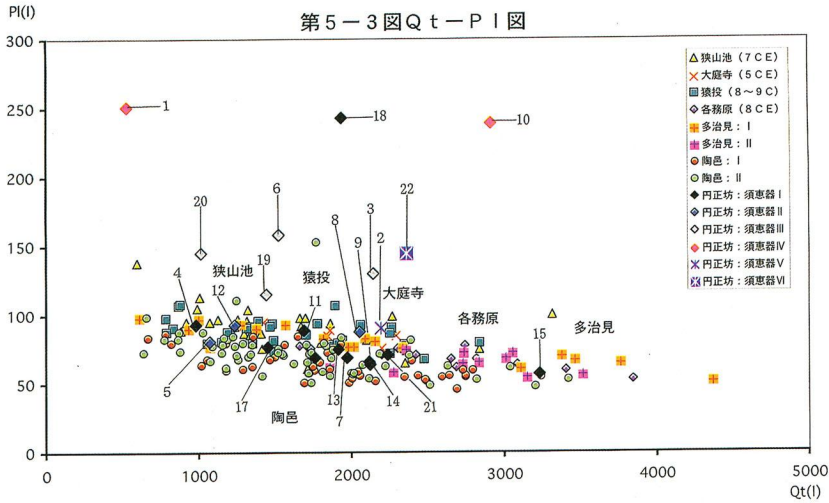


CaO (Wt%)

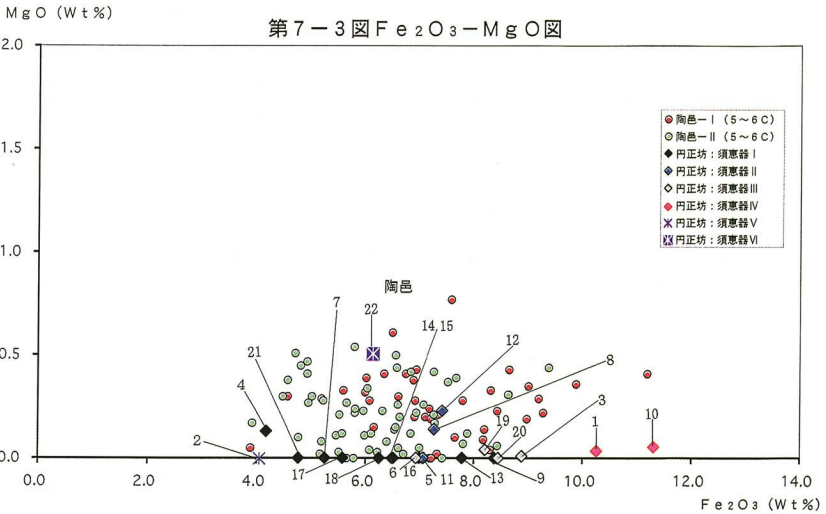
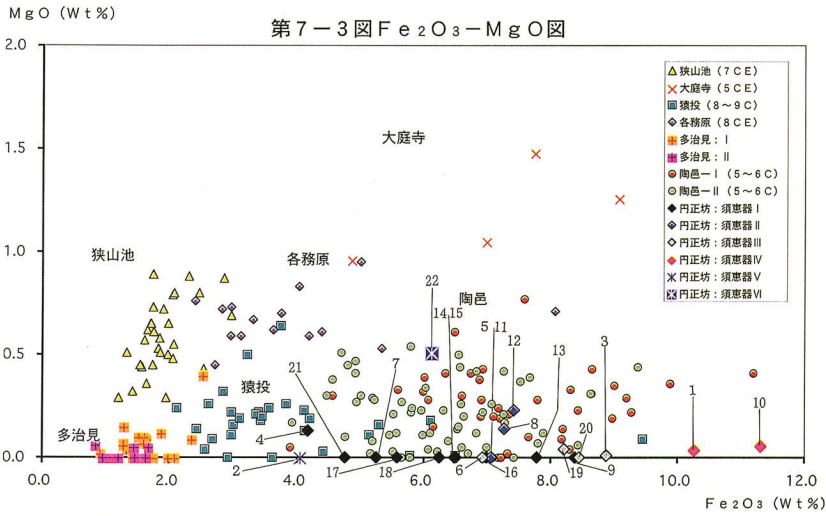
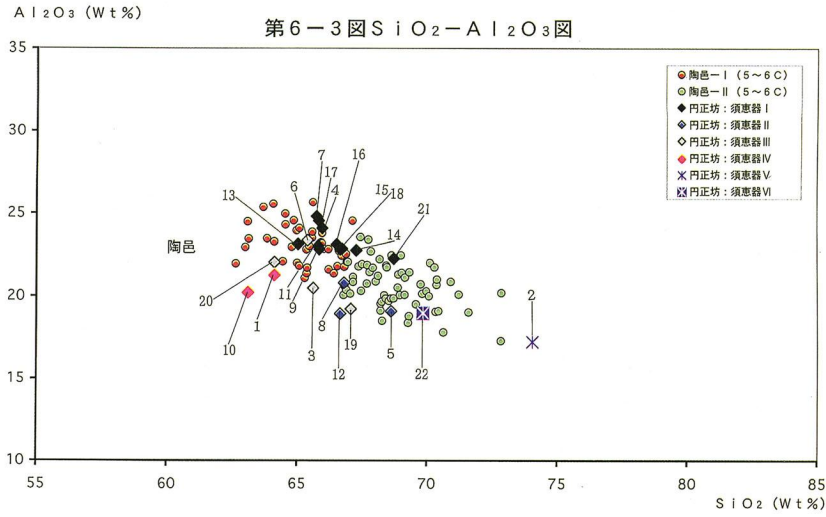
第 8-2 図 K₂O-CaO 図(土師器)



付 図 6



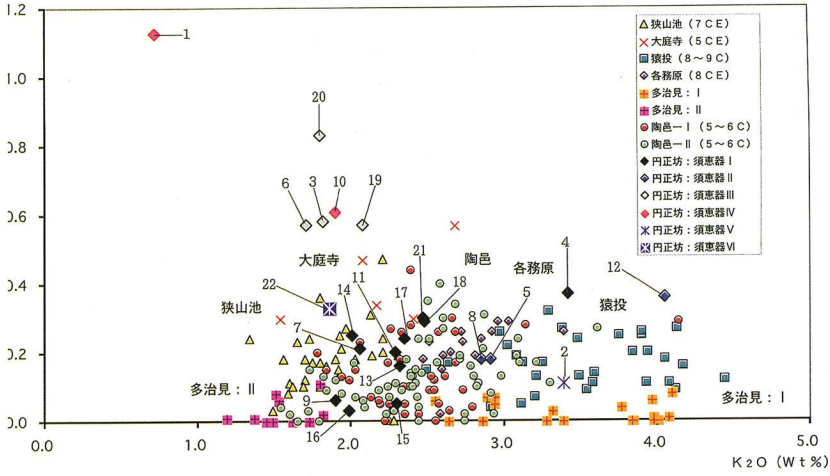
付 図 7



付 図 8

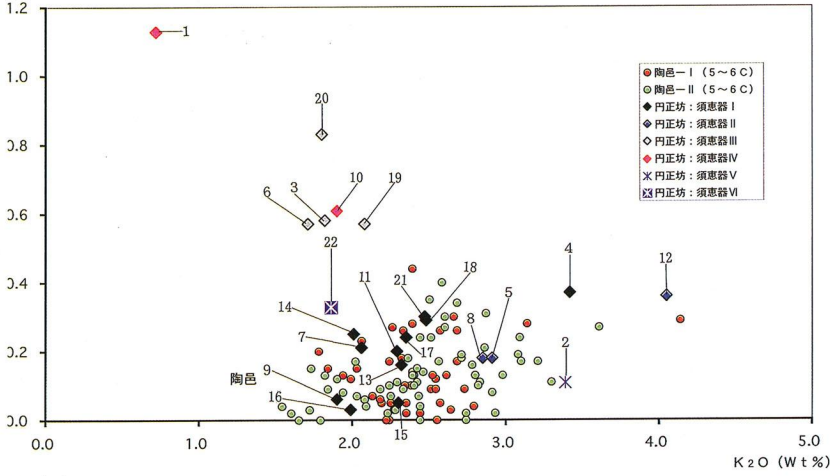
CaO (Wt%)

第 8-3 図 K₂O-CaO 図



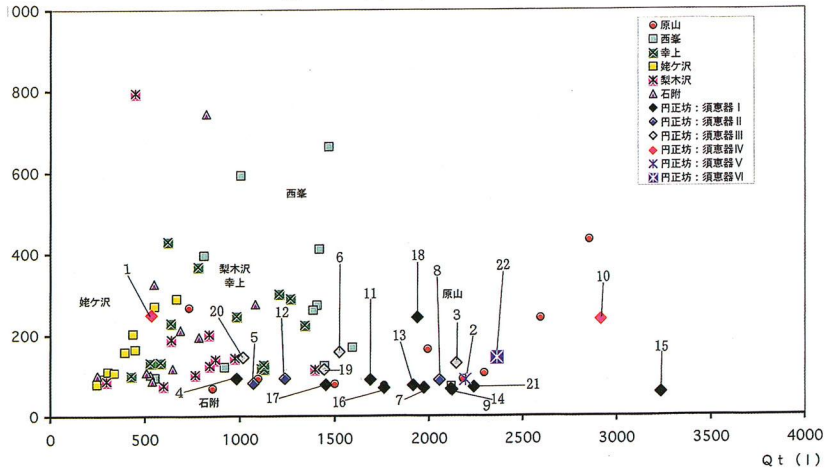
CaO (Wt%)

第 8-3 図 K₂O-CaO 図



P I (1)

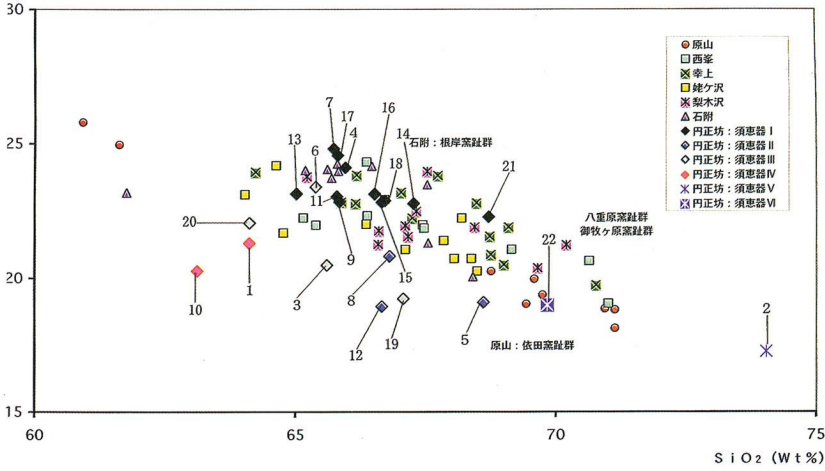
第 5-4 図 Q t - P I 図 (佐久平周辺)



付 図 9

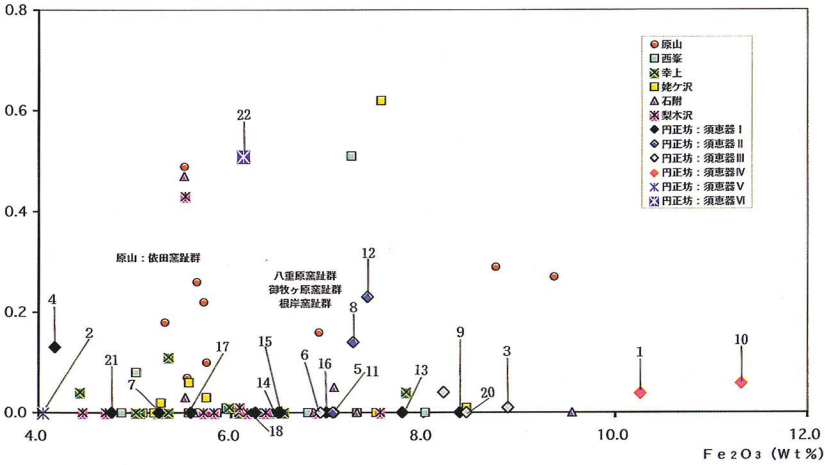
Al₂O₃ (Wt%)

第6-4図 SiO₂-Al₂O₃図(佐久平周辺)



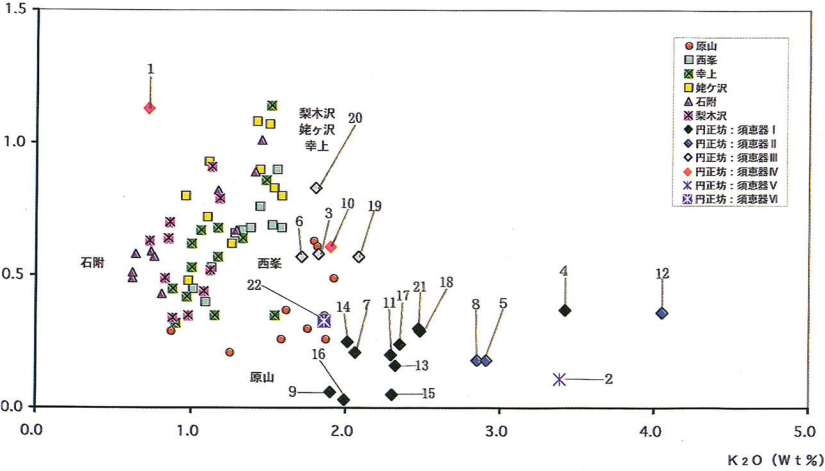
MgO (Wt%)

第7-4図 Fe₂O₃-MgO図(佐久平周辺)



CaO (Wt%)

第8-4図 K₂O-CaO図(佐久平周辺)



須 惠 器 : I

P L 1



4. (H5 1)



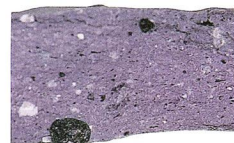
7. (H12 1)



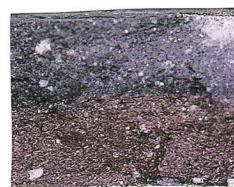
9. (H13 2)



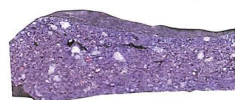
14. (H30 2)



17. (IE0 I. H 1 2)



11. (H23 32)



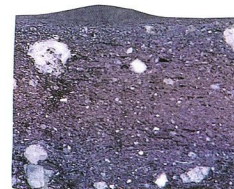
15. (H30 1)



13. (H25 17)



18. (H2 2)



21. (IE0 V. H 1 45)



6. (H10 1)



16. (H30 41)



須惠器：II



8. (H12 3)



12. (H23 31)

須惠器：III



3. (H5 18)



19. (IE0 I. H2 83)



5. (H7 16)



20. (IE0 V. H1 50)

須惠器：IV



須惠器：V



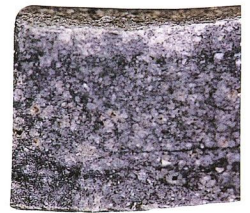
須惠器：VI



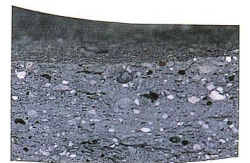
1. (H3 1)



10. (H13 1)



2. (H4 1)



22. (H24 1)

P L 2

土師器：I



30. (H14 15)

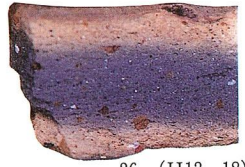


35. (H13 18)



36. (H13 21)

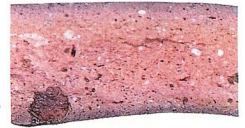
土師器：III



26. (H12 18)



28. (H12 30)



33. (H28 2)

土師器：II



29. (H30 28)



37. (H13 13)

土師器：IV

P L 4



23. (H12 14)



24. (H12 7)



32 (H13・7)



25. (H12 9)



34. (H13 7)



27. (H12 26)

土師器：V



38. (H28 8)



31. (H12 出土粘土)



H1号住居址 遺物出土状況(東より)



H1号住居址 完掘(南より)



H1号住居址 遺物出土状況(南より)



H1号住居址 掘方(南より)



H2号住居址 遺物出土状況(北より)



H2号住居址 完掘(南より)



H2号住居址 カマド完掘(南より)



H2号住居址 掘方(南より)



H3号住居址 完掘(南より)



H3号住居址 掘方(南より)



H5号住居址 完掘(南より)



H5号住居址 掘方(南より)



H4号住居址 遺物出土状況(南より)



H4号住居址 遺物出土状況(南より)



H4号住居址 完掘(南より)



H4号住居址 掘方(南より)